
流星のロックマン End of the Earth

Joker02

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロツクマン End of the Earth

【Nコード】

N2268Q

【作者名】

Joker02

【あらすじ】

メテオGを破壊してから数カ月後・・・物語はここから始まる。ときどきリボンなどの違う漫画とクロスオーバーします

00 プロローグ(前書き)

この小説はときどきクロスオーバーしたり、作者の勝手な解釈があります

00 プロローグ

<三年前>

とある戦場、雨の中ここにふたりの男・・・いや、少年がいた。ひとり血のついた銀髪、ひとりは血のついた黒い髪をしている。ふたりの周りには大人の死体が十体ほど、そして腕の中に二人と年が同じくらいの死体が一体・・・。

二人は泣いていた。

自分の無力さに・・・。

そして誓った。

自分の仲間を守るために強くなろうと。

これからは、仲間を殺してしまった贖罪のために生きていこうと。

<現在>

「コダマタウンのはずれ」

「いよいよだな。」

「・・・ああ。」

銀髪の少年・・・キラア・ゾルディックの問いに、黒い髪の少年・

・沢田剣心さわただけんしんは答えた。

「しっかし、よく私たち13歳なのに小学校入れましたね、師匠」

「まあ、特例だけだね」

銀髪をした赤い目の少女・・・幽鬼妖夢ゆつきようむの問いにこちらも銀髪をした青い目の少女・・・時雨咲夜ときぐさくやは答えた。

「さあ、ロックマンに、星河スバル達に協力するのでしょうか」

「はい／＼ええ」

二人の少年の問いに、二人は答えた

00 プロローグ（後書き）

ども Joker 02と申します

連載は不定期ですがイライラしないでくださいww

オリキャラさつそく4人も登場！

ネタ切れが心配です。

あとネタばれしないために情報をカットしますがこの小説のラスボスが出てくるゲームをやったことがないので（オイ）キャラ違かつたらしいません。

あと、ジャンプの漫画の技がそのまま出てきますが気にしないでください。

作者のネタ不足です。

01 ピンチ（前書き）

スバル、初っ端からピンチWWW

01 ピンチ

「コダマタウン」

ここはのどかなコダマタウン

今日はコダマ小学校の始業式兼進級式。

しかし・・・

『スバル~~~~~!!とつとと、起きろ~~~~~!!』

我らのヒーロー、シューティングスターロックマンこと星河スバルは新年度早々ピンチをむかえた。

彼は今まで三回（・・・まあ、正確には五回）地球を救った。

一回目は宇宙人の襲来。

二回目は復活した古代文明の暴走。

三回目はノイズの塊である流星、メテオGの接近。

地球をその三つすべての危機から仲間とともに救ったのである。

しかし、先ほど書いたように新年度早々学校に遅刻（つまり、白金ルナに怒られる）という危機をむかえていた。

ちなみに今スバルを起こそうと怒鳴っているのは彼のめざまさ・・・
もとい相棒の元AMウォーロックである。

「うう〜ん。うるさいな〜」

『やつと起きたか！オイスバル！いま何時だと思ってるんだ！』

「え？」

ただいまAM7：45（ちなみに、8：20までに登校しないと遅刻）

「・・・遅刻だ~~~~~!!」

『だから言っただろ・・・。早く飯食って行け。』

絶叫するスバルにウォーロックはあきれながら言っつ。

スバルが慌てて下に降りると、

「遅いわよスバル、ルナちゃん達は生徒会長として今日スピーチがあるからハーサルで先行ってるわよ。」

母親であるアカネに声をかけられた。

ちなみに朝ご飯はすでにあるのです。すでに猛スピードで食べている。その横では父親のダイゴが苦笑している。

【おい、ヒーローがそんなんでいいのか？】

そんな質問をしたそうであるが、今焦ってる彼に質問するのを遠慮している。

それから三分後スバルは食事から着替えまですべてこなした。

あとは、学校に行くだけ。そのとき、

「ちよつとスバル」

「ごめん、母さんまたあとで。」

あかねに呼び止められたのだが時間ぎりぎりなのでそのまま外に出る。

そして、

「ウオーロック、電波変換して！」

『・・・はあ。今日だけだぞ』

「ありがとう！。トランスコード003！シューティングスター
ロックマン！」

そうしてスバルは電波変換してウェーブロードに上った。

だいたいこれなら間に合うだろう。

同時刻 星河家

「もう、しょうがないわねー。」

「あかね。あのこと、スバルにいったか？」

「言う前に、いつちやいました。」

「はは、しょうがないやつだな。」

「・・・でもこれはこれで面白くなったわ。」

「・・・スバルも大変だな。」

スバルの両親がこんな会話をしていた。

あかねは楽しそうにしているが、ダイゴは息子の心配をしながら苦笑していた。

01 ピンチ（後書き）

やばい・・・

早くも文章がまとまらない。

作者的にはラストと中盤と序盤は頭の中でできているのですが、裏を返せば繋ぎができていません。

まあ、何とかします。

後、作者がこの作品にからめたい物は

家庭教師ヒットマンヒットマンリボーン・・・キャラや設定のクロ
スオーバー！。

るろうに剣心 - 明治剣客浪漫譚 - ... 技名

トリコ・・・技名

HUNTER×HUNTER・・・技名、キャラ設定

一応こんな感じです。

オリキャラやオリジナルアイテムの説明は作者に力があれば番外編
でお伝えします。

02 始業式（前書き）

最初はスバル視点、後半作者視点です。

02 始業式

「コダマ小学校（スバル視点）」

「ふ〜、ぎりぎり間に合った」

「本当にぎりぎりだな。」

スバル
僕の問題にウォーロックが答えた。

ちなみに現在 AM 8 : 16、電波変換がなかったら絶対アウトだった。

「ハハハ。・・・ありがとうウォーロック。」

「気にするな。」

そんな会話をしていると、

「遅いわよスバル君！」

委員長が怒ってきた、そりゃそうだ最高学年が新年度早々遅刻とは、委員長兼生徒会長としては見過ごせないだろう。

「そうだぞスバル！」

「まあ、ゴン太君は人のこと言えないんですけどね」

「何だとキザマロ！」

ゴン太にキザマロが余計なことを言っただ怒られていた。

いつもの平和な風景だ。しかし・・・

「それにしても・・・なんで、机の空気が七つもあるの？」

教室に入って最初に思ったことだ。

遅刻寸前の僕以外全員来ているはず・・・

「ああ、そういえば星河君は聞いてなかったわね。五分くらい前に先生が説明してくれたわよ。」

どうやら、クラスメイトには伝達済みらしい。

「そうなんだ。なんて言ってたの？」

「なんでも、転校生が来るらしいんだけど、特殊な事情がある人がいるらしくてサプライズの意味も込めて始業式が終わったら紹介するって言っていたわ。」

「ふん。・・・あれ？」

委員長の話を聞き終わりあることに気付いた

「ウオーロックがいない。」

「あれ、俺のオックスも。」

「どうやら、オックスもいないようだ。」

（ちなみに、ゴン太はオックスと電波変換をしてオックス・ファイアになる。）

すると、キザマロのウィザード（様々な得意能力を持っている人格を持ったプログラムのこと）のペディアが、

『それなら、さつき屋上で戦おうって話で盛り上がったよ』

・・・どうやら、いつもの悪い癖らしい。

少しパートナーのことでげっそりしていると、

「おいそろそろ始業式だぞー。移動しろー。」

担任の育田先生が声をかけた。

「それじゃ私は先行くわ」

「分かった。委員長もがんばってね。」

生徒会長挨拶に行く委員長に声をかけた。

・三十分後（作者視点）ー

「・・・ということ、今年もより良い年にしましょう。」

パチパチパチ

ルナのあいさつが終わり、全員が拍手している。

「これで始業式を終わりにします。二年生から各担任の先生の指

示に従って教室に戻ってください。」

その先生の言葉をきっかけに体育館が騒がしくなる。

「ふん。」

緊張から解き放たれてスバルがほっとしていると、

『やっと終わったか。』

ハンターV Gから声がきこえてきた。

「あれ？ロツクいつ帰ってきたの？」

『今さっきだ。』

どうやら、屋上バトルは終わったらしい。

ついでに言うと、上機嫌なウォーロックと向こうで落ち込んでゴン太に励まされてるオックスを見る限りウォーロックの勝ちらしい
『それより、スバル。転校生が来るらしいな。オックスから聞いたぞ。』

移動しながらウォーロックが話しかけてきた。

「そうだよ。」

『オレとしては、強い奴だといいな』

「・・・ははは、暴れないでね。僕としては友達になりたいんだから。」

『・・・変わったな。』

「お互いさまでしょ。」

『はは、そうだな』

スバルは約一年前まで不登校で絆を結ぶことに憶病だった少年。ウォーロックは約一年前は乱暴で他人のことを考えない戦士。

その二人から今みたい言葉が出たのだ。

『「（ほんとにかわったなー）」』

そんなことを考えているうちに教室到着。

そして・・・

「さあ、転校生を紹介するぞー。」

待ちに待った（？）転校生紹介だ。

02 始業式（後書き）

次はやつとオリキャラ達再登場！

このまえ、絡めたい作品かきましたが、ちょっと抜けてました。抜けてたのは、

魔人探偵脳噛ネウロ・・・キャラ数人（一桁）

仮面ライダーシリーズ・・・バイク数種類

ちなみにあくまで予定です。

ルナの話抜いた理由は作者の記憶力および表現力が残念なので、自分の学校の生徒会長何言ってたっけ？状態になってるので省きました・・・。

なんで、元素記号全部覚えられるのにこういうの不得意なんだろう・・・。

やっぱり好きな教科、嫌いな教科の差ですかね？

（作者は理科、数学大好きで国語、英語大嫌い。）

ではまた次回ノシ

03 まさかの・・・(前書き)

作ってる途中にミスって消してしまったので遅れました。

「最初に三人紹介するぞー。三人ともたぶんお前たちが知ってる奴だ……迷惑掛けるなよー。」

育田先生の言葉にみんな疑問を浮かべた。

「なんで、迷惑をかけるな？」みんなそう思っていたが、三人が入ってきた瞬間意味を全員が理解した。

ガラガラ……

教室の外から入って来たのは緑髪をした男には見えない少年と黒髪の日つきの悪い少年とエメラルドグリーン瞳をした赤髪のかわいい少女。

「双葉ツカサです。迷惑かけたね。これからもよろしく。」

「ジャックだ……。去年は迷惑かけてすまなかつたな。これからもよろしく。」

緑髪のほうは元クラスメイトでもう一つの人格「ヒカル」を封印するために外国に旅に出ていたジェミニ・スパークこと双葉ツカサと、

黒髪のほうは、こちらにも元クラスメイトで去年最後の地球の危機メテオGの衝突の際敵だったディーラーの元幹部、ジャックコーヴラスことジャック、そして……

「響 ミソラです。」

よろしくお願ひします。」

赤髪の女の子、常にロックマンを陰から支えていたハープ・ノートこと、響ミソラ。

先生が迷惑かけるなといった理由なぜなら……

「「「「「……ええええええええええええええええええ！？」」「」「」「」

クラス全員がシャウト。

そりゃそつだ。考えてもみればわかる。

読者のみなさん。あなたの学校、職場、どこでもいいがとりあえ

ずそこに同じ年の絶賛売出しブレイク中のアイドルがやつきたとしたらどうなるだろうか？。

まったく同じ状況である。

「なんでミソラちゃんか!？」

なんて質問。およびかつての仲間がやってきたことによるテンションアップでクラスが騒がしくなる。

その時、

「全員、静かにしなさい!!後の転校生紹介できないでしょう!？」

白金山の大噴火、もとイルナの一喝で騒ぎが収まる。

「・・・ははは、ありがとな白金。さ、みんなあと四人しようかいするぞ〜」

ガラガラ・・・

次に四人入ってきた。

一人は黒髪の男子、もう一人は銀髪の男子。

そして、青みがかつた銀髪の女子と、緑みがかつた銀髪の女子。

「自己紹介ついでに得意なことを言ってくれ。」

「・・・はい」

育田先生の言葉に四人は答える。

「まずは俺からだな。」

黒髪の少年が一步前に出て話し始めた。

「俺の名前は、さわただけんしん沢田剣心。」

得意なことは、・・・声真似とか声帯模写とか？」

つぎに、銀髪の男子が一步前に出た。

「次は俺か。俺の名前は、キルア・ゾルディック。」

得意なことは隣の奴と同じだ。」

「次は私ね。」

青みがかつた銀髪の女子が一步前に出て話し始めた。

「私の名前は、ちくはくし時雨咲夜です。」

得意なことは・・・家事全般と、ダーツかな？」

「私で最後か。」

そう言いながら、緑みがかかった銀髪の子が一步前に出た。

「幽鬼妖夢ゆいおんまよって言います。」

得意なことは剣道と・・・隣の咲夜さんほどじゃないけど家事です。」

全員の自己紹介が終了。

「ちなみに・・・特殊な事情があつてな、こいつらお前らより二歳年上だ。」

育田先生の言葉で少しクラスがどよめく。

しかし・・・

「まあでも、」

「俺はこのクラスの仲間なんで」

「あんまり気にしなくてもいいですよ。」

「というか、敬語やめてくださいね。」

剣心、キルア、咲夜、妖夢の順で言った。

少しばかり、クラスが落ち着く。

そして・・・

「しかし、沢田とキルア。」

「「なんですか?」」

育田の質問に二人は答える。

「お前らの特技の声真似とか声帯模写どれくらいうまいんだ?」

ここで説明を入れておこう。声真似は読んで字のごとくだが、声帯模写は自分の声だけで色々な物(例えば、チェーンソーの音等)を表現する。

「ええーと例えば・・・」

「こんなのとか・・・」

クラスの目が二人に集中する。

「響こびこ ミソラです。」

よろしく願いします。}

「「「「!!!???」」」」」

なんと剣心の口から響ミソラそっくりの声が聞こえたのだ。

「後は、・・・」

次にキルアが

「全員、静かにしなさい！！後の転校生紹介できないでしょう！

？」

「・・・！！??」「」「」

今度はキルアの口からルナの声が、

最後に・・・

「ギヤイ~~~~~ン」

「~~~~~すごい・・・」「」「」

なんと二人の口からエレキギターの音が聞こえてきた。

クラスが感嘆していると・・・

「さて、七人とも、席を決めるか」。

育田先生がそう言った。

「だれから決める？」

育田先生の問いに

「どこでもいいですよ。」

「俺も別に。」

「というかレディーファーストで女子から・・・」

「後、年下だから響からでもいいですよ」

「それでいいです。」

上から、ツカサ、ジャック、剣心、キルア、妖夢と咲夜の順に言

った。

「え・・・じゃあ・・・」

ミソラが言った瞬間

クラスの男子達けものが吠えた。

「ミソラちゃん、俺の隣に！！」

「いやいや、俺の隣に！！」

男子達がそう騒ぐ中、ミソラは・・・

「じゃあ、スバル君の隣で」

・・・ギロツ!!

「ひっ! (殺気が・・・)」

この瞬間、スバルにはクラス男子全員(転校生組を除く)とルナからの殺気を当てられた。

ちなみに、スバルは窓際で隣はミソラしかない。

「(・・・これから先が思いやられる・・・)」

そう考えていたスバルだったが、

「よろしくね スバル君!」

「うん! よろしく! (でも、いいかもしれないな)」

そんなことを考えたスバルだった。

結局、席はこんな感じになった

前

男 女 キル

女 男 女 男

男 女 ゴ 妖

女 ツ ミ ス

男 女 剣 咲

女 男 ゴ ジ

男 男子生徒

女 女子生徒

キ キザマロ

ル ルナ

ゾ キルア

妖 妖夢

ツ ツカサ

ミ ミソラ

ス スバル

剣 剣心

咲 咲夜
ゴ ゴン太
ジ ジャック

03 まさかの・・・(後書き)

やばい・・・長いwww

一応次話につなげたいので変なところで切ります。

咲夜と妖夢の描写が増えたのは、単純に銀髪が多くてキャラを分けるのが面倒・・・大変になったからです。

04 驚愕（前書き）

文章まとまったかな？

「放課後 屋上」

放課後なので、ツカサ、ジャック、ミソラ、スバル、ゴン太、キザマロは屋上に来ていた。

ルナは、

「新しく来た四人にこの学校のこと教えなきゃ!」
ということ、遅れてくるらしい。・・・彼女らしいな。

「ツカサ君、ジャック、ミソラちゃん。転校してくるなら言つてよ。」

「そうですよ。お人の悪い。」

「言ってくれたらお祝いの牛井用意したのに。」
さつそくスバル達が質問した。

「いや、連絡しようとしたら暁に止められてな。」
三人いわく、暁に止められたらしい。

ちなみに暁はメテオGの一件の後ブラザーバンドが切れてないという理由でWAXAとターリア（作者の世界のイタリア）のとある組織NWXとが協力し、残留電波を入手。WAXAの誇るメインコンピュータで相棒のアシッドと共に再構成された。

しかし、残留電波になった時の衝撃で体はボロボロだったので最近まで入院していた。

ついでに言えば、その際ヨイリ 博士の強い要望でジョーカーも再構成された。

反対意見も多かったものの（特にルナ。）、次暴れたら完全破壊ということ、再構成が認められた。

今では、ヨイリー博士のサポート兼暁の第二ウィザードとしてWAXAに所属している。

そしてそのあと、暁の働きかけによってジャックと姉のクインテリアは暁の部下にするという条件で釈放されたのだ。

閑話休題（話を本筋に戻すこと）

「・・・そうなんだ」（暁さんらしいや・・・）」

スバルはそんなこと思い苦笑した

そして、

「それよりミソラちゃん。歌手活動は？」

「ああ、中学までの四年間はお休みだよ。

ずっと歌やってたからこれから少しは学業に励めだつて。」

「へ〜そうなんだ。」

スバルの質問にミソラは答えた。

どうやら、事務所的にはおバカアイドル路線は避けたいらしい。

『ということスバル君。ミソラに勉強教えてあげてね。』

彼女の相棒ハーブがスバルに言った。

その時、

『ハーブ！！居たのか！』

『あらやだ〜しつれいしちゃう。』

ウォーロックが驚いたのでハーブが少し怒ったがすぐに違和感に気付いた。

『あら？あなた周波数感じなかったの？』

ウォーロック達元FM（AM）星人は相手の周波数で誰か知ることがができる。

しかし、

『いや、感じなかった。ミソラが入ってきたときにおかしいな〜
と思っただが・・・』

『ブoooooooooooo。俺も感じなかったぞ？』

どうやらウォーロックだけではなくオックスも感じなかったようだ。

『ってことは、』

『俺たちのことは気付かなかったようだな。』

『っ！！ジエミニとコーヴァス！！』

二人は驚いた。

そりやまあ倒した敵が復活してたら驚くのは当然なのだが・・・

「ツカサ君、ジャックどうゆうこと？」

「ああ、暁を再構成した後ヨイリー博士に頼んで俺の中にあつた残留電波から再構成したんだ。

ちなみに姉ちゃんも」

「僕もヨイリー博士に頼んで再構成してもらったんだよ。まあ、再構成の時、ジエミニの人格データにヒカルを入れたから完全な再構成って意味では違うけど。」

『まあ、要はおれたちなりに折り合いつけたってことだな。』

「そうゆうこと。」

スバルの問いに二人は答えた。

そして、

「スバル君／スバル」

「？どうしたの？二人とも。」

二人が突然改まったのでスバルは驚いた。

「僕たちのしたことは恨まれても仕方ないことだけど・・・」

「俺たちとブラザーバンドを結んでくれ！」

二人の問いにスバルは、

「もちろんいいよ！」

快く答えた。

「ずるいですよスバル君！！」

「俺たちにもブラザーバンド結ばせる！！」

「私も私も！」

そんな感じで自分たちを受け入れてくれるみんなに軽く泣きそうになる二人

しかし堪えて

「「ありがとう。」」

そして、

代表として、スバルが怒っている理由を聞く。

「どうもこうもないわよ！転校生たちに校舎の案内しようと思っ
て、HR終わってから後をつけたら見失っちゃったのよ！！」

「・・・どうやら転校生に点数かs・・・もとい親切に案内しよう
としたら、勝手に帰られて怒っているらしい。

「（・・・こういうのをやつあたりというのでは？）」

スバルはそう思った時あることに気付いた。

「そういえば、三人とも何処に住んでるの？ミソラちゃんの出身
地ベイサイドシティーだし」

このスバルの問いにツカサとジャックは

「僕は、今ヨイリー博士の勧めでWAXAの寮で生活してるよ。」

「俺も、WAXAの寮で暮らしてるぞ。もちろん姉ちゃんも」
だそうだ。

しかし、ミソラは、

「あれ聞いてないのスバル君？」

「どういうこと？」

「今日からスバル君の家に居候させてもらうんだよ」

「へえ・・・つてえええええええええええ！！？」

ミソラの爆弾発言

そして、

「どういうことですかスバル君！？」

「そうだぞ、スバル！？」

「ヒュ~~~~」

ゴン太、キザマロはスバルを問い詰め、

ジャックは感心したように口笛を吹き、

ツカサは、ニコニコ楽しそうに笑っている。

「いや僕にもさっぱり・・・」

スバルが言いかけた時

「どうゆうことかしら星河君・・・」

ただでさえイライラしていたルナから禍々しいオーラが出てきた。

04 驚愕（後書き）

ツカサの逃げ方はツカサの性格に合わせたのですがあってますかね？
抜け目無く冷静に行動するような。

・・・ミソラの件については、やっちまったぜwww

これから楽しくなるだろ〜な〜（S）

後、あかねが言いかけたのはこの事です。

こんな感じで伏線をはって行きますが矛盾点があったら言ってください。辻褄合わせをします

05 告白(前書き)

ついに来た。この時が。

赤面は「／／／／／」で表現します。

05 告白

「星河家」

「はあ、やっと着いた。」

『しかし、恐ろしかったな。』

「・・・ははは、ウォーロックがそういうと説得力あるよ。」

スバルは自分の家の前にいた。

鬼神ルナの怒りから逃れたスバル達は途中まで一緒だったが、途中で別れた。

ツカサはあの後ウェーブライナーで帰ったらしい。

また、帰る途中で電波ウィルスにあつたが世界を何度も救ったスバルにとっては敵ではなかった。

「（・・・どんな小学生ライフだ。）」

スバルが改めて自分の人生（正確には去年）のハチャメチャぶりに苦笑していると、

「スバル君、置いてくなんてひどいよ！」

「ああ、ごめんミソラちゃん」

『まあ、あんな鬼みたいな怒気前にしちゃ、逃げるのも仕方ないけどね・・・』

ミソラが追い付いてきた。

スバルが謝罪するとハーブがフォローを入れてくれた。

「ははは。さあミソラちゃん、入ろうか。」

「うん！」

ガチャ

「ただいま。」

「おじやまします。」

「ハイ、お帰りなさい。」

二人が入るとアカネが出迎えた。

「それから、ミソラちゃん。今日からこの家の一員なんだから、

おじやましますじゃなくて？」

「え？あ、はい。た、ただいま。」

「よし！それから、私のことをお母さん、ダイゴさんのことはお父さんと呼んでね。」

「ハイ。ありがとうございます……。お母さん……。」

ミソラは、軽く泣きだしそうになるが堪えた。

そして、

「さあ！晩御飯作るまで上のスバルの部屋にあがっててね。」

「はい！」

アカネにそう言われミソラが二階に上がっていく。

「ねえ、母さん。」

「何、スバル？」

スバルがアカネに質問した。

「なんで、ミソラちゃんが来ること教えてくれなかったの？」

「というか、なんでミソラちゃんが来ることになったの？」

「ああ、そのことね。」

アカネが質問に答えた。

「まず来ることになった理由は、コダマタウンにミソラちゃんが引越すことになったときに、ダイゴさんが

「このご時世女の子に一人暮らしは危ない」って言ってこの家に来ることを勧めたのよ。

教えなかった理由は教えようとしたらあなたが朝行っちゃったんでしょ？」

「……返す言葉もございません。」

「よろしい。早く行ってあげなさい。」

「はい」

完全に正論で返されたスバルは少しうなだれながら上にあがって行った。

「スバルの部屋」

「遅いよー。スバル君。」

「ごめんね、ミソラちゃん。」

スバルが上るとすでにミソラが待つていた。

「本当に、スバル君は宇宙が好きだね。」

「まあ、語りだしたら止まらないしね。」

こんな感じで和気あいあいと話していると、ミソラが突然改まって話した。

「あの〜、スバル君……。」

「?何、ミソラちゃん?。」

この空気の変化にハープが反応してウォーロックを連れ出した。

『はい。いくわよ!』

『ゲツ!ハープなんでハンターに入ってきて』

『とつとといくわよ!。KY星人!』

『おれはFM星人だ!助けてくれスバル!』

スバルは、ウォーロックの叫びを無視する。

そしてミソラが話し出した。

「あの、スバル君。私が深く傷ついた時も、あなたを傷つけた時もあなたは私を助けてくれた。

そんな優しいあなたが好きです!!付き合ってください!///
///」

なんと、告白だった。それに対してスバルは、

「///僕も、いつでもどんな時も支えてくれるミソラちゃんが好きです!!」

こちらこそよろしく申し上げます。///」

OKと答えた。

「……!ありがとう!///」

「わあ!?///」

よほどうれしかったのかスバルにミソラがダイブ!!

そしてほっぺたにキスをした。

「ちよ、ミソラちゃん!?///」

「うれしいよ〜スバル君!///」

そんなことをしていると、

「スバル〜ミソラ〜ご飯よ〜」

「は〜い」

晩御飯ができたらしい

「さあ、行くから放してミソラちゃん。／＼／＼」

「うん！。／＼／＼」

二人で降りて行った。

05 告白（後書き）

いや〜告っちゃいましたね〜ミソラ。

・・・告白をしたこともされたこともない作者が描いたんでこんな感じなのかな？

告白って。

後ウォーロックのセリフの「t」はいいかけの表現です

06 決意（前書き）

やっと更新できた・・・
期末テストや、塾のクラスのランクアップに伴う補習などで更新速度が下がって余裕で月一とか、二か月に一回とかになるかも知れませんが見守ってください。

06 決意

「星河家リビング」

「あら？どうしたの二人とも？顔真っ赤よ。」

二人がリビングに降りるとアカネが二人に質問をした。

「え〜と・・・」

「スバル君と私、恋人になりました〜!!!」

「ちょ、ミソラちゃん!？」

スバルが言うのを躊躇していると、ミソラが大胆カミングアウト。スバルが慌てると・・・

「スバル君、私のこと嫌い？」

なんとミソラが、上目づかい+涙目（演技）で聞いてきた。

「（う・・・ミソラちゃん、反則だよ・・・）そうです。恋人になりました!」

若干やけ気味にスバルが言うと

「そう!良かったわね〜ミソラちゃん!これからもスバルをよろしくね!」

「はい!任せてください!」

「それからスバル。ちゃんと守ってあげなさいよ!」

「分かってるよ。」

二人に対してアカネは激励した。

「よろしい!さあ、ふたりともごはんにしましょ!」

「はい、いただきます!」

「お母さんの料理おいしい!」

「ありがとう!」

ミソラは料理の感想を言った

その時スバルはあることに気付いた

「あれ?そういえば父さんは?」

「ああ、ダイゴさんなら今日WAXA に泊まり込むって」

「ふ〜ん。改めていただきます。」

〓三十分後〓

「「ごちそうさまでした。」」

「はい、お粗末さまでした。二人ともお風呂に入ってきてなさい。」
アカネが言った。

「じゃあ、お先にどうぞミソラちゃん。」

「じゃあ、入ってきます。」

〓二十分後〓

「ふ〜、上がったよ〜スバル君。」

「じゃあ、僕も入ってくるよ。」

〓十五分後〓

「ふ〜。」

「スバル〜、ミソラちゃんならあなたの部屋行ったわよ〜」

「はい」

スバルが上がると、

「スバル君おそ〜い。」

「はは、ごめんごめん」

そうスバルが返すと、

P i P i P i P i

「あれ？メールだ・・・」

「何々？」

メールが届いた。

「えつと、暁さんからだ！」

『サテラポリス遊撃隊の諸君。全員WAXA日本支部に来てくれ。理由と内容はその時話す。』

それからサテラポリスの方から学校を休ませるように言うから、安心してサボれ。

後、保護者にも似たようなメールが言ってるから心配するな。』

・・・これ権力乱用では・・・」

「そういえば時間は？」

「ああ、えつと朝十時だつて。」
「そうなんだ。なんだろうね。」
「さあ？それよりミソラちゃん、宿題と明日の予習やらない？」
「え、なんで予習やるの？」
「学校の授業に追いつくため。分からないところがあれば教えるから。」

「はい。」
こうして二人は勉強し始めた。

〓数十分後〓

「やっと終わった。」

ミソラが突つ伏す

「はは、じゃあそろそろ寝ようか。」

「・・・私どこで寝ればいい？」

「そうだな？」

「私スバル君と一緒に寝たい！」

「え！？いやいや、さすがにまずいでしょ！？マスコミ的にも！」

「そんな・・・スバル君私のこと嫌い？」

なんとミソラがまた、上目づかい+涙目（演技）で聞いてきた。

「（う・・・ミソラちゃんやっぱり反則だよ・・・いいよ、

一緒に寝よ。」

スバルがそういうと、

「やった~~~~~！！！」

ミソラは大はしゃぎ

「じゃあ、布団入ろうか。」

「はい」

ベットに入るとミソラはスバルの腕に抱きついた

「ちよ、ミソラちゃん／＼／＼／」

「へへへ、スバル君暖かいね／＼／＼／」

そういつたミソラに不覚にも見とれてしまうスバル。

気がついて離れる様に促そうとしたら、

「スー・・・スー・・・」

聞こえてくるのは、ミソラの寝息。

「（寝るの早！でも、やっぱりかわいいな〜／＼）」

スバルが見とれていると

「・・・行かないで、・・・スバル君・・・ママ・・・」

「!」

なんとミソラがうなされ始めた。

「（・・・ちよつと自惚れてたかな〜僕）」

ミソラの過去を知っていながら、いつものミソラの元気を立ち直つたと考えていたスバル。

しかし実際は、いつも一人になることを恐れながら、気丈にふるまっていただけという事に気付いた。

「（・・・ミソラちゃん僕は君を一人にしないよ・・・絶対に!）」

┌

スバルはそう決意して、ミソラを優しく抱きしめた。
すると、ミソラの表情も穏やかになる。

「（・・・さて、僕も寝るか。）」

そしてスバルは眠りについた。

|| 同時刻 星河家の屋根 ||

『寝たな。』

『寝たわね。』

屋根には、ハープと、ウォーロックがいた。

ハープがウォーロックを連れ出した後、状況説明。

茶化そうとするウォーロックにハープが

『行ったら殺すわよ?』

と、脅迫した。

そのあと、茶化さないことを条件に二人で、二人の様子を見ていた。
ハープとウォーロックとスバルとミソラ

『しっかし、なんでミソラあんなに寝るの早いんだ?』

『たぶん、スバル君が隣にいる安心感で寝ちゃったんでしょ。』

ウォーロックの問いにハーブが答える。

『そうか・・・ミソラをしっかり守ってやれよ、スバル。』

『あら？あなたからそんな言葉聞けるなんて、あなた変わったわね』

『・・・』

その後、ウォーロックが照れ隠しで二人の体力の限界まで追いかけつこを始めた。

『同時刻 某所』

『・・・オルカよ。我らの準備は完了したか？』

『は。いつでもいけます。』

『そうか。ではまずお前が行け。』

『了解しました。・・・デューオ様』

・・・運命の歯車が動き出す

06 決意（後書き）

黒幕登場！！

ちなみに作者は、前にも書きましたがデューオのこと詳しく知りません。

誰か、情報ください。

次回は戦闘になるかも。

07 招集（前書き）

やっとできました。

近々テストがあるので投稿スピード遅れるかも・・・

「星河家 AM7:00」

「・・・なんでスバル君と私、抱きあってるの？」

職業柄、早く起きる習慣があったミソラは起きた瞬間自分の状態を理解できなかった。

『おはよう、ミソラ。』

「おはようハープ。この状況について説明できる？」

ハープに経緯をミソラが問う

『うなされてたあなたを、スバル君が抱きしめたのよ。』

「そっか、ありがとうスバル君。」

ミソラがスバルに感謝する。

「でも、これじゃあ起きれないね。」

『そうね。・・・起こしてあげたら？』

「そうだね。でもどうやって起こせば・・・そうだ！」

そういうとミソラは、スバルの鼻をつまんで口にキスをした。

『ミソラ・・・大胆ね』

ハープはそういうが、どこか楽しそうだ。

普通に考えて、肺に酸素が入ってこないのですバルは当然・・・

「・・・！！ん！ぷはあ！」

スバルは息ができなくなり起き、さらにミソラがキスしていることに驚いた。

「ちょ、ミソラちゃん何やってるの！？／／／／／」

「へへへ、昨日の夜抱きしめてくれたことのお礼だよ／／／／／」

「え？あ・・・／／／」

自分がやったことを思い出すスバル

『くつくつく、顔赤いぜスバル。』

ウォーロックがからかう。

そのとき、幸か不幸か、

「スバル〜ミソラ〜起きてる〜?」

アカネが二人を呼んだ。

「は〜い起きてま〜す。」

「お、起きてるよー」

「じゃあ、降りてきなさい。ごはんよ〜」

「じゃあ、行こうかミソラちゃん」

「うん。」

二人は降りて行った。

「星河家リビング」

「あら、どうしたのふたりとも? 顔赤いわよ?」

「「なんでもないよノです」」

アカネが二人に聞く。

スバルはもちろんミソラも他人にさっきのことを言うのは恥ずかしいらしい。

「ふ〜ん。とりあえず朝ご飯食べちゃいなさい。WAXA行くんでしょ?」

「「は〜い。いただきます。」」

二人は朝ご飯を食べ始めた。

すると・・・

「ねえ、二人とも、あなた達恋人なら・・・」

アカネはそこでためた。

「キスしたことある?」

「「!」」

「ゲホ!、ゲホ!、」

「「大丈夫!? スバルノスバル君!」」

説明すると、驚いた拍子にミソラが固まり、食事中的スバルの気道に食べ物が侵入してスバルがむせた。

ウィザードオンしたウォーロックとハーブが、スバルの背中をたたたく

「ゲホ!、ありがとう二人とも・・・それより母さん突然何聞くの

「!!」

「そうよ、お母さん!!」

二人が声を荒げる。

「あら冗談だったのに。二人の反応からするともうキスしたみたいね」

「!!!」

要は二人はアカネに乗せられたということだ。

『『『(・・・このひとは勝てる気がしない・・・』』』
スバルとミソラはもちろん、二人のウィザードもそんな事を思った。

「さあ、二人とも早く食べちゃいなさい。」

「はい」

その後二人はアカネに茶化されながら朝食を食べた。

「数十分後」

「御馳走さま。」

「ハイ、お粗末さま」

食事を終えた二人は寝まきから着替える
そして、

「お母さん、行ってきます。」

「母さん、委員長たちが来たらよろしくね。行ってきます」

「ハイ、行ってらっしゃい」

アカネにそう告げ二人は出発した。

すると、ミソラがスバルの腕を引っ張った

「スバル君、早く行こ!」

「ちよ、ミソラちゃんひっぱらないでよ。／＼／＼」

「本当に仲いいわね」

「WAXA日本支部」

「やあ、久しぶりだな二人とも元気か？」

「「暁さん、久しぶりです。」」

WAXAにつくと暁が二人を出迎えた。

『ウォーロツク、あなたも元気でしたか?』

『ハン、お前に言われるまでもねーよアシッド!』

暁のウィザード、アシッド。サテラポリスが開発した唯一の地球産の電波変換可能ウィザードだ。

「ところで、なんで招集されたんですか?」

「それについては長官とお前の父親から説明がある。」

「え?父さんから?」

「それより早く司令室に行こ、スバル君」

「うん。分かった。」

〓 W A X A 司令室 〓

司令室にはすでに去年の遊撃隊のゴン太、そして・・・

「ツカサ君に、ジャックに、クインティア先生!!」

「やあ、スバル君。」

「よう、スバル。」

「久しぶりね。」

ツカサにジャック、そしてクインティアがいた。

「なんで三人が・・・」

「その話は長官からされるよ。」

スバルの質問をツカサが遮る。

ツカサの言うとおり、長官が話し始めた。

「さて、まずは遊撃隊隊長、暁君から報告を。」

「はい。」

長官の指示で暁が話し始めた。

「まずは、遊撃隊の新メンバーだ。」

暁が紹介し始めた。

「知つてのとおり、新メンバーは、双葉 ツカサ ジャック、クインティアそして・・・」

そこでためると暁はウィザードオンをした。

「ジョーカーだ。」

「よろしくね。」

「全員よろしくな。」

「よろしく。」

『よろしく頼む』

ツカサ、ジャック、クインティア、ジョーカーの順で言った。

『でも、なんで今頃メンバー増やすんだ？メテオGはぶっ壊したのに。』

ウォーロックが疑問を言った。

「それは、・・・」

「俺とヨイリー博士が説明する」

暁の言葉をさえぎって、ダイゴとヨイリー博士が出てきた。

「父さん！ヨイリー博士！お久しぶりです。」

「お久しぶりです。」

「久しぶり！・・・じゃなかったです！」

スバル、ミソラ、ゴン太がそれぞれ挨拶する。

「本当に久しぶりね〜みんな。」

「ところで父さん、どうということ？」

「ああ、とりあえずこれを見てくれ。」

そうダイゴが言うとメインディスプレイから一枚のロケットの写真が出てきた。

「これなんですか？」

「見た感じ、ロケットかな？」

ツカサが質問し、ミソラが自分の持った印象を言う。

そして、ヨイリーが答えた。

「これは、地球以外の星で作られたと考えられるロケットよ。」

『『『『え！！？？？』『』『』『』』』』』

全員が驚く。ヨイリーの説明が続く。

「この写真はWAXAとシドウちゃんの件でお世話になったNWX^{エックス}が協力して撮った写真なの。問題はこのロケットの進路に地球があることなの。」

「え！？それって・・・」

スバルが言いかけたことをヨイリーが遮る。

「そう。仮にこのロケットの目的が地球破壊云々（うんぬん）だった場合は大変なことになるわ。」

『それで俺たち・・・というか、遊撃隊が再結集されたのか。』

「その通りだウォーロック。」

ウォーロックの言葉にダイゴが笑みを浮かべる。

「また私たちは電波変換の力に頼らなくてはならない！やってくれるか、諸君！？」

長官の問いに、

「もちろんです！」

『また暴れられるんだ！文句はないぜ！』

「私もやります！」

『ミソラがやるなら私もやるわ』

「まかせろ！・・・じゃなかつたください！」

『ブロロロロ！！』

「スバル君の力になれるなら！」

『へ、珍しくツカサがやる気なんだ。俺もやるぜ！』

「俺がやったことは消えないが、それで償えるならやってやる！」

『ジャックがやるなら俺もやるぜ！』

スバル、ウォーロック、ミソラ、ハープ、ツカサ、ヒカル、ジャック、コーヴァスの順に言う。

ついでに年上組は強くうなづいて意思表示をした。

「ありがとう諸君！」

長官がうれしそうに言った。

すると暁が長官に質問した。

「それより長官、質問なんですけどNWXってどんな組織なんですか？」

暁が疑問を言う。

「実は・・・」

「よく分かってないのよ」

「博士!？」

「まあいいじゃないですか。正直なこと言って。」
長官の言葉をヨイリーが遮った。

『?よく分からないってどういうことだ、ばあさん』
ウォーロックが質問する。

「実はNWXは、創立一年の組織なの。行っている事業は公表されているものをあげると、過去に使われていたバトルチップの復刻や、プログラムの開発等ね。後、最近はさっきも言った通り宇宙関連。でも・・・」

そこでヨイリーが言葉を切った。

「その資金が何処から来てるのかが分からないの。」

「!？」

「・・・?どういうこと？」

スバルとツカサが驚くがミソラにはピンとこないらしい(ついでにゴン太も)。

ジャックとクインティア、暁は理解したらしい

「えっと・・・例えばミソラちゃん、君が映画の撮影する時だいたい会社の人がお金出すでしょ？」

「うん。」

「つまり極端に言えばお金がない会社は映画作れないってことでしょ？」

「うん・・・あ」

「そう、つまりそんなに事業をする会社には大量のお金がいるけど・・・」

「そのお金の出所が分からない・・・」

「そのとおり。」

「ついでに言えば、公表されている物ってことは裏でまだ何かやっていることがあるかもしれないってことだよ」

スバルがミソラに説明しツカサが捕捉する。

「さすがスバルちゃんにツカサちゃん理解が早いわね」

「「ありがとうございます。」」
ヨイリーが二人を褒める。

「まあ、正直敵組織じゃないだいいんだけどな。」
ダイゴが言葉をつなげる
すると・・・

【ウー！ウー！WAXA上空に巨大な電波反応確認！！さらに、
電波ウィルス大量発生中！！】

『『『『！！！！？？』』』』

突然の警報。敵襲だ。

「遊撃隊！！出動！！」

『『『『『了解！！』』』』』』

暁の指示で全員が外に飛び出した。

07 招集（後書き）

なんか疲れた・・・

途中グダグダだし・・・

次回の前書きからキャラが登場します。

08 戦闘（前書き）

調子に乗って一日二話投稿。

「WAXA 正面」

外には無数の電波ウイルスと、謎の青い電波体がいた。

「お前は誰だ!？」

暁の問いに電波体は答えた。

「私の名前はオルカ・・・WAXAを潰しに来ました」
声からして女性の電波体だろう。

「そんなことはさせない!!トランスコード001!アシッドエ
ース!」

「僕たちも行くよ!トランスコード003!シューティングスタ
ーロクマン!!」

「了解!トランスコード004!ハープ・ノート!」

「トランスコード005!オックス・ファイア!」

「トランスコード010!ジエミニ・スパーク!」

「トランスコード021!ジャック・コーヴァス!」

「トランスコード022!クイーン・ヴァルゴ!」

全員が電波変換する。

ジョーカーはノイズ率が低いのでグレイブ・ジョーカーになれな
いので、ノイズ率が上がるまで後方で待機している。

「スバル!突っ込むぞ!バトルカード・ソード!」

「分かりました!バトルカード・エドギリブレードX!」

暁とスバルがバトルカードを使用。

しかし、

ブンッ

「「な、何!？」」

二人が使ったバトルカードは形を形成した途端に霧散。

その光景に一同が驚いていると、

「今のは私の能力。バトルカードと言っても所詮固定データ。逆

波長の周波数を当てたら霧散するにきまつてるでしょ。」

オルカが自身の能力について説明。

「つまり、私たちは自身の電波体基本装備に頼るしかないってわけですか・・・」

「その通り」

アシッドの分析を楽しそうに肯定するオルカ。

実際この状況はかなりヤバイ

この中で一番強いのは暁とスバル。しかし二人の戦い方はバトルカードに頼ったものだから実質いつもの戦力の半分以下。しかも、暁には肉体のタイムリミットもある。

「なら、基本技で攻めるだけよ！ショック・ノート！」

「ファイアブレス！」

「グレイブクロ！」

「ロケットナツクル！」

ミソラ、ゴン太、ジャック、ツカサ、ヒカルの合わせ技。クインティアは属性の関係上技を打てないので、相手の出方を見る。

ドカーン！

土煙が上がる。

しかし、

「・・・危ないわねー。」

「『』『』『！？』『』『』」

なんとオルカは無傷だった。

「・・・なんで無傷か知りたい？私の周りには氷で作ったシールド四枚が浮いているの。もちろんオートよ。そして私のこの装甲・・・」

オルカは自分の肘から手首まで覆っている装甲を指した。

「この二種類の装甲で遠距離から近距離まですべてのレンジにおいて私の防御完璧よ・・・でもいいの？こんなこと聞いている間に電波ウィルスがWAXAに攻めちゃうよ」

「・・・くっ」

暁が唇をかむ。

「暁！どうせ防御だけの奴だ！そいつは相性のいいジェミニ・スパークに任せて俺らはWAXAを守るぞ！」

ジャックが暁に作戦を提案。

しかし、

「あら、誰が防御だけだつて？喰らっちゃいな、ハイパーソプラノ！」

「……！ジャック君危ない！！」

ミソラの声にジャックが反応しよけようとしたが喰らってしまつ。

「グアアアアア！」

「ジャック！」

クインティアがジャックにジャックに駆け寄る。

「へへ。私の攻撃、見える奴いるんだ。」

オルカの問いにミソラが答える。

「……いまのは、高周波でしょ？」

「正解。私の能力は超音波クラスの高音を自由に発することができの。」

「なんかわかりにくい能力だな。」

オルカの問いにゴン太が疑問の声を上げる。

『要は、高い声を出すつて能力だな。』

「なんか弱そうな能力だな。」

ヒカルの捕捉に意見を言うゴン太。

「でも、その弱そうな能力のせいで君らの戦力が落ちだよ？」

オルカの言うことはもつともだ。

オルカに攻撃しようとするればシールドに阻まれ、戦闘を捨ててWAXA防御に行こうにも音による攻撃で牽制されてしまつ。

『チツ！グダグダ言つてないで仕留めるぞ、ツカサ！』

「了解！」

「『ジェミニサンダー！！』」

ツカサとヒカルの最大技による攻撃。

たとえ相性が悪くても結構なダメージになる大技。

しかも、今回は相性最高。

誰もが勝利を確信した。

しかし、

「・・・アイスシールド」

「・・・な、何!?」

なんと相性で負けているはずのジェミニサンダを四枚重ねの氷のシールドで防御。

さらに、

「リバーズ！」

「・・・!?グアアアアアアアアア！」

なんと、反射してきた。

そんなこと予想もして無かった二人は自身の技をもろに喰らう。

「ツカサ君！ヒカル！」

「くっ！」

「この程度でくたばるかよ！」

属性が同じだったので大丈夫なようだ。

しかし、

「面倒なことになったな・・・」

「そうだね・・・。」

ウォーロックの言葉にスバルが頷く。

今の防御シーンだけで飛び道具が使えないことは丸わかり。

しかも反射の方向を変えられたらかなりヤバい。

電波人間の基本装備はだいたい飛び道具。

この状況で使える技（打撃系）は、

ゴン太のアンガパンチ、ヒカルとツカサのエレキソード、ジャ

ックのフェザーシックルくらいだ。

それも恐らく手にある装甲でガードされてしまう。

要するに攻撃がほぼ通らない。

完全に将棋で言うところの詰みだ。

「（考える、諦めるな、でもどうすれば・・・）」
スバルが考えていると上から声がした。

「情けないな。」

「バトルカード以外の戦闘方法考えてないからこんなことになるんだよね。」

「普通考えないでしょ。」

「というかあんなチートみたいな能力の敵もなかなかいないですからね。」

そこには見慣れない電波人間が四人いた。

「何者なの!？」

「……ん?」「……」

オルカの問いに四人が不敵に笑いながら同時に答える

「………(ニツ) 助っ人登場!」「……」

08 戦闘（後書き）

疲れた・・・

キャラ出せなかったな〜前書きに

ついてかなんだ敵の能力。敵ながら、というか我ながらチートすぎw

w w w

後、トランスコードは公式では発表されてない番号に入れたつもりです。

09 新たな仲間（前書き）

久しぶりの二日連続投稿

『おい、作者！』

なんだ、ウオーロック？

『ウィザードの出番少くないか？』

・・・それについては重々理解しています。

気をつけるんで許して。

『・・・分かった。許す。』

ありがとう。

さあ、本編の開始です！

09 新たな仲間

「WAXA 正面」

「暁さん、あの人たち誰？」

「こつちが聞きたいよ……。」

ミソラの質問に暁が答えた。
すると、

「「よっ！」」

男の電波体二人がウェーブロードから飛び降り、

「「はっ！」」

残り二人の女の電波体も飛び降りた。

着地した瞬間暁が質問した

「お前たちは誰だ？」

すると、全体的に黒い男の電波体が答えた。

「ん？あー、敵じゃないよ暁さん。」

「！！なぜ俺の名を知っている！？」

暁が驚くと今度は全体的にオレンジ色をしている電波体が答えた。
「そりゃ、サテラポリスのエースだし、NWXの一員としては知
つてなきゃだめでしょ。」

「！！お前たちはNWXの一員なのか！？」

暁が質問するが、

「まあ、落ち着いてください。戦いが終わってから話しますよ。」

「……あ、私の名前はタイム・イーターです。」

白い女の電波体がそう言って話をやめさせる。

「そうですね。あのオルカとかいう電波体倒したら、全部師匠が
教えてくれますよ！」

ちなみに私の名前はソウル・パラディンです。」

緑の電波体も続ける。

「いや丸投げかい……。俺の名前はフォルテ・クロスだ。」

「これだからダメ弟子は……。俺の名前はソル・クロスだ。」
そう言っただけで軽い自己紹介をした。

すると、フォルテ・クロスとソル・クロスが

「暁さん、遊撃隊のメンバー全員電波ウイルスに回して……。」

「大物は俺たち^{オルカ}に任せてください。」

「な……!?!」

暁は突然言われたことを理解できなかった。

「だって、いくらロツクマンと貴方の戦闘方がバトルカード頼み
と言っても電波ウイルスごときに負けはしないでしょ?」

「ついでに、タイム・イーターとソウル・パラディンも手伝わせ
ますから。」

「しかし、」

『シドウ、任せてみてはどうですか?』

暁の言葉をアシッドが遮る。

「……分かった。」

アシッドは常に勝率の高いほうの意見を言う。それを知っている

暁は、この申し出を受けた。

「ねえ、なんで私達ウイルス組なの?」

「そうですね。師匠。」

どうやら作戦は二人にも初耳らしい。

「ああ、戦闘中に能力についてツツコミ入れられるのヤダから……。」

「解説者やって。」

結構安易な理由だった。

「分かりました。」

「了解」

「話は終わったか?なら……。」

暁が息を吸い込む。そして……

「遊撃隊全メンバーはWAXAの防御に回れ!!」

「『了解!』」「『了解!』」「『了解!』」

話を一応聞いていたので遊撃隊のメンバー+二名は電波ウィルスの方に回る。

「行かせると思ってるの？ハイパー……」

オルカが技を発動しようとした時、

「お前の相手は……」

「俺たちだよ！」

「！？」

ヒュツ、ガン！

フォルテ・クロスとソルクロスが、オルカの前に現れ同時に後ろ蹴りをする。

オルカはもろに喰らった。

「く！油断した！」

「ふん。やっぱり君のアイス・シールド。ついてこれるスピードに限界があるみたいだね。」

「まあ、無い方がおかしいがな。それより君の手についでる装甲に反射能力ってあるの？」

ソル・クロスの問いにオルカは答える。

「……いいわ教えてあげる。この装甲には反射能力はないわ。

でも、相性が悪い技を受け切ったアイス・シールドと同じ強度があるの。どう？驚いた？」

オルカの答えに二人は驚くどころか鼻で笑った。

「？何がおかしいの！？」

オルカの問いにフォルテ・クロスが答える。

「いや、だって属性付加でシールドに木属性加えてダメージの一部殺して耐えてたのに、よくそんな自慢げに言えるな〜って」

「それに、それノイズの力でしょ？」

「！？」

オルカが驚く。

「驚いたってことはこの推測が正しいってことだよな。しかも周りのノイズ率が上がらないことを踏まえると……」

「あんたにはノイズ耐性を上げるアビリティではなくノイズを自分の力に変えるアビリティがついてるんじゃないの？」

「くっ！何処まで知ってるの？」

オルカの問いに二人はフォルテ・クロス、ソル・クロスの順に飄々（ひょうひょう）とした様子で答える。

「さっきの戦闘見ていて考え付いたのは今ので終わりだ。」

「っーか、今のこと全部当たってるとしても電波体単体でやってるとしたら、驚異的だね。あんたのポテンシャル。」

普通電波体の力は電波人間の力を下回る。アビリティで力を底上げして、属性を有利にしていたことを差し引いても電波人間の大技を防いだオルカはとんでもなく強い電波体という事になる。

ソル・クロスの問いにオルカが答えた。

「・・・ついだから教えてあげるわ。私は去年地球で暴れたダイア・アイスバーンのデータと同調及び融合してるの。つまり私の力は電波人間と同等以上の力を持っているの。」

オルカは二人が動揺することを狙って答えた。

しかし二人は動揺するどころか、うれしそうに微笑しながら答えた。

「・・・つまりあんたのデータとって解析すれば・・・」

「ノイズの収集、ノイズによる自身及び能力の強化。さらには、電波体の同調についてが分かるってことだね。」

「!??・・・やれるもんならやってみなさい！」

「言われなくても！いくぞ！」

「ああ！」

フォルテ・クロスの問いにソル・クロスが答えた。

「ウエーブバトル！ライド・オン！」

09 新たな仲間（後書き）

しまった・・・。

スバル出し損ねたWWW。

「笑い事じゃないよ・・・」

ごめんねスバル君。

一応次回は電波ウイルス組の話なんで許して。

VSオルカ編はあと三話以内に終わります。

あと、容姿説明。

フォルテ・クロス・・・エクゼ5のフォルテ・クロス・ロックマン

ソル・クロス・・・エクゼ5のソル・クロス・ロックマン

タイム・イーター・・・東の十六夜 夜さんを近未来風にした感

じ。基本色は白と青

ソウル・パライディン・・・方の魂魄 夢を近未来風にした感じ。

基本色は緑と白。

本編に技、及びキャラがそのまま出る予定のないものには伏字（ ）
をしています。

10 説明（前書き）

なんか調子いいぜ！

ワイザードは相変わらず空気だけどWWW。WWW。

「同時刻 WAXA電波ウイルス組」

「ねえ、そろそろ君たちの正体教えてくれない？」

スバルの問いにソウル・パラディンとタイム・イーターは答えた。

「教えてもいいけど、絶対面倒な事になるから……」

「後で師匠に聞いてください。」

何か面倒になる理由があるらしい。

二人に暁が質問する。

「正体についてはあとで聞くとして……お前らの能力聞いていいか？」

あの二人は多分近距離装備があるとして、君たち二人の能力分らないとこちらとしても辛いんだが……。」

暁の問いにソウル・パラディンが答える。

「?いや、向こうの二人に近距離装備なんてないですよ?」

「?」

全員近距離装備中心の電波体だから、戦いを引き受けたと考えていたので驚いた。

全員のリアクションに若干驚きつつタイム・イーターが説明しました。

「えつと……。順に言うとフォルテ・クロスの方は電波で形成した弾丸を高速で乱射するシューティング・バスターと二つの黒いリング発射するヘルズ・ローリングって技、そして高密度エネルギーに相手を閉じ込め攻撃するダークネス・オーバーロードが基本技です。後、弾丸を発射するバトルカードの弾速を上げる能力です。」

タイム・イーターの説明にソウルパラディンが続ける。

「それからソル・クロスの基本装備は単発式の銃、ガンデルソルとエネルギー弾を発射するコスモ・シュート、そしてこちらも高密度エネルギーに相手を閉じ込め攻撃するフレア・バズーカ。後、バ

トルカードの攻撃力を上げる能力。・・・ま、要は二人とも電波人間としては中から遠距離専門の能力ですね。

さらに言えば、バトルカード関連の能力も止められてるから今、二人は実質攻撃手段はゼロってことですね。」

「じゃあ、なんであんな自信があつたんだ？馬鹿なのか？」

暁が問いに苦笑いしながらタイム・イーターが答える。

「馬鹿って・・・。えっと、暁さんなんでロックバスターしか使えないロックマンが世界を救えるほど強いんだと思います？」

「え？それは、スバルに一般人より遥かにバトルセンスがあるから？」

暁の言う通りスバルのバトルセンスは敵味方ともに認めるほど優れている。

「スバル君、すごいんだ！」

「ミソラちゃん。あんまり褒めないで・・・。」

ミソラの言葉にスバルが照れる。

「その通り。つまり、電波人間は、電波変換する人間と電波体の掛け算になりますよね？」

暁の答えにソウル・パラディンがうれしそうに言う。

つまり、電波変換する人間、もしくは電波体の力が強ければ電波人間のポテンシャルは高くなるということだ。

スバルの場合は前者ということになる。

「『まあ、そうなるね／＼。てつまさか！？』」

「そう。あの二人は強化された自分の体を使って徒手空拳で戦う気なんですよ。」

「そんな馬鹿な!？」

『まじかよ・・・』

タイム・イーターの答えにツカサとヒカルを筆頭に全員が驚く。普通に考えて自分の拳こぶしだけである電波体をデリートできるとは思えない。

ソウル・パラディンが続ける。

「冗談じゃないですよ。実際たぶん世界最強クラスですし、あの二人。」

「それってどういう・・・?」

「それもあとで話します。あ、私の能力ですが、ロックバスターとかと同じ原理で基本装備の剣を出すスピリチュアルソードと、その剣に力を乗せて放つソードレーザー。後、ソード系のバトルカードの攻撃力が上がる能力です。」

暁の言葉をソウル・パラディンが遮って自身の能力について説明する。

続けてタイム・イーターも自身能力について説明する。

「私の能力は、スピリチュアルソードと同じで私の方はナイフを作り出す、チャンドラナイフ。そして、そのナイフを複数自分の周りに浮遊させて相手にレーザーを集束させる、アサシン・レーザー。後、バトルカードに少しだけホーミング機能が付く能力と、少しだけ時を早めたり、遅くしたり、止めたりできます。」

「それってなんかすごそうだな!」

ゴン太の問いにタイム・イーターは少し苦笑いしながら答える。

「いや、本当に少しだけで時間が狂ってるのに時間で表現するのもおかしいんだけど約五秒くらいかな。」

「それでも時間を操るのはかなりすごいことね・・・」
タイム・イーターの説明にクインティアが少し感嘆したように言った。

「。。。それより早く電波ウィルス倒そうぜ!」

短気なジャックとウォーロック、そしてヒカルが我慢できないとばかり訴えた。

「。。。そうだな、全員改めて・・・」

混乱から少し抜け出した暁はそこでためた。

「。。。ウエーブバトル!ライド・オン!」

「。。。」

こちらで戦いが始まった。

10 説明（後書き）

なんかタイトル通り説明文だらけの回になってしまった。
技やらなんやらの元ネタは番外編やれば番外編でやります。

『なんだか、私の出番が少ないような気がするが・・・』
ジョーカーごめんね。今君はグレイブ・ジョーカーになれずにサテラポリスの警備ウイザードと一緒にWAXA守ってるってことになってるから、出せなかつたんだ。

『というか、ウイザード自体の出番ウオーロックとヒカル以外少ない気がするんだが・・・』
グツ、痛いところを。こればかりは僕の力不足のせいでしょうしよ
うもないから許して。

『・・・ミサイルストリーム!。』
ギャー！怒ってる!？怒ってるよね!？
ではまた次回ノシ!!。

逃げろー!!

11 二人の力(前書き)

なんでこんな調子がいいんだWWW

風邪っぽいのにWWW

二人の会話は分かりにくかったら交互にフォルテ・クロスとソル・クロス出せばどちらが最初でも大丈夫です。

11 二人の力

「WAXA オルカ側^{サイド}」

「ハイパーソプラノ！（おかしい、なぜ・・・）」

オルカの攻撃はフォルテ・クロスとソルクロスの二人には当たらなかった。

「なぜ攻撃が当たらないの!？」

そう。先ほどからオルカは数十発ほどハイパーソプラノを放っているが、二人には一発も当たっていない。

しかし、二人のキックやパンチもオルカの手の装甲に阻まれてどころもノーダメージのまま、時間だけが過ぎていく。

「まさか、あなたもあの女と同じで音が見えるの!？」

オルカは二人に質問した。こんなに避けられるなら音が見えているとしか考えられない。

しかし二人の答えは違った。

「音なんて見えねーよ。でもそれが超音波なら・・・」

「あんたの口と目線の向きで大体方向が分かるし、あんたの音を出すタイミングが直感で分かるから・・・」

「タイミング合わせて回避すれば避けられないこともないって訳。」

超音波というものは普通の音より分散しにくい。

つまり二人は何処に音が来るか予想して避けてる。

「なるほど・・・その、直感やらなんやらもあなたの能力ですか。」

「?いや、これと同じ理論で・・・」

「電波変換前でも弾丸とか余裕で避けられるけど?」

「!？」

電波変換後の力と思っていたオルカは二人の返答に驚いた。

「ま、それ以前にその技の威力もたかが知れてるから・・・」

「避けなくても同じなんだけどね、盾と違って属性追加できなさそうだし。」

二人の言い草に少しオルカはキレた。

「!・・・そうですか。ところでいつ、私が攻撃に属性の追加ができませんと言いました?」

「!??えつと・・・」

「まさか・・・!??」

オルカの言葉に二人が少し驚く。

「サンダ ソプラノ!」

電気を帯びた超音波が二人を襲う。

「属性だけでなく、スピードも上がってるこの攻撃避けられるかしら!??」

オルカの言うとおりスピードも段違いに跳ね上がっている。

「わあああああ!・・・なんちゃって」

「!??」

そういうと二人はその攻撃を避けた。

「なんで・・・?」

「なんでつて・・・。ご丁寧に音が電気を帯びて見えるようになったんだから・・・」

「どんなに早くても、見える分避けるのは通常の技より楽なんだよね。」

「くつ!」

オルカが悔しそうに唇をかむ。

「そろそろ・・・」

そういうと二人は片方の足で地面を蹴りながらタイミングをとる。そして・・・

「・・・縮地!」

「な!??くつ!」

二人は一瞬でオルカの前に移動してパンチを繰り出す。ぎりぎりでもオルカは反応して受け止める。

「くつ！・・・ねえ君たち・・・いつ私が・・・」
そういうとオルカは不敵に笑った。

「手の装甲に属性の付加はできないって言ったかしら」

パチッパチ

オルカがそういうと装甲から不吉な音が聞こえた。

「えつと・・・」

「まさか・・・！？」

二人は焦りながら驚く。

「サンダ シールド」

パチッパチッ！！

音が本格的になる。

密着状態だった二人は当然・・・

「ぐああああああああ！！！！」

雷電を喰らう。

「いい悲鳴ね もつと喚きなさい」

オルカが残忍な表情で言う。

普通なら最悪気絶だろう。

だが・・・

「ぐああああああ・・・。なんちゃって！！」

ドン！

「が・・・！？」

二人はそういうと、強烈な後ろ回し蹴りを炸裂させた。

突然のことに反応できずオルカはもろに喰らう。

「ガハッゲホッ・・・どういうこと！？なんで電流が効かないの

!？」

オルカの問いに二人は平然のした様子で答える。

「いや、生身でも電圧に耐えられるというか、電池みたく体に短時間なら電気ためられるから・・・」

「その応用でダメージはほぼゼロ。まあ、ためれる電気に上限があるからあんたの基本属性が水で助かったわ。」

属性は、その電波体の持つ電波によって決まる。この場合オルカがシールドに電気を足した時、電気とオルカの電波の相性が悪かったのでさほど威力が強くない二人が余裕を持って帯電できる量だったということだ。・・・まあジェミニ・スパーク以外の遊撃隊メンバー（特に、クインティアとミソラ）が喰らったら最悪気絶、良くても追撃を喰らうような電撃だったが・・・。

「なんでそんなこと・・・というより、なんでそんなことできるのに喰らったふりをしたの？」

オルカが二人に聞く。普通喰らったふりなんてしなくてもそのまま攻撃に移った方が楽だ。

「理由は二つ。一つはあんたのデータをコピーするため。」

「!？それってどういうこと!？」

フォルテ・クロスの答えにオルカが大声を出した。

「単純に言えば、接触しながらあんたの体の中に侵入、解析、コピーして、電波変換した体と一体化してるハンターV.Gに保存ってことかな。」

「!？」

ソル・クロスの説明に驚くオルカ。

戦闘しながらそんなことやってのけるなんて冷静、というか戦闘慣れし過ぎている。

「それからもうひとつ。電気をためてその電気で神経の伝達速度上げて・・・」

「自分のスピードを上げてあんたを本気で潰す。つまりあんたのデータはすべてコピー終わったんだよ。」

「!?!?・・・そう。じゃあ私も全力で行くわ。・・・キラソー
ド!」

そういつとオルカの装甲と手の間からノイズの刃が現れた。

「へへ、データの中にそんな能力もあるんだ〜。」

「後の解析が楽しみだ。」

「早く本気を出しなさい!」

二人の態度に少しキレながらオルカが言う。

「まあまあ。しかし立派な剣だね〜それ。人間にはそんなキバが
無いからうらやましいよ。でも・・・」

「人間は食事の時ある道具を使うんだ。」

そういつと二人は両手をこすり合わせた。

普通なら乾いた音がするが今回は違った。

ギヤインギヤイン!

「!?!?」

なんと金属音。オルカの驚く間もなく二人が力を込める。

「・・・神速!」カッムル

すると二人の体が電気を帯びた。

「さあ、まずは・・・」

「手の装甲の破壊からかな?」

「は、やれるもんなら・・・!?!?」

「じゃあ、」

「お言葉に甘えて。」

オルカの言葉の途中に二人はそれぞれソル・クロスはオルカの右
フォルテ・クロスはオルカの左に高速移動し挟み撃ちにする。

「くつ! (早すぎる!) アイスノイズ・シールド!」

回避は無理と判断したオルカは手の装甲にノイズの力を加える。

「結構応用効くね、君のアビリティ。でも・・・」

「無意味だ!」

「「二重ふたえの極み！」」

パリーン！

「な！？」

なんと一撃で装甲を割る。

「なんで・・・！？」

「今の技、二重の極みは一瞬で二撃を加え、一撃目で物体の抵抗をゼロにして衝撃を加える技・・・」

「抵抗がゼロなら君の装甲がいくら堅くても関係ないよね。」

「な、なんて技なの・・・」

二人の説明に驚くオルカ。

「まあついでに言えば・・・」

「この技、この次元で完成した技じゃないんだけどね・・・」

「どういう・・・！？」

「おっと、これ以上は」

「タブーだな。」

何やら隠す二人。

「まあ、どっちにしるあんたここで負けるんだから・・・」

「関係無いでしょ。」

そう言っ二人はまたオルカの周囲を高速移動しだした。

11 二人の力（後書き）

なんか二人の会話分かりにくい。

まあ、性格は同じなんで口調も似てるんですがwww

なぜこんなにいるいろんな技を使えるかは後々説明しますが、読んでもらつと分かる通り厨二病の妄想の産物です。この小説。

12 オル力戦終結（前書き）

最初に言っておきます。

今回のはとんでもなく長いです。（約6000文字）

テスト二週間前切ったのにこんなことしてていいんだろうか
wwww

12 オル力戦終結

WAXA 電波ウイルス側^{サイド}」

「ロックバスター！」

「ビーストスイング！」

スバルとウォーロックが技を放つ。

「・・・チツ、きりがねーな。」

「そうだね・・・」

実際雑魚ウイルスが多く完全に消耗戦になってきている。

「くっ！」

「暁さん！」

「『シドウ！』」

暁はどうやらタイムリミットを迎えたらしい。

「はは、まいったね・・・。日ごろの行いはいいはずなんだけだな・・・。」

「シドウ。それ私と戦った時も言ってたわよ。」

「ああ、まじで？」

「ええ。」

「そんなこと言ってる場合ですか。」

二人の会話にアシッドがツッコむ。

「暁、お前は電波変換としてアシッド使って戦ってる。」

「いつもなら意地張るところだが、今日のところはそうする。」

ジャックのアドバイスを素直に聞き暁は電波変換を解く。

「しかし本当に多いな！ファイアブレス！」

そう言いながらゴン太はウイルス倒す。

「どうやらあの宇宙につながってるノイズウェーブから来てるみたいだね。」

「チツ。これじゃあ本当にキりがねえ。」

ツカサの言葉にヒカルが文句を言う。

「とりあえずがんばろう、スバル君！」

「うんそう……！ミソラちゃん後ろ！」

「え？きゃあ！」

ミソラがスバルの方を向いた瞬間ミソラの前にモノソードが移動してきた。

ミソラは目をつぶった。

しかしいつまでたっても攻撃は来ない。
すると、

「大丈夫ですか？」

タイム・イーターがミソラに質問する。

「えっと、どうやって……？」

「私の力、タイム・ストップを使ってウィルスの後ろからナイフで切ったんですよ。」

そう言っで自分の手にあるナイフを見せるタイム・イーター。

「えっと、ありがとうございます。」

「駄目じゃないですかスバルさん。彼女は守ってあげなきゃ！」

そう言っでソウル・パラディンも来た。

「う……。そうですよね……。」

スバルが少し落ち込む。

「でも、実際こんな混戦状態じゃ、しょうがない。気にしなくても……！！？」

ツカサがフオローしようとするど、

ドカーン！！

突然の爆音。

「な！？」

「え！？」

「『くっ！？』『』」

「『きゃー！？』『』」

「ぐ!?!」

すると、全員が膝をつく。

「みんなどうしたの!?!」

『スバル!ノイズ率を見てみる!?!』

「え!?!」

ウォーロックの指示にスバルは従う。

すると・・・

「な!?!ノイズ率300%オーバー!?!さっきまで40%もなかったのに!?!」

『全員無事か!?!』

「ジョーカー!」

「ノイズ率が急に上がったので、見に来た!星河スバル、何があった!?!」

「それが僕にもさっぱり・・・」

「!?!スバル、ジョーカー!前見る!」

「え!?!」

二人が前を確認するとなんと、電波ウイルスが通常クラスのウイルスからG級クラスの敵に変化した。

「うそ!?!」

『どうやらこのノイズの影響でウイルスが強化されたようだな。』
スバルが驚き、ジョーカーが分析した。

『でもどーやら、このノイズあいつらにとっても突然らしいぜ。』
ウォーロックの言うとおりウイルスの中でも一割くらいはノイズに耐えきれずデリートされていく。

しかし所詮一割。バトルカードを使えないロックマンはもちろん、ノイズ率が上がりグレイブ・ジョーカーになっているジョーカーもさすがにこの数のウイルス相手に十人近く守って戦うのはほぼ不可能だ。

「くそ!どうすれば・・・!」

スバルが悔しがっていると、

何処からか音声^{ボイス}が聞こえた。

「……エースPGM再起動。流星サーバーLV3^{レベル}アクセス……」

「スバル！ポップアップが出てるぞ！」

「なんで、究極^{ファイナライズ}変身が……！？」

そう、ファイナライズはエースPGMでメテオGにアクセスしないとファイナライズできない。

しかし、メテオGは去年スバルが破壊した。

つまり、普通はこんなことありえない。

「がたがた言ってるねーでやるぞ！仲間が死んでもいいのか！？」

ウォーロックの一言でスバルは決意した。

「……！？それだけはいやだ！行くよ、ウォーロック！ファイナライズ！」

「了解！」

するとスバルの周りにノイズが集まっていく。

そして……

「レッドジョーカー！！」

スバルはレッドジョーカーになる。ブラックエースにならない理由は……。

「ジョーカー！グレイブメテオレーザーを使って！速攻で決めよう！」

速攻を仕掛け、敵をジョーカーと一掃するにはブラックエースでは不向きというわけだ。

「^{つけたまわ}承った！」

すると、ジョーカーの手にノイズが集まる。

同時にスバルの手と後方のジェネレーターにもノイズが集まる。

「グレイブメテオレーザー！！」

ジョーカーはノイズのレーザーを敵に打ち込む。

「ハアアアアアア！！NF^{ノイズフォースヒックハバン}B！レッドガイアイレーザー！！」

スバルも同時にノイズのレーザーを打ち込む。

さらに、ジェネレーターからもレーザーを打ち込み大爆発を起こしてウイルスを一掃する。

ドカーン！

土煙が上がるとウイルスが一体もいなくなっていた。

ノイズ率も下がり、全員が起き上がる。

すると、

「「おい、大丈夫か」」

向こうの方からフォルテ・クロスとソル・クロスが走ってやってきた。

「マジである二人、あいつ倒したのかよ・・・」
ジャックの一言に全員が共感する。

「師匠！お疲れ様です。」

「こっちは大変だったんですよ。ノイズ率が急に上がってみんな動けなくなってる。」

ソウル・パラディンとタイム・イーターがそう報告すると、フォルテ・クロスとソル・クロスの目が泳いだ。

「えっとその事なんだけど・・・」

「どうやら俺らのせいみたい。」

「「・・・！？それってどういうことだ!?!」」

二人の告白に暁とジャックが質問する。

「「えっと、最初から話すと・・・」」

そう言って二人は先ほどの戦闘について話始めた。

|| 少し前 オルカ側 ||

「ぐあ！ぐ！」

高速移動してる二人に為す術もなく攻撃を喰らうオルカ。

すると・・・

パチチチチチチ・・・

「あ・・・」

「お・・・」

二人の神速カナムルが解けた。

しかもオルカの目の前で。

「・・・！キラーソード！」

オルカは両手のソードで二人に斬りかかった。

しかし・・・

「神谷活心流かみやかつしんりゆう・・・」

二人は落ち着きながらそう言う。そして・・・

「奥義おくぎの極・刃断きわみ・はだち！」

二人は素手で相手の剣を折った。

しかしオルカは笑みを浮かべた。

「ふ、アイス・ロック！」

「え！？」

「な！？」

なんと二人の体が凍り始めた。

そして、

カチーン！

完全に凍った

「この技を仕掛けるためにあなた達のさっきカナムルの状態が解けるのを待っていたの

・・・まあ、キラーソードが折られるのは誤算だけど・・・。

まあ・・・」

そういうと折られた根元にノイズが集まっていく。

「再生できるからいつか
キラーソードが再生する。」

「この二人どうしようっかな？・・・まあ、さすがに自力でこれ
は抜け出せないから放置でいいか。」

・・・さ、向こうでロックマン達倒しにいこー。
オルカが振り向いた瞬間・・・

ビリッ！

「なに！？」

突然聞こえた振動音。オルカが驚いて振り向くとなんと氷漬けの
二人が震えていた。

「何が起こって・・・！？」

オルカが言いかけたその時。

バリーン！

「ふう。」

「うまくいったみたいだな。」

フォルテ・クロスとソル・クロスがそう言いながら氷から出てき
た。

「どうやって出てきたの！？完全に氷漬けにしたはずよ！？」

オルカの問いに二人は答えた。

「今回使ったのは人や生物などが寒さに対して体温を保とうとし
て身震いとかをするシバリング。」

「まあ、俺たちはこれを意識的に使って異常放熱。周りの氷を溶
かしたって訳。」

「く、すぐにとどめを指せばよかった。」

オルカが悔しがる。

「まあ、そつちも誤算なんだろうけど・・・」

「こつちも武器破壊が効かないってことの方が誤算なんだがな。」
武器破壊して攻撃手段を無くし、驚いたところを倒す予定だった
ようだ。

「そう。ならこの武器はあなた達にとって鬼門ってことね。」

「まあ、そうなるな。」

「なら、これで攻めるのみ！キラーソード！」

また切りこんできた。

「は。言っただそばからまた油断って・・・」

「馬鹿は死ななきゃ治らないらしいな。」

そう言っ二人は手の甲（フォルテ・クロスは右手、ソルクロスは左手。）を相手に向けた。

「ファイアスマシールド死炎盾！」

そういうと、それぞれの手からフォルテ・クロスは黒、青、藍、

紫、ソル・クロスからは白、赤、黄、緑色の炎

が上がり、剣を受け止めた。

「な!?!」

驚いたオルカに二人は空いている方の手で追撃する。

「二連釘パンチ!!!」

「ぐ・・・あ・・・!?!」

ドドン!

オルカの体は二段階に分かれて衝撃を喰らう。

「げほ!がは!・・・今は・・・?」

オルカの問いに二人は答える。

「今のは、釘パンチ。衝撃が無くなる前に次の打撃を与えることで衝撃を深くまで打ち込むことのできる技。」

「ちなみに俺らもこれは四連射が限界。まあ、今までの別次元の技の中でも別格ちゃあ別格だから出来なく手も仕方ない気がするんだけどな。」

フォルテ・クロス、ソル・クロスの順番で言う。

「くつ！また訳分らないことを！」

オルカがそう言っただけ。

「訳わかんなくて結構。なぜならこれで終わるから。いくよ、ソル。」

「了解！」

そう言うと二人は一瞬で間合いを詰める。

そして・・・

「ナイフ！！！」

手刀でオルカを斬った。

「きゃあああああ！何で・・・私の体に・・・刀傷が・・・」

そう。オルカの体には両方の肩口から反対側のわき腹にかけて刀傷が出来ていた。

「今のは、自分の手を刃物の代わりに使う技・・・」

「釘パンチを打ち込んだのはこの技のダメージが確実に通るようになるためだったんだよね。」

「くつ~~~~~~~~！！！」

オルカがそう叫ぶ。

「なあ、ソル・・・」

「なんだフォルテ？」

その中でフォルテ・クロスがソル・クロスに質問をする。

「あいつのアビリティ、解析は終わってないけどノイズを自分のものにする物だよな・・・」

「ああ。」

「で、こんなにノイズ率の上がない原因もこいつなんだよな・・・」

「ああ、それがどうし・・・!?」

「気付いた？」

「やばくね？」

「やばいね。」

二人が気付いたことそれはノイズ率が上がらなくなるほどノイズをためた電波体が崩壊したらどうなるか。

つまり……

ドカーン！！

ノイズが周りにいつぺんに放出されること。
簡単に言えばノイズの爆弾による爆発だ。
さっきの爆音とノイズ率の急上昇の理由だ。

|| 現在 WAXA ||

「……というわけです。すみません。後、あのノイズウェーブは爆発で吹っ飛びました。」

「あ……そう……」

二人の説明に若干苦笑いしながら暁が答える。

『でもあの爆発の中どうやって無傷でいたの？』

ハープが質問する。

至近距離であんな爆発を喰らって無傷なんてありえない。

「ああ、それなら細胞同士を摩擦して静電気を起こしてその電気で一瞬だけ^{カシメル}神速発動……」

「そんでできるだけだけ離れ、さらにモジャランスXに炎を灯^{とも}して修羅道で戦闘力上げて新体操のバトンみたく高速回転。軽いバリアを作成したって訳」

二人の説明にアシッドが質問する。

『？炎は恐らく盾に使ったものでしょうが……修羅道というのはなんでしょう？確か六道輪廻の一つだったと思えますが……。』

「なあ、アシッド……六道輪廻って何？」

暁の質問にアシッドは答える

『六道輪廻とは、仏教において迷いある者が6種類の迷いある世界、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天界道を廻ることです。』

アシッドが説明する。

「その通り。ま、今回のことを簡単に言えば・・・」

「こういうこと。」

フォルテ、ソルの順番でそういう。すると、

ウン！

「……………な!?」

二人の右目に四の文字そして炎が上がった。

全員が驚く。

「これはあるやつの能力で俺らを乗っ取るうとした時に失敗して・

……………

「俺らの中に力の残骸が残った物。オリジナルと同じ力があるけどね。」

二人が説明する。

「ほかに一から六まで力があるんだけど、いつもは一の道・地獄道の幻覚能力で普通の目に見えるようにしてんだ。」

「まあ、それは置いといて、この目の炎見える奴いる?」

この問いにスバルと、暁が手を挙げる。

「……………え?そんなの見える?」

「…え!?」

暁とスバルは驚く。

「へ〜見える奴いるんだ。だめもとだったのに。」

「これは限られた奴しか見ることのできない闘気^{オーラ}。これ見える奴には基本的に高い戦闘能力があるんだ。」

12 オルカ戦終結（後書き）

長かった・・・

ちなみに途中で動けなくなるシーンのセリフ内訳すると、

「な!？」・・・ジャック

「え!？」・・・ツカサ

「『くっ!？』」・・・ヒカル、ソウルパラディン、タイム・
イーター

「「きゃ!？」」・・・ミソラ、クインティア

「ぐ!？」・・・ゴン太

です。

・・・正体ばらさないと打ち込みが面倒だ。

次回四人の正体をばらします。

ま、気付いてる人は多いでしょうがwww

13 正体(前書き)

テスト終了!!

13 正体

「……………き、君は／＼お、お前は!?!?」

全員が驚きスバルが代表として四人の名を言った。

「剣心君にキルア君!それに、咲夜さんに妖夢さん!」

「よっ!」

「すいませんみなさん。」

「正体隠してました」

咲夜以外が砕けた感じで言う。

「なるほど……。昨日俺とオックスがハーブたちの周波数感じれなかったのは……」

「多分、俺らが張っていたステルス空間のせいだろうな。」

「まあ、変に疑われるのが嫌で張ってた空間だけど、逆にばれそうになってたみたいだね。」

キルアと剣心がウォーロックの考えを肯定する。

「とりあえず、ウィザードのこと教えてくれないか?」

「……いいよ/いいですよ」

スバルの願いを四人がきく。

「それじゃあ、全員で……」

「……ウィザード・オン!」

すると四体のウィザードが現れた。

『フォルテだ。よろしく頼む。』

『ソルだ。よろしく頼む。』

『タイマーです。よろしくお願いしまーす。』

『パラディンです。よろしく頼みま〜す。』

四人が自己紹介をする。
すると、

『……おまえら……!?!?』

宇宙人組が驚いた。

「知ってるの？」

『ああ、こいつらはFM星人の中でも地球侵略に反対して牢に入れられた奴らだ。』

ウォーロックの説明に驚く全員。

『まあ、あの後脱獄してこつち来てこいつらに会ったんだ。』

『戦いが終わった後も暇だからこつちにいたんだ。』

『そのあとに、ムーの侵略や、メテオGの時にみんなで協力して・
』

『ターリアや、ロンシヤのあたりをまもってたんだ。』

「それよりお前ら何者なんだ？そもそも。」

暁が四人に聞く。

「何者って……」

「NW Xの一員だけど何か？」

二人が飄々とした感じで言う。

『ふん。俺の目はごまかされんねーぞ！』

「？」

ウォーロックの言葉に二人は首をかしげる。

『昨日から気付いていたが、お前らはただものじゃねえ！一般人で足音が聞こえず、隙が全くないってのはどういうことだ！』

「……！！……癖って抜けないのな。」

二人が自嘲気味にさういう。

「お前の正体とNW Xの正体を教えてくれないか？」

「……まあいつか。」

「教えますよ。」

二人はさういうと説明しました。

「まずはNW Xのことを説明しますけど途中で質問を挟まないでくださいな。」

「ま〜簡単に言えばターリア最大クラスのマフィア、ボンゴレファミリーの一機関です。」

「………!?」「………」
「で、現在のボスと俺らの考えで現在、表の顔としてNWXをやっています。」

「俺とキルアは現ボンゴレ最高幹部の一角闇と月の守護者、
「咲夜さんと妖夢は俺らの弟子兼部下です。」
「そこまで一気に言う。」

「何か質問は?」「」
「えっと、お前らとボンゴレのボスとの関係は?なんか普通に意見言っているみたいだけど……」

二人の言葉に暁が質問する。
普通いくら幹部でもボスに意見を言うのは珍しいことだ。
「えっと俺とキルアがボスのいとこ……正確に言えば、ボスの親父さんの弟と妹が俺の父親とキルアの母親なんでそれもあると思います……」

「ほかの守護者にもボス、フレンドリーですよ……ついでに言えばボスの命狙ってる奴がいたり、常にボスの言うこと聞かない奴とかいますけど……」

「ああ、いるね……。」
「どんなマフィアだ……。」
ぐつたりとしている二人に、苦笑いをしながら暁が言う。

「それから、俺らの強さについてね。俺の母親とキルアの父親は兄妹なんです……」

「ゾルディック家と言えば裏の世界じゃ伝説の暗殺一家で通ってるんだ。俺らの強さの由来の半分くらいはそこからかな。」
「!?!?……それってつまり……」

「一応殺し屋家業からは足洗ってるよ。」
「とりあえず話は一通り終わり。報告しなくていいの?」
「……ああそつだな。」

暁が今回の件を報告するために戻ろうとすると
『さて!』

『?どうしましたウォーロック。』
ウォーロックがみんなの動きを止めた。

『お前の強さの秘密は分かった。・・・だが、フォルテとソルには発火能力なんてないはずだ!なのになぜ炎の盾なんて使える!』
確かにこれはおかしい。

すると二人は、

「本当に鋭いね。さすが戦士と言ったところか。はぐらかせると思っただけど。」

「ほんとは、沈黙オルメルタの掟があるけど・・・君らならまあいつか。

・・・咲夜さん、妖夢もよろしく。」

「了解」

「はい。」

すると四人はポケットの中から、剣心とキルアはそれぞれ四つ、咲夜と妖夢はそれぞれ二つ、鎖でぐるぐる巻きにされたリングを取り出し(剣心とキルアは、黒のリングと白のリング、青、藍、紫の三色が混ざったリングと赤、黄、緑の三色が混ざったリング、咲夜は青と紫のリング、妖夢は赤と緑のリング。)その鎖をはずし、指につけた。

「人には眼にはみえない波動エネルギーが駆け回ってるんです。」

咲夜がそう言って説明しだした。

妖夢が続ける

「そして、ファイアの間で家宝みたいな形で指輪リングが継承されるのはよくあることなんです。」

そしてさらに咲夜が続ける。

「だいたいその類たぐいの指輪リングは先人達が暗黒時代を生き抜くため、闇の力との契約を交わしたことの象徴だと思われてきてたんです。でも・・・」

「この類のものには人知を超えた力が宿っていたんです。」

「・・・それと波動に何の関係があるんだ?」

暁が二人に聞く。

13 正体（後書き）

疲れた・・・。

リングの説明

剣心・・・闇のボンゴレリング（精製度Aランク以上）オーバー

月のボンゴレリング（精製度Aランク以上）オーバー

雨、霧、雲の三色リング（精製度Aランク）

嵐、雷、晴れの三色リング（精製度Bランク）オーバー

キルア・・・闇のボンゴレリング（精製度Aランク以上）オーバー

月のボンゴレリング（精製度Aランク以上）オーバー

嵐、雷、晴れの三色リング（精製度Aランク）

雨、霧、雲の三色リング（精製度Bランク）

咲夜・・・雨のリング（精製度Bランク）

雲のリング（精製度Cランク）

妖夢・・・嵐のリング（精製度Bランク）

雷のリング（精製度Cランク）

・・・あれ？流星じゃなくなってきたなあい？

Aランク以上のリングがかぶってる理由はまた後日

14 報告(前書き)

・・・何話か前のタイトルに説明使ったからこれ以上良いタイトルが思いつかなかったのさ！

14 報告

「サテラポリス 本部」

「・・・以上で報告は終了です。」

「あ、ああ。全員御苦労・・・。」

暁が長官に報告する。長官は若干混乱していたが全員の労をねぎらった。

「ちよつといいかしら？キルアちゃんと剣心ちゃん」

ヨイリーが二人に質問をした。

「・・・なんですか？」

二人が少し考えたあとそういった。

「あれ？二人とも性格からしてそういう呼び方嫌いそうだと思うんだけど？」

暁が二人に聞く。

「いや・・・なんか、一度決めたことはテコでも変わらない感じがして・・・それでなんですか？ヨイリー博士。」

「えと、いくつかあるけど、

- 1、まずはNW Xでのあなたの立場は？
- 2、そもそもマフィアがNW Xが結成された理由は？
- 3、なんであなた達が今まで私達に協力しなかったのか。
- 4、どうやって敵のデータを解析したか。
- 5、データを知って何をする気か。」

ヨイリーの質問の嵐をキルア、剣心の順で説明する。

「えーと、質問はあとでお願いします。1の質問ですが、二人で研究主任をやってます。」

「で、2の理由ですが俺らとボスが地球が破壊される夢を見たから。」

「3の理由としては少なくともあんた方の力。というか、スバルの力なら大丈夫だろうと思いい、ターリアの周辺の国の警護をしてい

ました。」

「4の原理ですが、電波体なんて所詮データなんで、気付かれな
い程度にハッキングしました。まあ、さすがに電波体の力を借り
ても半径数メートルの有効半径しかないんで近距離戦に持ち込んだ
り、殴ったり蹴ったりした時直接侵入したりしたんですけどね。」

「5の理由だけこのデータをもとに新たなPGMプログラムを作成するつ
もりです。」

「以上で説明終わり。」

二人が説明を終わらせる。

しかし……

「師匠……」

「そんなにいつぺんに言ったから全員混乱してるじゃない！」

「……あ……」

咲夜と妖夢の言うとおり、重度に違いはあれ（長官等、成人組く
スバル等、小学生組くゴン太の順で重い）全員が混乱していた。

「はあ。これだから剣心とキルアは……。」

「とりあえず馬鹿な師匠達はほつといて質問ある人。」

「扱ひひどくないですか!？」

嘆く二人を無視して咲夜と妖夢が全員に聞く。

『では、1は文字通りとして……』

2・なぜそれほど重要なことを見た夢で決めたか。

3・なぜ見えず知らずの星河スバルのことをそれほど信用
していたか。

4・データと言えどなぜそれほど速くオルカのデータを
奪えたのか。

5・どうやってPGMを作るか。

最後に、なぜこのタイミングで我々に介入を？」

誰よりも早く回復したアシッドが二人に聞いた。

……質問の答えに質問するなんて不毛な気もするが。

その問いに咲夜と妖夢の順で答える。

「2、3は答えとしては同じで、それはボスと剣心とキルアがボンゴレの血筋であることが原因です。」

「ボンゴレの血には見透かす力、超直感というものがあってその直感は、知らない戦闘方法が分かつたりする程凄いです。」

「つまりは、ある意味スーパーコンピュータが三台同じ答えを叩き出したようなものなんで、外れてもどうせあってもなくてもいいような組織を作るくらい大丈夫だったんですよ。」

「それに信用したのもプラスでスバルさんの力を知ってからですからね。で、4ですが、二人が優秀なハッカーであると共に、地球の中にあるメテオGのようなサーバー、アースサーバーにアクセスできる特異体質だから。」

「……………!?」「……………」

全員が驚く。

察してか剣心とキルアの順で本人が説明する。

「……メテオGが宇宙空間にあつたノイズが偶然集まっていたように地球にも今まで起こつたことならすべて記憶しているところがある。それがアースサーバー。」

「まあ、閲覧できるとはいえ、さすがに大多数のデータにはパスワードがかかっているから全部が全部自由に見える訳でもない。……二人とも説明続けて。」

キルアが完全に全員を置いていく形で二人に説明を続けさせる。

(咲夜、妖夢の順)

「えっと、次は5ですか。5は、私たちが暮らしているところにスーパーコンピュータと世界最高級の人工知能クラス、そして二人の頭脳とアースサーバーを使った演算を組み合わせる気です。」

「最後の質問ですが、その見た夢で世界が崩壊しようとしたときの年号が今年だったかです。」

「……………!?」「……………」

またしても全員の中で緊張が走る。

すると剣心とキルアが察してか説明しだした。

「・・・夢の内容だけけど見たイメージ全員ばらばらだったが最初にFM星人の襲来、ムーの復活、メテオGのイメージを見た。」

「だが、そのあと明らかにそれらとは無関係の混乱が起こり、結果何かが地球にぶつかり地球が壊れるイメージを見た。これが超直感による元だとすると・・・」

「発生確率は約八割。しかもこれまでにこんなイメージを見てなかった。というか、こんな未来じゃなかったことを考えることから考えると恐らく・・・」

「この未来の原因は去年スバルが止めた地球の危機が関係していると俺らは考えてる。」

二人がそう締めくくると、

『?こんな未来じゃなかったこと?』

『まるで未来を知っているみたいに言うんだな。』

ジョーカーとヒカルが二人に言う。

「その、なんていうか二年前ボヴィーノファミリーっていうマフィアに古くから伝わる十年バズーカつてので十年後に行って・・・」

「未来の世界で戦った事があるから・・・。ちなみにこの闇と月のボンゴレリング、本当は世界に一つしかないんだけど未来の俺らが封印していたのを過去に持ち込んだから二つあるんだ。」

「・・・マフィアって何なんだ。」

二人の説明にぐったりした様子の暁が答える。

「あれ?」

「思ったほど驚かないんだね。」

「そりゃあ、ねえ。こんなにいろいろなことがあると・・・」

「・・・まあ、短時間でこんなに驚くこともあれば耐性つくのも分かるが。」

「そう。あなた達のことは、だいたい分かったわ。それよりスバルちゃん。」

「?なんですか?」

「今日ファイナライズできたらしいけど、詳しく調べたいからハンターV.G貸してくれる？代わりのハンターは貸すから。」

「あ、分かりました。」

ヨイリーにスバルがハンターを渡す。

「あ、そうだヨイリー博士。」

「PGM作る時ここにいる全員の作りたいから全員のデータください。」

キルアと剣心がヨイリーに願う。

「最高機密なんだけど・・・あなたたちなら大丈夫でしょう。帰る時ちよつと待ってね。」

「「ありがとうございます。」

「さて、じゃあ今日は解散！」

暁がそう言いこの場を締めた。

「ウエーブライナー」

「スバル君・・・。戦いがまた始まるんだね・・・。」

「そうだね。」

ミソラがスバルに話しかけた。

「・・・無茶・・・しないでね。」

ミソラがスバルに言う。

これまでスバルはいつも最後は無茶してきた。ここにいるのは奇跡に近い。

「・・・それは・・・約束できないよ。」

「どうして!？」

「だって、死んでも守りたい人ができたから。」

「な、ノノノ・・・それで死んだら意味ないよ・・・。」

「うん。だから、無茶はするけど死なないって約束する。」

「・・・分かった。」

『ミソラ、心配すんな。俺とスバルはかなりしぶといぜ?』

『ハイそこでてこない。』

『ちよ、助けてくれスバル〜!』

励まそうと空気をぶち壊したウォーロックを拉致するハーブ。

「確かにロック君の言うとおりだね。」

「じゃあ、帰ろっか。(ミソラちゃんだけは絶対守る!)」

「うん!(いつかスバル君と肩を並べて戦いたい!)」

それぞれの思いを胸にみな帰路につく。

14 報告（後書き）

・・・なんかグダグダですねWWW

かなり広い漫画の知識がないとつらいんで分からなかったらWIK
へGO！（オイ）

後二、三話したら番外編やりたいな

ちなみに、キルアと剣心が未来に行った時咲夜と妖夢は現代にいま
したが四人があつたのはもっと前です。

・・・あと、流星とリボンなど時間軸にズレがあるものは基本流
星にあてはめてください。

15 拘束（前書き）

良いタイトルのネタがないWWW
WWW
WWW

15 拘束

〓 金曜日 コダマタウン 〓

昨日の オルカ戦 戦闘後初めての学校。というか、翌日。

ミソラとスバルは・・・教室で正座していた。

「なるほど。ミソラちゃんがあなたの家に住んでる理由はわかったは・・・」

二人はルナから説明するという名の拷問を受けていた。

かなりクラスメイトがいる状態だったので、スバルの家にミソラが居候しているくだりになると、スバルやミソラを狙っていたクラスメイトは、

「……………（な、なんだって！！？？）」「……………」

となり、二人に何か言おうとしたのだが、ルナから殺気を喰らって冷汗ダラダラの二人を見ると、

「……………（・・・やめといてあげよう。）」「……………」

となり、完全に敵意が同情に変わっていた。

「じゃあ、一つ質問をするわ・・・二人とも・・・付き合ってるの？」

「……………（せめてオブラートに包んで聞いてあげようよ！？）」

「……………」
クラスメイトが心の中でツツコム。

もうあれだ、国民的ヒーローとアイドルは完全に言葉責めでいじめられている感じになっている。

するとプレッシャー負けしたミソラが若干泣きながら・・・

「・・・一昨日スバル君に告白したらOKもらいました。」

「……………なに……………!?」「……………」

「……………なんですって……………!?」「……………」

「……………」

「おめでとう二人とも！」

上から一部を除いた男子、女子のシャウト、感心した様子のジャックの口笛、ツカサの祝福の言葉。

「・・・どういことかしら？スバル君？」

「ヒュー~~~~~！」

文章じゃ伝わりにくい但现在ルナの後ろには完全に鬼神が降臨している。

すると幸か不幸か

ガラガラガラッ

「おはよ・・・う？」

「おまえらなにやってんだ？」

「なんかスバル君怯えてない？」

「というか、なんでこんなに空気が重いんですか？」

剣心、キルア、咲夜、妖夢が登校してきた。(現在AM8:10)

「あ、そうだわ、四人に決めてもらいましょう。」

「・・・何を？」

突然のルナのひらめきに四人が首をかしげる。

「率直に言って・・・ミソラちゃんとスバル君は付き合ってると思っ？」

「」

「・・・」(だから、せめてオブラートに包もう!?)「」

「」

またしても、クラスメイトが心の中でツッコム。

だが、確かに二人と会ってわずか数日の四人に聞くことはあなたが間違っていない。

しかし相手が悪かった・・・

「え・・・そりゃ・・・」

「こんなにお似合いな二人はいないと直感したんだけど・・・」

「え？」

「というか、付き合っていないんですか？」

「もしかして・・・キルアと剣心達がはずしたとか？」
上から、剣心、キルア、ルナ、妖夢、咲夜の順。

普通に聞いたなら不思議にも思わないだろう。

しかし、

「よかつたな、お二人さん！」

「お墨付きじゃないか！」

「やつたね、スバル君！／＼／」

「ちよ、ジャックもツカサ君もミソラちゃんも落ち着いて／＼／」

『クツクツク。顔赤いぞスバル！』

『よかつたわね、スバル君、ミソラ！』

剣心とキルアが超直感の持ち主と知っている組は完全にからかいモード。

ミソラとスバルも、顔を赤くする。

ヒカルとコーヴァス興味がないので、後、頭がフリーズしていた
ゴン太とオツクスは意味が分からないのでからかいには参加して
いない。

すると・・・

「…………説明中におふざけとはいいい度胸ね…………」
完全に怒りで我を忘れているルナが立っていた。

「…………(二人とも逃げて…………!!)…………」

クラスの全員が心の中で叫ぶ。

すると今度は……

ガラガラガラッ

「おはよ、みんな…………何してるんだ、早く席につけ」

育田先生登場。するとクラス全員が席に(ルナはしぶしぶ)席につく。

「助かった。」

「そうだね…………怖かった」

スバルとミソラが机に突っ伏す。
すると・・・

『オイ、スバルメールが来たぞ』

『ミソラもよ。』

「誰からだろ？」

「キルア君から？」

二人でメールを開ける。

そこにはこう書いてあった。

【この学校の各遊撃隊員へ

放課後、屋上に来てくれ。 PGMの進行状況とか話したいんで。

「・・・なんかこう・・・」

「あっさりしてるね。」

スバルの言葉をミソラが引き継ぐ。

「そういえば、僕のハンターどうなってるんだろう?。」

「それも聴けばいいんじゃないかな?。」

「それもそうだね。」

こうして二人は授業を受けながら、放課後のことについて考えた。

|| 放課後 コダマ小学校屋上 ||

「おう、全員揃ったな。」

「遅くなつてごめん!。」

「いいって。」

現在屋上には遊撃隊員全員がそろっている。

スバルとミソラは最後に来たようだ。

「さて、現在の進行状況から始めるぞ。」

そう言つて剣心とキルアが説明が始まる。

「まずは、スバルのハンターだけどヨイリー博士からデータが来た。」

そう言って二人は説明を شدした。

「とりあえずお前のハンターの中に小さな、と言っても本体比べたらって意味だが、メテオGが形成されてたんだと。」

「え？どうして？」

剣心の説明に驚くスバル。

それに、キルア、妖夢が続ける。

「そりゃあ、かれこれ何時間もノイズでできたサーバーの中にいたんだから、エースPGMのスペックがあればノイズチェンジのデータぐらい取り込めるんじゃない？」

「まあ、この前のとんでもないノイズを浴びなかつたら作動しなかつたでしょうけどね。後、データの詳しい解析のため、一週間ほどヨイリー博士に預けたいほしいみたいです。」

まだ解析するようだ。

「分かりました。」

スバルが了解すると今度は咲夜が説明を شدした。

「開発中の新PGMですが、構想はあの後すぐ出来て今現在組み立て中です。まあ、PGMの内容は出来てからののお楽しみ・・・というか、私達も知らないんですけどね・・・」
「そういつと、ジト目で剣心を見る。」

すると剣心はいつもの飄々とした様子で答える。

「まあまあ、お楽しみってことで。」

どうやら教える気はさらさららしい。

『まあ、ヨイリー博士の報告で、スバルのPGMとエースPGMの接続リンクの調整で全員統一の内容しかできてないってのもあるみたいだけどな。二人とも。』

『というか、それにすら追われていて手いっぱいなんだろ。』

フォルテとソルが二人の秘密をばらす。

「まあ、土日あるし」

「一週間もありゃ、大丈夫だろ・・・微妙だけど・・・」

二人が若干疲れたように言う。

「おいおい、大丈夫かよ？」

「無理しなくていいですよ。」

ジャックとツカサが二人をいたわる。

「いや、どうせなら早い方がいい。」

「相手がノイズを使って力を上げるなら、その分を埋めた方がいい。」

要するに目には目をということだ。

「とりあえず今日のところは解散。」

「じゃあ、また来週な。行くよ二人とも。」

「はい。」

そういうと四人は屋上から飛び降りた。

「ちよ、四人とも!？」

「大丈夫だスバル。途中電波変換して下のウェーブロードに降りただけだ。」

「なんて型破りな・・・」

ウォーロックの言葉に若干唾然とするスバル。

PII、PII、PII、PII!

すると全員のハンターにメールが届いた。

送り主は剣心だ。

内容は、

【まだ、白金とかには俺達の正体教えるなよ。正直、人に何か隠し事するのは好きだから。もうひとつ理由はあるけど・・・まあ、会えば分かるだろう。】

全員が首をかしげるが・・・

ピンポーン

何と本人が現れた。(キザマロもいるよ!)

「あれ?どうしたんだ委員・・・長?」

ゴン太が聞こうとしたが後の方は消えてしまった。

なぜなら……

またしても委員長の後ろに鬼神が降臨していたからだ。

「どうもこうもないわよ……。またあの四人に逃げられたの！あの四人、昨日も学校来なかつたしなんなの！？不良なの！？」

「いや、でもぼくらは昨日休んだよ？」

スバルの言う通り昨日はここにいるルナとキザマロを除いた全員が欠席になっていたはずだ。

「それは良いの！だってあなた達は電波変換ができるからどうせWAXAに行つてたんでしょうけど、あの四人は関係ないじゃない？！？」

……この瞬間全員はさっきのメールの意味を理解した。

絶対にこの状態のルナは人の話を聞かないだろう。

それに、あの四人がルナが自分達を探しているを知っていたなら屋上ダイブをしたのも分かる。

「……そう言えばみんなはここで何をしていたのかしら……もしかして……二人の交際を祝つてたとか？」

「（委員長、完全にやつあたりするきです……！）」
キザマロが心の中で叫ぶ。

するとツカサが……

「先帰るよ！」

そついうと屋上から飛び出し……

「トランスコード010！ジェミニ・スパーク！」

電波変換。そのまま、周波数を変化させどこかに行つてしまった。

「あ、おいツカサ！ずるいぞ！トランスコード021！ジャック・コーヴァス！」

ジャックも屋上から逃走。

「お、俺も！トランスコード005！オックス・ファイア！」

ゴン太も逃走。

「ちょ、みんな！しょうがない逃げるよミソラちゃん！トランスコード003！シューティングスターロックマン！！」

「うん！トランスコード004！ハーブ・ノート！」
二人も逃走する。

「待ちなさ~~~~い!!!!!!」

「ひ~~~~!!」

何か前にもあった様な気がするシーンの中、コダマタウンにキザマロとペディアの絶叫が響き渡った。

15 拘束（後書き）

なんか良いですねギャグパートwww
まあ、かなり苦労したんですけどねwww
最後の方グダグダだしwww

Another stage 01

というわけで・・・
番外編！

どーも、Joker02こと作者です。

さあ、というわけでゲストの紹介です！

我らがヒーローとヒロイン！スバル君とミソラちゃんです！

「こんにちは！」

「よろしくお願ひします！」

そして、二人のパートナー、ウォーロックとハープ！

『おう！』

『よろしくお願ひします。』

そして最後に転校生四人組！

「「「括るな！！」「」」」

いや、だってめんどくさいんだもん。

「じゃあ、なんで俺らを呼んだ！」

まあまあ、剣心君落ち着いてwww

「笑うな！」

「落ち着いて剣心。」

ほらほら咲夜さんも言ってることだし。

「チツ。」

はいはい舌打ちしない。

「そもそもなんで俺らなんだ？」

「そうですね。この作品の主演とヒロインのスバルさんとミソラちゃんだけでいいじゃないですか。」

キルア君と妖夢さんの言うことはもっともらしいけど・・・なん
か逃げようとしてない？

「「ばれたか！」」

やっぱりかい！

『おい、四人とも。お前らのウィザードは？』

「ああ、本当は来るはずだったんだが」

「地味にPGM作りが難航してて今四人と人工知能で製作中。」
「なんか大変そうだね。」

「ああ、それで昨日は文字通り一睡もしてないから・・・」

「すぐくイライラしてるんだよね・・・」

「お、落ち着いて！殺気が痛いんだけど！？」

「それより作者さん。」

「今日呼んだ理由は？」

「おお、咲夜さん、妖夢さんナイス！」

「今日読んだのは四人のキャラとしての由来について説明するのが一つと、これまでの振り返りだよ。」

「じゃあ、スバル君、ミソラちゃん、今回の戦いについて感想は？」

「感想って言われても・・・」

「私達オルカとは戦ってないし・・・戦った人に聞けばいいかと・・・」

「じゃあ、戦った剣心君とキルア君、感想は？」

「感想はって言われても・・・」

「正直、データ解析がなければかなり早く倒せるような奴だったからな」

「あんなに強かったオルカをそんな風に言うなんて・・・」

「やつぱり二人とも凄い・・・」

「なんかスバル君とミソラちゃんが感嘆としてるけど・・・生身の状態でも二人は強いんだよね？弾丸避けれるみたいだけど・・・」

「ああ、相手の視線と銃口の向き、」

「それに、超直感によるタイミング合わせで大体避けられる。」

「でもまあ、今の世の中、というかマフィアの中ですけどだいた
い追尾機能付きで・・・」

「被弾する時もありますよね。ゼロ距離だと避けようないし。」

「「グッ！」」

なんか痛いところ突かれたみたいだね……。ちなみに、咲夜さんと妖夢さん、本当の二人の戦闘スタイルってどんな感じ？ついでに二人のは剣心君とキルア君にお願いするから。

「分かりました。二人の戦闘スタイルは似たような感じで例えて言うならトランプとかのワイルドカードです。」

ほう。どういう意味？

「簡単に言えば、相手に合わせてスナイパーライフルからナイフまでいろんな武器を使ったり、この前みたいに徒手空拳で戦います。未来に行くまでは大体、二丁拳銃と小太刀の二刀流。そして、普通のサイズの日本刀一振りを使って戦ってました。」

なんで過去形？

「実は……」

「待て妖夢それぐらい自分で言わせる。」

じゃあ、キルア君どうぞ。

「未来での戦闘で相手の匣兵器ボックスの攻撃を日本刀で受けたら……」
「相手の威力が高すぎて二人ともたたき折れた。だから今は、二丁拳銃と小太刀の二刀流だけ。後、数種類の匣兵器ボックスと、大空含めた全属性スペアリング各三つずつかな？」

いや、指輪リングそんないらんだろwwww。

ネタばれになるからあんまり言えないけど、二人とも大空の炎灯

せないしwwww

「『ボックス 匣兵器つて？』」

ああ、そうか四人は知らないよね。

指輪リングの炎はこの前見たでしょ？

匣兵器ボックスはその炎をエネルギーにして動くマフィアの兵器だよ。

炎を電気に、匣兵器ボックスを電化製品に例えると分かりやすいかな？

「『ボックスへ』。『』」

まあ、後々この小説にも出すから、その時に詳しく。

じゃあ、次は咲夜さんと妖夢さんの戦闘スタイルの説明よろしく！

まずは剣心君！

「じゃあ、咲夜の戦闘スタイルの説明を。咲夜は投げナイフによる中距離とナイフと素手による近接戦闘が得意かな？かなりコントロール良いからダーツとかうまいし。」

特技がダーツってそういうことね。

じゃあ次キルア君

「妖夢の戦闘スタイルね。基本は二刀流。使ってる流派は俺がボンゴレ雨の守護者からコピーした時雨蒼燕流しぐれそうえんりゅうや、飛天御剣流ひてんみつるぎりゅうとか、俺らが教えた剣術が基本。でも、俺ら二人より確実に剣の才能があるから色々と組み合わせさせて戦ってるよ。」

「「凄いですね、二人とも！」」

なんか小学生二人の目が輝いてるんだけど・・・教えた剣術って？

「ああ、それは昔師匠達が稽古付けてくれて・・・」

「回避の基礎から技の技術まで私たちにできることやびったりな技を教えてくださいなんです。」

なるほど。師弟関係ってそういうことね。

じゃあ、次はお待ちかね・・・

四人の由来についてです！

まずは妖夢さん！

妖夢さんのもとなったキャラはこの前もちよつと書いたけど方の魂魄 夢です。

能力としては一番シンプルで剣術を扱う程度の能力です。

それで、魂魄を似たような意味の幽鬼に変えてみました。

次に咲夜さん！

咲夜さんのもとなったキャラもやっぱりこの前もちよつと書いたけど東 の十六夜 夜です。

能力はなんかドチートな時間を操る程度の能力です。

それで、十六夜をどう変えようか迷った挙句、時間を操る程度の能力から時ときって文字を入れたくなっただんで時雨になりました。

次にキルア君！

まあ、元も何もまんまH U T E R x H U N T Rのキルア・ゾ
ディックから。

伝説の暗殺者一家と称されるゾルディック家の三男ってことにな
ってますけどこっちでは長男です。

最後に剣心君！

四人の中で唯一作者がゼロから考えたキャラです。

まあ、名前はゼロから考えてないんですけどwww

最初は作者が漫画を読んでいてこの中に出てくる能力を組み合わせ
せたら〜とか、N A R T Oとかで言うと全チャクラ使えるやつが
いたら〜みたいな妄想から始まり、途中で主人公にはどこかで勝て
ない器用貧乏的なキャラになりました。で、最終的にキルアとペア
を組むことになって設定がどんどん増えていって、今では作者もい
まいち把握できてません。www

「~~~~~へ〜。『~~~~~』」

ちなみに伏字は今後出る予定のものには無いけど、今後出る予定
が全くないのは伏字あります。

「じゃあ、俺とキルアはともかく、咲夜と妖夢はそのままにして
おいてよかったんじゃない？」

小説キャラとしてぎりぎりな質問ありがとう剣心君。

いや、ね？十六夜 夜は設定上がりぎり人間だし魂魄 夢の能力
はぎりぎりなんかなくなつたらうけど、だけど魂魄 夢は半人半霊つ
て時点でアウトだし、十六夜 夜の能力は完全にアウトでしょ。

さすがに元の世界観（流星の）を壊す勇氣は無いよ。

「微妙に見切り発車なんだな。」

フツ、返す言葉がないぜ！

『なあ、作者。俺らにはなんか追加の設定は無いのか？』

『そうよ。この小説オリジナルの設定とか。』

小説キャラとしてぎりぎりな質問多いな〜オイ。

まあ、正直これといったものは無いけどいって言うなら誕生日を
考え中かな？

『『ふーん。』』

なんか興味無さそうだね・・・

まあいいや。

そろそろ時間だし。

では読者のみなさんこれからも応援よろしくお願いします！
ほらみんなも！

「「「「「『『よろしくお願いします！』』」「」「」「」

16 ニューアイテム(前書き)

地震と自身の力不足で投稿が遅れました。
長い、読みにくいのは作者クオリティ。

16 ニューアイテム

「コダマタウン 某所」

「なあ、HAL^{ハル}。」

『なんだ。沢田剣心。』

ここは剣心、キルア、咲夜、妖夢、四人のアジト。

そしてここは、コンピュータールーム。

ここでは、剣心とキルア、そして通称電人HALと呼ばれている人工知能がPGMの開発をしていた。

他の六人は別室で夢の中にいる。

「PGMの進行状況どれくらいだっけ？」

『ふむ、十二個のPGMのうち十個は完成。残り二つ・・・君とキルア・ゾルディックの分だけだ。』

「そう。」

「そういえば、今日何曜日だっけ？
キルアが質問する。」

何日もぶっ続け。仮眠を除けば一睡もせず作業しながらも学校に登校し、ルナから逃げたりしていた二人の時間の感覚はぐちゃぐちゃになっていた。

「あゝ、確かに・・・」

『今日は木曜日だ。そして現在の時刻はPM11:57:09だ。』

「「うわ・・・。土曜には間に合うかな？」」

『間に合わせるためには君達は明日のAM7:26:47まで作業しなくてはならないな。』

「・・・まじか・・・」

「はぐ。がたがた言わずにやるつぜ・・・俺らのPGMなんだし・・・」

「ああそうだな・・・でも・・・また眠れない・・・。」

こうして二人の夜は更けていく。

〓翌日の夜 星河家〓

「ふ〜。」

「お疲れ様、スバル君。」

スバルが風呂からあがると先に入っていたミソラがベットに横になつて本を読んでいた。

ちなみに二人はあれ以降、毎度毎度スバルが折れる形で一緒に寝ていた。

「ねえ、スバル君。」

「なに？ミソラちゃん？」

突然スバルにミソラが近づく。

「これな〜んだ？」

「そ、それは！」

ミソラが何かを取り出す。

『お、それはスバルが買ったミソラのCDじゃねーか。』

そう、それはミソラが今までに出したCDだった。

『さつき、ミソラと一緒にスバル君の棚をのぞいたの。ごめんな

さいね。』

「なんで隠してあつたのかな〜？」

いたずらっぽくミソラが聞く。

「えつと・・・それは・・・」

スバルが何かを言おうとすると、

【pi , pi , pi , pi , pi!】

『おい、スバルメールだぞ。』

『ミソラもよ。』

「な、なんだろう、ほら、ミソラちゃんも早く見なくちゃ！（助かった・・・）」

「・・・うん・・・。（良いとこだったのに・・・）」

スバルの言葉をしぶしぶ承諾するミソラ。

「えつと・・・あ！ヨイリー博士からだ！」

「なんだろうね？」

差出人はヨイリー博士からだった。

内容は、

【こんばんは、遊撃隊のみんな。スバルちゃんのハンターの解析と、

剣心ちゃんとキルアちゃんによる新PGMの開発が終了したのだから、

明日、AM9:00頃にWAXAに取りに来て。相手のことも少しだけ分かったから。】

どうやらニューアイテムが完成したらしい。

『やつと、いつものハンターに戻れるぜ。』

借り物のハンターで生活していたウォーロックがうれしそうに言う。

「ミソラちゃん、明日は早いみたいだから早く寝ようか。」

スバルが寝ることを促す。

しかし・・・

「スバル君？さっきの続きだよ？なんでCD隠してたのかな？」

そう言つと、ミソラはスバルが逃げないようにがっちりホールド。

『早く言つちまえよ。スバル。』

『あんたはこつち。』

『え、ちょ、ぎゃああああ！助けてくれ、スバルウウウウ！』

またしてもハープに拉致されるウォーロック。

「えつと・・・さすがに本人に見られるのはなんか恥ずかしくて・

・・・

「恥ずかしくて？」

「・・・ミソラちゃんが来た日、ミソラちゃんがお風呂に入ってる間に隠しました・・・。」

「・・・うん！正直に言つたね！よろしい！けど、CD無いから、少し心配になつたんだよ？」

「・・・すいませんでした・・・。」

「じゃあ、寝ようか。」

「・・・だね。寝よう。」

こうして、二人の夜も更けていく。

WAXA日本支部

「ふー。やっと着いたぜ。」

「遅いぞ。ゴン太。」

ゴン太の到着で全員がそろった。

今現在司令室には前に暁、長官、ヨイリー博士、剣心、キルアが並んでる。

「じゃあ、全員そろったし、まずはスバルちゃんのハンターの説明からね。」

ヨイリー博士がそう切り出した。

「スバルちゃんのハンターには小型のメテオGが形成されてたつて事は剣心ちゃんとキルアちゃんから聞いただろうけれど、解析の結果内容されていたデータは、ファイナライズを入れた全ノイズチエンジと、流星サーバーのバトルカード全階層分。恐らくスバルちゃんの体の残留電波から再構成されたであろう、オーパーツのノイズ、ベルセルク、シノビ、ダイナソーのノイズが入っていたわ。でも、さすがにスターブレイクのノイズは入って無かったわ。」

「よかったじゃねーかスバル！またトライブキングになれるぞ！」

「またあの力で暴れられるな！」

ゴン太とウォーロックがスバルに言う。

「・・・おいおい、ノイズチエンジの法則忘れたか？」

前にいた剣心が寝むそうに言う。

「ノイズチエンジの重ねは二つまで。ダブルライブみたいなことはできるだろうが、チエンジ三つの重ね技であるライブキングは物理的、つーか理論的に無理だ。まあ、出来ても無駄に負担が上がるだけだろーしな。」

キルアも続けて言う。

「そうなのか・・・」

『がっかりだぜ……』

ゴン太とウォロックが残念そうに言う。

「がっかりした君達に……」

「プレゼントだ！みんなハンター貸して。とりあえず、ウィザードはみんな外に出てね。結構な情報量だから。」

そういうと、全員のハンターを回収していく二人。

渡す側は渡すときにウィザードを外に出す。

「よし！じゃあ……」

剣心はそう言うのと二人は全員のハンターと二人のハンターをケールで直結させハンターを操作する。

そして、

「インストール、スタート！」

キルアが告げると全ハンターにPGMの名前とダウンロード画面が表示される。

そして……

「……ハイ完了。」

「やっと終わった。」

緊張が解けたのが二人がだれる。

『おい、二人とも！』

『早く、PGMの効果を教えてもらおうか。』

『そうだぜ！早く教えろ！』

『ブロロロロロ！』

ウォロックとヒカル、そしてコーヴァスとオックスが騒ぎ出す。

「まあまあ、四人とも落ち着きなさい。それにしてもよくこんなPGM入ったはね。どうして？」

「『……博士……』」

抑えに行ったはずなのに、いつの間にか自分も質問しているヨイリー博士に暁とアシッドとジョーカーがあきれる。

「ははは……。ヨイリー博士もみんなも落ち着いて。説明するから。」

「じゃあ、全員共通の機能は後回しにして個人別に教えるよ。」
そういうと、剣心、キルアの順で説明しだした。

「まずはスバルのPGMだけど、名前はシューティング・スターPGM（以下SSPGM）。機能はノイズ率が低くても、周りからノイズを集めて自分の周囲だけノイズ率を上げる事。正直、エースPGMと小型メテオGによるノイズチェンジと、スバルの戦闘センス。さらにエースPGMとの直結とかが理由で機能はこれだけになった。」

「次に、ミソラのPGMね。名前はホーリー・サウンドPGM（以下HSPGM）。ハープ・ノートはバトルカードより自身の基本性能で戦う方が楽らくそうだったんで、機能は自身の攻撃に属性を追加する能力。あと、ギターギターの弦の強化とかかな。」

「次にゴン太ね。名前はフレイム・ホーンPGM（以下FHPGM）。これもミソラと同じ理由で自身の角に炎を灯す機能をつけてみた。あと、スピードと他の技の出力が少しだけ上がる。」

「次にツカサ！名前はデュアル・サンダPGM（以下DTPGM）。なんか戦闘データ見たら二人の遠距離ロングレンジの技、ロケットナックルもジエミニサンダも、なんか隙がでかいから、一人だけでも雷撃出来るように強化するPGMにした。一応他の技の出力も上がってるよ。」

「次にジャック。名前はダーク・クロウPGM（以下DCPGM）。この機能はゴン太のと似てるけど、お前の四枚のはねに炎を灯すPGM。これで、一部技の威力と飛行出力が向上する。」

「次にクインティアさんね。名前はクイーン・ドロップPGM（

以下QDPGM)。とりあえず構想段階で選択肢が二つあって近距離^{レンジ}の攻撃の強化が、防御の強化か。で、結果カウンター防御技が使えるみたいなんで、バリアの上空対応、一点集中型と、バリアの強化に重点を置いてみました。」

「次に暁さん。名前はデイルイト・エースPGM（以下DAPGM）。とりあえず、バトルカードで戦う前提の電波体だから一応ノイズの力を使って活動時間がほぼ無制限、少なくともスバルたちレベルになるにしました。ついでに、肉体に負担がかかるけどパワーアップみたいな、全能力一時的大幅アップできるようにもしました。でも、乱発すると面倒なことになるからあんまり使わないでくださいね。」

「次にジョーカー。名前はキッド・ジョーカーPGM（以下KJPGM）。なんかもう、ジョーカー自身、手の着けようがなかったんで一応この前みたいになるのを防ぐために常時ノイズを集めていつでもファイナライズできるようにした。ついでにスバルが使っていない小型メテオGのフォルダデータからバトルカードをインストールできるようにした。」

「次に咲夜ね。名前はゼロ・タイムPGM（以下ZTPGM）。とりあえず、時間制御の負担を軽くして、時間の加速と減速は、体力の続く限りほぼ無制限になるようにした。ま、停止自体は発生時間が延びただけで負担は消せないんだがね。あと、ナイフの属性付加かな。」

「そんで妖夢のが、名前はマスター・ソードPGM（以下MSPGM）。ソード系のバトルカードをノイズの刃にして操ることができる。あと、お前の基本装備の剣の属性付加。」

「最後に俺らのだけど、名前はニュー・エクサPGM（以下NEPGM）。過去に地球を救った英雄。ロックマンEXEが使用していたPGMを再現しようとしたPGM。」

「これ自体には何の効果もなくて装備させた物の容量を限界まで高めるPGM。ヨイリー博士。質問の答えはこれでハンターの容量を十台分まで高めて持つてきました。」

「最後に、全員のPGMについてる共通機能としては若干の身体能力の向上。そして・・・」

「フルシンクロ電波体融合の能力だ。」

16 ニューアイテム（後書き）

うんいつものグダグダ感WWW

一応各PGMには意味があります。

スバル⇨流星

ミソラ⇨聖なる音

ゴン太⇨炎の角

ツカサ⇨二重の雷

ジャック⇨闇のカラス（闇の爪）

クインティア⇨女王の雫^{しずく}

暁⇨夜明けのエース

ジョーカー⇨からかう切り札（ジョーカーがもともと冗談を言う人の意なのでからかう方の‘KID’）

咲夜⇨零時間

妖夢⇨剣の達人

唯一剣心とキルアはなんもひねって無いので抜きで考えると、結構ひねってみました。特にジョーカーとか。名前と能力を絡めたところとか。ジャックは二つの意味があったりと考えるの結構疲れました。

あと変なところで切ったのは長いからです。

もう寝ます（-|-）ZZZ

17 電波体融合（フルシンクロ）と夜（ノッテ）（前書き）

グダグダですがスタート！

17 電波体融合（フルシンクロ）と夜（ノッテ）

「WAXA日本支部」

「フルシンクロ」電波体融合？」「」「」「」「」「」「」

「どういうこと？二人とも。」

「ヨイリー博士が質問する。」

「文字通りです。電波変換した者同士を融合させて戦闘力を上げる機能。」

「代償として体にもすごく負担がかかりますが、単純に融合した電波体同士の掛け算だから、戦闘力は計り知れない。」

「」「」おお、なんか凄そう！」「」

「ウォーロックとジャックと暁が目を輝かせる。」

「・・・でも、何か制約がある・・・でしょ？二人とも。」

「普通に考えて負担だけで済む感じじゃないしね。」
「スバルとツカサが二人に聞く。」

「さすが、冷静組は違うな。その通り。まがいなりにも融合するから融合する者同士の相性も重要になってくる。一応PGMに今融合できる奴の名前が出るようになってる。ま、まだ一度も戦闘したこと無いから俺とキルア、それに咲夜と妖夢みたいに長い間一緒に戦ったことがないとまだ表示されないみたいだけど。」

「まあ、これから戦闘ばっかしの一年になるだろうから誰かしらとはできるようになるだろう。・・・あ、注意なんだけど、フルシンクロ時の属性は融合元の属性の足し算だから、無属性組はあんまり気にしないでいいけど、属性組のツカサ、ヒカル、ゴン太、ジャック、クインティアさんの五人は融合する時に気をつけてね。弱点属性同士だと、技自体の出力がひどいことになるから。特に火と水は水と電気はそうでもないけどやっぱり疲れやすくなるから。」

「剣心、キルアの順で説明する。」

「」「」なんだ・・・すぐ出来るわけじゃないのか・・・」「」

目を輝かせていた三人が落ち込む。

「ハハハ。まあ、すぐ出来るようになるさ。」

「ついでに、戦闘関係じゃなくて忘れてたけど全PGMには戦闘中に通信できるシステム組んどいたから。」

二人が励ます。

「でもよくこんなに複雑なPGMを短期間で組めたわね。どんなAI使ったの？」

ヨイリー博士が二人に聞く。

「ああ、知り合いの天才、春川英輔^{はるかろ えいすけ}って人の人格データをコピーした電人HALっていうAIで・・・」

「待つてください。」

剣心の説明をアシッドが遮る。

「春川教授は約三百年前の人物です。あなたの話が本当ならあなた方は三百年生きていることになります。」

「……!?」

「アシッドさん！それはですね・・・」

「やめろ、咲夜」

何かを言おうとした咲夜を剣心が遮る

「でも、師匠・・・」

「ここをどうにか取り繕った所で後の方ではおられるだけだ。」

何かを言おうとした妖夢をキルアが遮る。

「・・・了解。」

二人はしびしび下がる。

「まあ、どうせすぐばれるだろうから説明するよ・・・このリングの力をね。」

剣心がそう言うと、二人は月と闇のボンゴレリングを取り出した。そしてキルア、剣心の順で説明をする。

「これ本体の説明の前にまずは、ボンゴレリング自体の説明から。」

「このボンゴレリングはリングの中では別格中の別格で、これと

マーレリングって言う指輪リングとマファイア界にいる最強の赤ん坊達、アルコバレーノのおしゃぶりの、三種類21個を合わせてトゥリニセツテって呼ばれてる。」

「・・・え？ちよつとまで。赤ん坊？」

暁が二人に聞く。

「うん、赤ん坊。」

「しかも余裕で俺とキルアより強い。」

「・・・そんな馬鹿な。」

暁が笑い飛ばす。

しかし、

「いえ、本当ですよ。」

「師匠達この前いい感じに負けてましたし。」

「・・・まじで？」

咲夜と妖夢の言葉に驚く暁。

「マジです。」

「とりあえず続けてください師匠。」

妖夢が促す。

「はい、了解。」

そう言つとまたキルア、剣心の順で話し出す。

「何処まで言つたつけ・・・ああ、そうそう。この三種類のリング達の原石はこの世界を創造した礎いしづえなんて言われてる。さらにこの三種類それぞれの大空のトゥリニセツテはそれぞれ特殊な能力を継承者に与えるんだ。」

「んで、その力つてのはボンゴレリングは、今までリング自身が認めた者。つまり、今までのボスをリングの中に記憶として刻み込む力がある。単純に言えば縦の時間軸を支配する能力。さらに言えばこの能力は全ボンゴレリング共通、と言つても大空以外は？フリーモ世フアミリーだけ、大空は歴代ボスつて差があるけど。」

「え？それつてお化けつて事？」

スバルとミソラが二人に聞く。

その質問に咲夜が答える。

「お化けというか、記憶と思考というデータを魂と考えると、肉体の代わりにリングの中で生きていくというか・・・まあ、そんな感じですよ。」

「分かるような、分からないような・・・」

「まあ、所詮体って言うのも心臓って言うポンプのおかげで血が駆け巡ってるだけの箱みたいなもんだからさほど差は無いですよ。」

「・・・」

なんか凄い微妙な空気になった。

その空気を見かねたのか、またキルアが説明を続ける。

「えっと、説明続けるぞ。えっと、マーレリングの説明をする前にパラレルワールドって誰か分かる人挙手。」

そう聞くとヨイリー博士、アシッド、スバル、ツカサ、ジャック、咲夜、妖夢が手を挙げる。

すると、キルアが思い出したように言う。

「あゝそういえば、スバルはパラレルワールド行ったことあるんだっけ」

「なんで知ってるの!？」

スバルが驚く。

剣心が答える。

「一応、アースサーバーのパラレルワールドの項目に実際にあると証明できる人のリストがあるんだ」

本当に何でもありのデータベースだ。

「パラレルワールドって何？スバル君。」

「そうだ。なんだ？そのパラレルワールドってのは。」

「いや、パレットワールドだろ。」

ミソラの質問とゴン太とオックスの暴走に答えるスバル。

「落ち着いてゴン太とオックス。パラレルワールド・・・例えばだけど、ウォーロックが父さんと合わなかったらウォーロックは敵だったわけだよね?。」

『ああ、そうだな。』

次にツカサが続ける。

「聞いた話だけどミソラちゃん。君はマネージャーのせいでハーブノートになっただよな。」

「うん。」

「その人がもう少し理解のあるマネージャーだったら、今君はどうなってると思う？」

「えっと、ハーブはもちろんだけど、スバル君とあってたかもわからない。」

『まあ、そうよね。』

「その通り。パラレルワールドって言うのは、その二つの世界が干渉できないだけで存在するって考え方。」

スバルがミソラに言う

「え！？けどそれってもしもの数なんてたくさんあるじゃん！」

「そのとおり。パラレルワールドって言うのはその無数のもしもの数だけ存在している。」

ツカサが答える。

するとキルアが説明を続ける。

「まあ、ざっくり言えばそういうことだな。で、大空のマーレリングはその継承者の他のパラレルワールドの本人と意識や知識を共有できる能力を与える。これも単純に言えば横の時間軸を支配する能力。この力を使って世界の支配者になろうとした奴がいたんだけど、未来の世界でそいつらのファミリーと俺らのファミリーが戦闘で、俺らの勝利と共に能力が永遠に封印された。」

そうキルアが言うと二人の顔が少し曇る。

だがすぐに剣心が説明を再開した。

「・・・で、最後におしやぶりなんだけど、これは特殊な感じで今までは線だったけどこれが支配する時間軸は点。並行や、過去、^{パラレル}未来の自分に自分の本当の魂と言える物を移動させることができる。これの応用で軽い未来予知ができる。まあ、あいにく今現在の時点

では欠番で継承者いないけどね。」

「で、結局そのお前達のリングの力つてのは？」

暁が二人に聞く。

すると、キルア、剣心の順で答える。

「まあまあ、慌てない。えっと話はかなり遡るんですけど、この月と闇のリング本当は二つのリングと一つのおしゃぶりそれぞれ、夜のボンゴレリング、夜のマーレリング、夜のおしゃぶりだったみたいなんです。で、三つ合わせてノッテ・トゥリニセツテ。それで、初代ボンゴレボスの弟がこのすべてのノッテ・トゥリニセツテの継承者、夜の守護者になつたみたいで。」

「そんで、初代夜の守護者がこれら三つを全部合わせたんですけど、力が強くて二つに分けたそうです。それが、俺が継承した闇のリングとキルアが継承した月のリング。さらに、ノッテ・トゥリニセツテはそれぞれ大空のトゥリニセツテと同じ能力を持っていた。つまり俺らの能力は・・・時間軸の面支配だ。」

『『『『『』』』』』』？それってどういふ・・・！？』『』『』『』『』

全員が驚く。

それに、咲夜と妖夢が答える。

「みなさん、緯度経度は分かりますよね？赤道で切った地球儀で時間軸を例えると分かりやすいんですけどボンゴレリングが支配するのは南極、もしくは北極から出る経線をどれか一本支配します。マーレリングは緯線を支配し、おしゃぶりは二つの交点を自由に行き来します。」

「それで、二人の能力はパラルルの過去や未来の時間軸にいるリングを継承した自分と意識を共有しています。そのかわり、同じ縦の時間軸の未来と過去には干渉できない制約がありますけど。」

「でもそのどこが凄いな？」

『そうだ。何処が凄いか全くわからん。』

「俺もわかんねー。」

「『私も。』」

ゴン太とウォーロック、暁とミソラとハープも首をかしげる。
すると、咲夜と妖夢が答える。

「単純な話です。パラレルワールドはもしもの世界。色々なパターンがあります。軍事技術が発達している世界、古代文明の発掘に成功した世界、医療技術の発達した世界。もつと言えば魔法が存在する世界や、錬金術、超能力、エトセトラ。」

「つまり、いろんな世界の良いところ取りです。例えば未発見の物質を見つかったりその次元にしかない技術や技を他の世界に持ち込んだりもできます。つまりありえないことを・・・今回で言えば過去の人物の人格データの持ち込みとかですかね。・・・起こすことができます。まあ、今回のHALはこの次元では存在しないと思ってたみたいですけど・・・」

「おお、凄そうだな！」

暁が二人に言う。

すると本人達が苦笑いをしながら答えた。

「いや、でもこの能力は実際闇と月のリング片方だけの継承だとはつきりとじゃなくて突然データが頭に浮かんでくるうえ自分で制御できないから、未来の世界行って未来の俺らが保管していたリングつけてやつと制御できるようになって、他の次元の両方継承した自分とこっちはアースサーバー、向こうはそれと似たようなもんを接続して話せるようになった。だから、他の次元の俺達で片方しか継承してない奴らは他の世界の情報が不定期で来るだけでこっちの世界の俺らと干渉できない。・・・まあ、俺らは一方的に干渉できるけど。」

「それに、この次元でできたことを他の次元で出来るかって言うところで無くて、例えばこっちだと魔法とか錬金術使えないし、逆にこっちの世界の技術であるウィザードを他の世界に持ち込んだとしても、電波技術の水準がここと同じレベルじゃないと使えない。格闘技とかだと俺らが鍛えるだけでいいんだけど。さらに言えば、

全パラレルワールドに俺らないし。・・・これで俺達自身の話は終わり。そう言えばヨイリー博士敵の正体が分かったってメールで来たんですけど。」

「え、ええ。」

なんとか落ち着きを取り戻したヨイリー博士がみんなの方を向く。
「分かったことはこのロケットが過去に地球に来たことがあるって事。」

でも、二百年くらい前のデータだから、解析が困難で・・・」

『でも、俺とソルのパートナーなら分かるんじゃない？』

『地球に来たことがあるならサーバーに在るだろうし。』

フォルテとソルの言葉に本人が反応する。

「いや、お前らがスリープモードの時に一応暇だったんでPGM作りながらロケットの写真で検索したんだが・・・」

「関連情報が全部ロックされてて輪郭すらつかめなかったよ。でも、二百年前の英雄と関係があるっぽい事は分かった。」

どうやら一筋縄ではいかないようだ。

「まあ、分かり次第招集するわ。それより皆、今度才葉さいはシティに修学旅行に行くみたいだけど？」

「・・・はい。」

「・・・ああ。」

「・・・そうです。」

スバルとミソラとツカサ、ジャックにゴン太、咲夜と妖夢が答える。

しかし・・・

「・・・え？」

「そんなこと言われたっけ？」

剣心とキルアが答える。

「そういえば・・・師匠達寝てたような・・・。」

妖夢が答える。

「・・・そーいえば心当たりが・・・。」

二人が答える。

そんな二人に呆れたように咲夜が答える。

「ハ」。・・・今度六年生で修学旅行に行くことになっていて、

コダマ小は才葉さいはシティが好例だそうです。」

「へー。」

「行くのなら、楽しんできてね！じゃあ、解散！」

ヨイリー博士が全員に言う。

こうして全員が帰路についた。

〓某所〓

ここはとある場所。

ここにはデューオととある電波人間がいた。

「ソフフフフ。お任せください、デューオ様。必ず奴らを・

・抹殺してみせます。」

『それほど言うなら、お前に力と部下を授けよう。』

・・・戦いは・・・加速する・・・。

17 電波体融合（フルシンクロ）と夜（ノツテ）（後書き）

一応剣心とキルアの能力の制約はまだあるんですが、またそれは後日、できたらします。

・・・最後のキャラは分かる人は分かりますよねwww
ほら、あの変態ロリコン紳士ですよwww
ちなみに、「ノツテ」はイタリア語で「夜」の意の「Notte」の音声を作者の判断でカタカナ化したものなんで、あしからず。これからもこんな、なんちゃってイタリア語が出てきますが勘弁してください。

18 ウェーブライナーにて(前書き)

うーん、題名がWWW

18 ウェーブライナーにて

〓 修学旅行当日（月曜日） 〓

今日は待ちに待った修学旅行。

現在、コダマ小学校六年生は二泊三日の才葉シティ修学旅行に行くためにウェーブライナーを利用していた。

「楽しみだねスバル君！」

「そ、そうだね・・・（ミソラちゃん、後ろから感じる殺気がいたいんだけど!?!）」

とりあえず、あの後スバルとミソラはクラスの一部、というか一人を除き公認カップルになった。

そしてその一人と言うのが・・・

「・・・・・・・・」

「委員長・・・・・・・・」

「怖いです〜!」

『ブロロロロ・・・俺は強い、俺は強い・・・』

『オックス、残念だけど自己暗示でどうにかなる確率0%!』

キザマロはともかく、何度も戦闘経験のあるオックスやゴン太を怖がらせるレベルの怒気。

もう、この人最強なんじゃないかと思うのは作者だけではないはず。

その様子を見ながらジャックは爆笑しながらツカサはいつもの笑顔で見ている。

『クッククク、スバルの奴焦ってるぜ。』

『ふふふ、ミソラも楽しそうね。』

自分のパートナーを見守るウォーロックとハープ。

『いつみてもあの人たちは飽きないわよね〜。』

「そうね、タイマー。」

パートナーの言葉にうなづく咲夜。

『なんかこういうのもいいね』

「やっぱり楽しまないと！ね、師匠。」

パートナーの言葉に共感しながら剣心とキルアに話を振る妖夢。
しかし……

『残念。こいつら寝てるぞ。』

『なんだかんだで、昨日まで寝てないしな。』

フォルテとソルが答える。

実は二人は全員にPGMを配った後帰宅。寝ようと思ったがPGM作りのせいで滞っていた企業向けのセキュリティソフトの開発、バトルチップの復刻などの本業を行った結果終わったのは昨日のPM6：30頃。寝る前に自分たちの趣味の一つである自分達用の武器型マテリアルウェブの開発をしようとしたら時間を忘れてしまい結果気が付いたらPM11：00をまわっていたという大惨事を引き起こした。

閑話休題

「まったく。いつものことだけど……」

「まあ、いいじゃない。これはこれで師匠たちらしくて。」

「そうね……でも……」

「でも……なに？」

何かをたくらんだような顔を咲夜がする。

妖夢はいやな予感をするが一応聞く。

「寝てる間にいたずらしない？」

「……ねえ咲夜。」

「何、妖夢。あなたは反対なの？」

呆れたように妖夢が言う。

「……師匠達寝ぼけて反撃してくるよ？気絶するレベルの。」

「それもそうね……」

どんな生物でも寝ているときは無防備になる。しかし、この二人は寝ているときだろうと超直感と、危機察知能力を併用して、瞬時に反撃できる。

・・・それ以前にこの二人が気絶以外で他人の前で寝ること自体珍しい。それほど二人は咲夜と妖夢を信頼しているということだ。

閑話休題。

すると突然、

「・・・!?!?」

「わ!どうしたの二人とも!?!」

「まさか・・・何かみたんですか?」

「ああ、見たぜ・・・」

「かなりでかい・・・」

「青い獣ノ赤い鳥をな。・・・え?」

二人が夢で見た者を同時に言うが何一つ掠らない。

「まったくもう。」

「脅かさないで下さいよ師匠!」

「・・・あ、ああ。スマン」

腑に落ちないようだが謝る二人。

「・・・あ、そういえば・・・」

「二人ともハンター出して。」

思い出したように咲夜と妖夢に言うキラアと剣心。

「え?」

「なんでですか?」

「昨日、対電波ウイルス用に武器型マテリアルウェーブを作った。お前ら用に咲夜は常に一定量をキープするナイフ。妖夢には刀を作ったから、データのインストール。」

「ちなみに俺とキラアは、指先から肘まで覆う装甲に肘にも一本の尖った伸縮自在の突起がある爪型の武器。」

余談だがこの武器はウィザードにも適応できる。一応ある企業が自立型ウィザードや、オペレーターの意思でバトルカード無し、もしくはウィザード無しで本人の戦闘力を上げたり、護身用のものが欲しいと二人に依頼した物の二人が作った詩作品だ。どんなウィザードにも適応できる武器は一応キラアと剣心が使ってる爪型だけな

のでまだ研究中だ。

閑話休題。

「いや、それは良いんだけどなんで私達に武器を？」

「私達電波変換できるじゃないですか。」

そう。いくら強い武器だろうと電波変換に敵うわけがない。

「単純にデータ取りたいってのもあるけど、一応スバルと例外としてジャック以外正体一応ばれてない訳じゃん。」

「まあ、ばらしてもいいんだけど一応ドッキリ的な意味こめて。要するにあまり目立ちたくないというわけだ。」

「は。師匠らしいと言えはらしいけど・・・。」

「まあ、いいじゃない楽しそうだし。」

「・・・まあ、そうですね。」

・・・こんな感じで四人が話を進めているとき、スバルたちはと言つと・・・

「ねえ、スバル君。自由行動どうしようか？」

ミソラがスバルに聞く。一応コダマ小では、ハンターと言つツールがあるので二人一組以上ならどんな組み合わせでも行動班ができる。

「えつと、そうだね・・・(殺気が~~~~!?)」

・・・何度も言うが、世界を救ったヒーローが戦わずして降参するなんてこの人最強なんじゃないだろうか・・・。

「あ、そういえばツカサ君とジャックとゴン太。新しい機能試してみた？」

「(む)。スバル君逃げたな。」

こうしてスバルは他人に質問という手を使いミソラの質問とルナの殺気から一時的に解放される。

「いや、俺はまだだぞ。」

ゴン太が答える。

「僕とジャックは試してみたよ。」

「フルシンク口に成功したと言えばしたんだけど・・・まあ、お楽しみか？」

「当然！」

ジャックの言葉にツカサが頷く。

「ねえ、・・・何盛り上がってるの？」

すると少しだけ殺気を抑えたルナが話に入ってきた。

『スバルたちの新しい力についてだよ。』

ウォーロックが説明する。

「へく。またヨイリー博士が作ってくれたの？スバル君。」

「え！？えくと・・・そうだよ。」

突然の質問に少しつかえながら言うスバル。

実はP G Mを配られた学校組は昨日の夜、

【分かってると思うけど・・・このP G M作ったこと俺達って事、俺達に許可なく誰かに言うなよ。

ルナとかクラスメイトにはドツキリ的な意味があるんだけど、ただでさえ他の企業から狙われやすい技術で俺らがN W Xのトップだとばれると面倒だから。だからもし、誰かに言ったら・・・殺しますよ（笑い）】

という、何ともシャレにならないメールが二人から届いたからである。

正直、元といえ、殺し屋にこれ言われるのは怖いと思う。

「ふん。」

納得した様にうなづくルナ。

すると思いついたように言った。

「・・・そうだわ！この際だから、私達ルナルナ団は転校生と一緒に回って親睦を深めましょう！」

「えーと、それっておせっかいて「何か!?」「いえ！なんでもありません！」

なにかを言おうとしたキザマロをルナが一喝する。

ちなみにルナルナ団とは去年ルナを生徒会長にするという目標レインを定めた、スバル、ゴン太、キザマロ、そしてなぜか本人一（ちなみにこのグループ名も彼女命名）で構成されたグループである。

「がんばってこいスバル。」

ジャックが慰めるようにスバルの肩に手を置く。

しかし・・・

「何言ってるのジャック。もちろんあなたとツカサ君もよ？」

「・・・え？」

ジャックはともかくツカサは完全に巻き込まれた。

そんな自分のパートナーから少し離れた所でウィザードたちは談笑していた。

「まったくいつもスバルは大変だな。」

「いや、今回は俺らのパートナーのがかわいそうなのでは？」

ウォーロックの言葉にコーヴァスとヒカルがツツコム。

「今回はかりはしょうがないわね」

「断れる確率0.000000000000001%！」

ハーブの言葉にペディアがもつともらしい数字をつなげる。

「・・・みなさん。うちのルナちゃんがすいません・・・」

モードが全員に謝る。

ちなみにオックスはまだ自己暗示を続けている。

その頃転校生組は・・・

「……」(……なんか……寒気が……)「……」
四人とも寒気と言うか、悪寒を感じていた。

「某所」

「フフフフ。さあ、星河スバル私の脚本の上で……踊り狂え……!!」

危機が……超直感でも感じられない危機が……音を立てて近付いている……。

18 ウェープライナーにて（後書き）

二人がこの危機に気付けなかったのは後々。

ちなみにこのマテリアルウェーブの武器正直一発ネタです。

活躍するかどうか微妙です。

・・・こんな委員長いたら絶対喧嘩するだろうなwwww

今頃ですけどNWの由来は、ボンゴレファミリーの元となったのが自警団だったので自警団って意味の「Neighborhood

Watch」。その現在十代目ボスということでローマ数字で十の「?」から。

まあ、作者の考えなんてこんなもんですよwwww

ちなみに作者は福島原発がどうなるうが福島原発から約170?の

自宅から逃げる気ゼロです。www

まあ、親の権限で移動させられるんでしょうがwww

ちなみに作者の年齢は0〜30のどこかですww

19 広場にて(前書き)

ふと気がついたこと。

あれ？まだ一度もバトルカード使った戦闘シーン書いてないんじゃない？

19 広場にて

「才葉シティ セントラルタウン 広場」

コダマ小学校六年生はセントラルタウンに着き今日は団体行動をしている。

「ここは、ある英雄を讃えた石碑がある公園です。ここでお昼を食べましょう。」

ガイドの人がそう言うとみんな各々の弁当を食べ始める。

「スバル君！一緒に食べよう！」

「うん、いいよ。」

スバルの事をミソラが誘ったのでスバルのクラスメートは、他のクラスのミソラファン、及びスバルのファンに事情を説明し少し距離を置く。

ちなみに、認めるか！、と二人の仲を邪魔しようとする者には、ツカサに頼まれた剣心、キルア、咲夜、妖夢の四人が（嫌々）遠くから殺気を当てる動きを止める。

こうして二人の邪魔をする者はいなく

「ご一緒してもよろしいかしら？」

訂正、一人いた。

「なんでルナちゃん、いつも私とスバル君の邪魔するの!?!」

「邪魔なんかして無いわよ！」

女の修羅場の中にいるスバルは一番の戦友にアドバイスを頼もうとする

「どうしようウォーロック!?!...って居ないし!?!」

...実はハープが気を使って連れ出し、それぞれウォーロックは剣心、ハープはキルアのハンターにいるのだが...今回は失敗だと思っ。

「...何なんだこの状態...」

「...さあ...」

遠くから自分達の計画をことごとく無視されたジャックとツカサがつぶやく。

ちなみに、今ゴン太、ジャック、ツカサ、は一緒に昼食を食べていた。

キザマロは今トイレに行っていたりする。

「・・・なんで三人はいつもあんなに騒がしいんだろうな。一緒に良いか？」

嫌々殺気を振りまいていた四人が合流する。

「いいけど、悪いな剣心。なんかお前たちの苦労も水の泡になっちゃったし。」

ジャックが謝る。

「ああ、良いって。牽制にもなったし。」

『・・・？牽制って何だ？』

「それってうまいのか？」

ウオーロックとゴン太が聞く。

咲夜と妖夢がその質問に答える。

「牽制って言うのは相手を威圧したりして自由な行動を妨げることです。一応これでも剣心とキルアは敵対組織に賞金首にされてますから。私と妖夢もですけど・・・」

「まあ、それ以前にこの前の戦いのせいで多分スバルさん達も黒幕の手のものに狙われてると思いますからそいつらの牽制も入ってますけどね。」

「・・・あ、そう・・・」

『なんだ、つまんね』

三人とハープはあきれ、ハープを除くウィザードが愚痴る。

「お待たせしましたーみなさん。」

キザマロが帰ってくる。

「・・・じゃあ、お昼食べようか。」

「おお。よっしゃー牛丼食うぞー！」

ツカサの言葉に賛同するゴン太。

「お弁当に牛丼ってゴン太君・・・」

「まあ、良いじゃねーか。ゴン太らしくて。」

「・・・それもそうですね。」

こうして全員が昼食を食べている横で・・・

「なんですつてー！」

「そつちこそなによー！」

「（誰か助けてー！！）」

世界の英雄は心の中で絶叫していた。

|| 一時間後 ||

昼食も終わりコダマ小学校六年生御一行は公園に整列していた。

「・・・ひどい目にあつた・・・」

「大丈夫か？スバル。」

あの後スバルはなんとか生還した。

「ほんとに大丈夫？スバル君。」

「大丈夫だよ。ありがとうハープ。」

「ごめんねスバル君・・・」

ミソラが謝る。

「大丈夫だつて。ミソラちゃん。元気出して！」

スバルがミソラを励ます。

「じゃあ、みなさん自由行動です！絶対に班は四人以上の男女混

合ですよ！」

・・・物によるけどなんでこんなに先生は男女混合が好きなのか
分からなくなるのは作者だけではないはず。・・・学校の生活班、
然りしかフォーケダンス然り。

閑話休題

「じゃあ、剣心君達。私と一緒に行きましようか。」

ルナが四人に言うが・・・

「あら？・・・また逃げたのねー！」

『ルナちゃん、落ち着いて!』

ルナのパートナー、モードがなだめる。

実はさっきの昼食中に電波変換ができる九人は一緒に行動した方がいいと剣心とキルアが提案したからだ。

理由は、剣心曰く

「戦力を固めるのもどうかと思うけど、俺とキルアと咲夜に妖夢は裏社会の奴に、スバルを含めた遊撃隊は正体不明の敵のターゲットになつてるだろうから固まってた方がましだろ。情報の伝達口頭で、できるし。」

だ、そうだ。

つまり当然・・・

「あれ?スバルとミソラちゃん。ジャックにツカサにゴン太もいないなーどこ行つたんだろ?」

クラスメイトの誰かがつぶやく。

「きーーーーー!覚えてなさい!」

「『(また僕たち置いてきぼりですかー!!)』」

キザマロとペディアの絶叫が(心の中で)こだまする。

『セントラルタウン』

ここはビルとビルの中の路地裏

「さて、どこ行こうか?・・・なんか寒気がするけど・・・」

ツカサが全員に聞く。

スバル、ミソラ、ジャック、ゴン太は電波変換で、ツカサはみんなの目を盗んで、剣心、キルア、咲夜、妖夢は【消命】という気配を消す、暗殺用技術で指定していた場所に集まっていた。

「まあ、やっぱりオーソドックスに万博記念公園じゃね?」

ジャックが提案する。

「あ、私も行きたい!確か二百年くらい前の万博の記念公園だっけ?」

「うん!しかも当時の万博の設備やオピニオンもそのままらしい

よ！」

ミソラとスバルが賛同する。

『『『ふん。』』』』

興味無さそうにウォーロック、コーヴァス、オックス、ヒカルが
呟く。

「四人はそこでいいのか？」

ゴン太が剣心達に聞く。

「別にどこでもいいですよ。」

「私こういうところあんまり来たこと無いから皆さんにおまかせし
ます。いいですよ、師匠！」

咲夜と妖夢が答え、妖夢が二人に聞く。

しかし……

「……師匠？」

二人は虚空を見つめていた。
すると、

「……マテリアライズ……」

「エルボーファンング……！」

そう告げると自分の作った武器の一部である、肘の伸縮自在の突
起だけを装備する。

「スバル、悪いけど俺とキルアの視線の先、ビジライザーで見て
くんね？」

「多分ウィルスがいるんだけど……」

二人が言う。

「え！？分かった！」

そういうとスバルはビジライザーを装着する。
すると……

「わ！本当にウィルスだ！」

そこには、メットリオ2、クロケット、コテツード、スピダッシ
ユの四体（四体ともGクラス）がいた。高さは約3M先

「「やっぱりな！」」

そういつと二人はビルの壁を使って跳躍そして、

「ほ！」

「てい！」

軽々と剣心はメットリオ2とクロケットに、キルアはコテツードとスピダツシユにそれぞれ二撃ずつ与えてデリートする。

そして、軽々と着地をする。

「どうして、攻撃が当たったんだ？」

ゴン太が聞く。

普通周波数を可視光の域にしていない電波ウイルスに攻撃を与えるなんて不可能に近い。

「そう言えば忘れてたわね。二人の目の事。」

咲夜が呟く。

「師匠達の目は普通の人間が見える「可視光」はもちろん通常は見えない赤外線から弱い紫外線を描えることができるんですよ。」

「まあ、いつもは目の力意図的にセーブしてるし、今回の場合だと何もない空間から電磁波が見えてただけでどんなウイルスか、それ以前にウイルスなのかも分んなかったけどな。」

キルアが謙遜しながら言う

「とはいつてもこの目があったからフォルテたち四人に会うことができたんだけどね……。」

剣心が懐かしそうに言う。

「あ、そうだ！コンタクト型のディスプレイにビジライザーの機能入れれば便利じゃね？」

「おお、よさそうだな。」

キルアの提案に賛同する剣心。

「……でもなんでこんなところにウイルスが？」

ツカサが疑問に思う。

『偶然いただけじゃね？』

『俺もそう思うぞ。』

ウォーロックの意見にオックスとヒカルも賛同する。

「とりあえず、記念公園早くいかねーか？」
ジャックが全員に聞く。

「そうだよ、みんな行こう！」

「ちよ、ミソラちゃんひっぱらないでよ！／＼／＼」
ミソラがスバルの手を引きながら先導する。

「あの二人は本当に仲いいね。」
ツカサが告げる。

「まあ、深く考えても仕方ないしなんかあったら止めればいいだけだ。」

「早く俺らも行こうぜ。」

剣心とキルアがツカサに言う。

「・・・それもそうだね！」

こうして一行は公園に行くため移動し始めた。

19 広場にて（後書き）

さあ、なんかドンドン人間離れしてるような気がWWW
次回、多分戦闘です。
多分・・・

20 都市にて（前書き）

更新速度が落ちてるな

20 都市にて

〓 修学旅行 二日目 〓

修学旅行も二日目。

ちなみに遊撃隊はあの後ルナに見つかったがなんとか、転校生と交流を深めてたらしいので良しとなりぎりぎり許された。

そして今日の予定は午前中は裁判所で有名なグリーントウンに行きそこで自由行動。昼食を食べ午後は水族館が大人気のシーサイドタウンに行くというような日程だった。

そんなわけで現在グリーントウンの裁判所。

「これがあの有名な審判の木ですか！」

「コンピューターで公平に人を裁くんだよね！」

スバルとキザマロがはしゃぐ。

「落ち着いて二人とも。」

ツカサが二人を注意する。

「こうしてみるとスバル君と年同じって実感するね。」

「たしかにそうね。」

ミソラの言葉に頷くハープ。

世界を救うためにいろんなものをしよってきたスバルの精神年齢は高めなのでミソラ的にはこういうスバルを見ると落ち着くのだそうだ。

例えて言うならばどんな天才でも苦手なことがあると思った時の作者の心情と同じだと作者は思いまーす。(棒読み)

閑話休題

『ダ~~~~~!!俺は暴れたいんだ~~~~!!』

『『『同感だ~~~~!暴れさせる~~~~!!』』』

ウオーロックの叫びにオックス、コーヴァス、ヒカルが同意する。

『にぎやかだな。』

『なんか、こういうの良いね〜』

フォルテとソルがのんびりと呟く。

「……平和だな」

剣心が飲み物を飲みながらつぶやく

「そうね」

咲夜が同意する。

『……おい、周りの注意、怠おこたんなよ。』

『まったく。二人は変なところで気を抜く。』

二人のパートナーが呆れながら注意する。

「まあ、良いじゃんか。」

「そうですね……全員ちゃんと変な視線には気が付いてます

よ……。」

『やっぱりするよね?』

『そうだね……。』

キルアと妖夢の言葉に二人のパートナー同士が確認する。

そう、まだ誰にも言っていないが四人とそのパートナーは朝から奇妙な視線に気が付いていた。

ではなぜ遊撃隊メンバーにすら言わないのか。

なぜなら……

「……」(だつてこのクラス有名人や、美形多いんだもん。)

……世界のヒーローや、国民的アイドル、ツカサやジャック等のかっこいい男子やルナ等のかわいい(きれい)女子が多いこのクラス。下手したらストーカーやファン。単純に見惚れている人の視線かもしれない。

敵かもしれないが、無関係な(もしくは犯罪者まがいの)一般人かもしれない。

下手に警戒させず相手の出方を見るのもいいかもしれない。

まあしかし一番は……

「あなた達! 静かにしなさい!」

「……ひ……! すいません!」

スバル達にとっては楽しみだった修学旅行だ。警戒させてストレスを感じさせつまらないものにしては可哀そうだ。

やばくなったら俺らが迅速に動けばいい、というのが一番のようだ。

「さて、俺らもほどほどに楽しむか。」

「絶対周りの視線に気、配れよ。」

「了解！」

四人が気合を入れなおす。

こうして何事もなく・・・シーサイドタウンでまたミソラとルナがスバルの取り合い（原因はどっちと一緒に回るか。結果・・・スバルとミソラが電波変換で逃走AND見学。その後二人でルナに怒られる。）はあったが・・・二日目は終了した。

〓 修学旅行 三日目 〓

今日は最終日。

日程としては空中を浮かぶ都市、スカイタウンに行き、昼食を食べてから学校に帰るという日程だ。

「・・・（昨日は仕掛けてこなかった。・・・もし、今までの視線が敵のものだったら仕掛けてくるなら今日！）」

四人は昨日よりも良く、そして勘が良かったり、戦闘経験豊富なメンバーが多い遊撃隊には気づかれぬ程度に周りに気を配っていた。

「・・・周りには正体不明の電波人間やノイズドカードのせいで暴走したウィザード、またはそれらに類するものの周波数は無いぞ。」

「まあ、電波変換前だったり、プロテクトかけてたりしたら意味無いけどな。」

「少なくとも視線は生身の人間か、ステルスタイプの敵か。選択肢自体は狭くなった。」

「それだけ分かれば十分だ。」

フォルテとソルが報告し、剣心とキルアが礼を言う。

ついでに言えばステルスタイプの敵は大体が一撃必殺の技よりも手数で戦うタイプだったり、速度が遅い、防御が甘い等の弱点を補うためにステルス能力特化型になつてゐる場合が多い。

暗殺が目的なら厄介だが、超直感で脅威を感知できるキルアと剣心には意味がほぼ無い。

そして、一度戦闘に持ち込めば敵が見えずに負ける敗率よりも、全体攻撃や自動追尾型の技などによる勝率の方が高くなる。

そういう情報も一瞬で二人は判断し、十分と言つたのだ。

「でも、今いるのは高度約3300フィート。キロメートル換算で100?ですよ?」

「十分つてこの都市ごと落とされたらどうするの?」

実際この高さから落とせば一キログラムのもので98066.5ジュールの力で衝突する。これをキロワットで表すと98.0665キロワット。馬力で表す133馬力。四輪自動車の馬力にも匹敵する。しかも、これは一キログラム。実際是最悪の場合トン単位の都市が人を乗せたまま落下する。しかもこの都市は才葉シティの天気を操作している。落ちたら後々まで人々の生活にも影響を及ぼすだろう。

しかし・・・

「その心配は無い」

「何を根拠に?」

剣心とキルアが断言したので咲夜と妖夢が根拠を聞く。

「実を言うと二百年ぐらい前に、一度この年が墜落沙汰になつたんだと。で、結果として落ちなかつたんだけどこんなことがないようにこの都市の飛行制御のPGMはこの年の電脳の奥深くに配置。さらに、周りに何兆というパターンのある防壁を十枚張つてんだと。」

「で、この防壁つてのは十の十八乗分の一秒で十枚ともコードがかぶらないようにパターンを変えるうえ侵入者をそれを同時にはじ

「了解。」

キルアの言葉で咲夜と妖夢が散る。

「・・・これが杞憂なら良いがな・・・。」

「ああ・・・俺らも行くぞ。」

二人はそう言葉を交わして別れる。

その二人から離れた所で大柄な何かが見下ろしてるとも知らずに。

20 都市にて（後書き）

・・・なんかもう、グダグダ感が取れないWWW

なんか、夏休み編とかできてんのにそれまでの話ができてないWWW
これ、完結するかな？

21 戦いの予兆（前書き）

更新スピードがどんどん落ちていく・・・orz

21 戦いの予兆

「スカイタウン 連絡用通路 スバル側^{サイド}」

「・・・なんで、二人は僕らに指示したんだろう?」

「さつきも言ってたろ? 一日目の反省って。この前みたいに電波ウイルスの大群とかもあり得るだろうから。」

スバルとウォーロックはそんなことをしゃべりながら班のみんなと共に連絡用通路を渡っていた。

「スバル、早く行こうぜ。」

あつめ たいようがスバルを呼ぶ。

「あ、ごめん今行くよ。」

スバルが追い付こうとする。すると・・・

「!? スバル! 上だ!」

「え!?!」

すると上から巨大な石が降ってきた。

「うわ!?!」

スバルはすんでのところで避ける。

しかし、

ミシミシ・・・バキバキッ!

「わあああああ!!!」

「きゃあああああ!!!」

岩の重さに耐えられなくなった連絡通路が崩落する。

「く、ロック行くよ!!!」

「おう!」

「トランスコード003! シューティングスターロックマン!」

スバルは電波変換をして落ちて行く班のメンバー全員を引き上げる。

「ハアハア、ありがとうスバル・・・」

「うう、死ぬかと思った・・・ありがとう星河君。」

班の全員がお礼を言う。

「ロック！」

「分かってるよ！原因ならあいつだ！」

ウォーロックが示した先にはストングル（ストンゴ系最上種）がいた。

「バトルカード・ブレイクサーベルX！」

スバルの右手が螺旋状のエネルギー体が周りにある、サーベルに変化する。

「りゃあ！」

一閃、一瞬でストングルはデリートされる。

「ふう。」

スバルが一息つく。
すると、

【只今館内にいるみなさん！速やかに退避スペースに避難してください！繰り返します・・・】

館内放送が流れてきた。

「スバル！とりあえずみんなと合流するぞ！」

「分かった！じゃあ、皆は退避スペースに行って！」

「・・・分かった。」「・・・」

全員が行くのを見届けたスバルは周波数を変えて見晴らしのいいところへ移動した。

「少し前 メインデッキ 委員長&剣心側サイド」

ここはメインデッキ、ここには天候を表した昔の電化製品のオブリエがある

「（・・・どうしてこうなった？）」

スバル達に嫌なサプライズが起こる少し前、剣心は今の状態に疑問を持っていた。

なぜなら・・・

「（やっと剣心君が私の部k・・・もとい言うことを聞いてくれたわ！この調子で後の三人も・・・）」

「(・・・なんでこんなにニヤニヤしてんだ?・・・やっぱり寒気が・・・原因こいつ?それとも高度?)」

一番扱いにくいルナの班に入れられたからである。

「(ハンター対応のルーレットソフトで決めたは良いけど、これは何かの悪意を感じる。)」

フォルテが自分のパートナーが自分のパートナーの不幸を憂いていると、

ミシミシ・・・バキバキッ!

遠くから何かが崩れる音が聞こえた。

『剣心・・・?』

「ああ、分かってる。なんだあの・・・」

音、と言おうとした剣心の言葉は悲鳴によりかき消される。

さらにそのあと館内放送が流れ始めた。

「なに!?何があつたの?」

焦るルナやほかの班のメンバー。

しかし剣心は落ち着いていた。

「向こうは確かスバルに任せてたよな?」

『ああ、安心だろう。』

「じゃあ、俺らは・・・こっちをどうにかしますか。」

剣心がそう言つて上を見ると上から大きい雪玉が降ってきた。

「こんどはなによ～～!?!?」

「わ～～!?!?間に合わない!?!?」

ルナと班のメンバーが驚く。

「(面倒だな・・・これをアームファンクとエルボーファンクでどうにかしたとしても、後で色々聞かれるだろうし、っーかこんな大質量の雪切つても足場が落ちるだけ・・・)・・・しゃーなーか。全員伏せてる。」

剣心が自分以外に指示を出す。

「え！？何言って・・・」

「死にたくねーなら伏せてる。行くぞフォルテ。」
『了解。』

「トランスコード023。フォルテ・クロス。」

そういうと剣心の体が光に包まれる。

そして、

「・・・死炎盾。」
ファイアンマシールド

剣心の手から今回は闇の炎単品が盾を形成。当たった雪玉はもろく崩れ去った。

「（ちっ、敵さんはどつかで様子見か。だが、この程度なら電波体か、ウィルスだろう。でも、雪降らせてくるウィルスなんていたっけ？）」

「大丈夫！？剣心君！？」

考え事をしていた剣心に遠くで事の一部始終を見ていたスバルが文字通り飛んでくる。

「ロックマン様~~~~~!!」

それを見たルナが飛びつこうとした。

が、

「きゃ!?!」

剣心に押される。

「何すんのよ！そーだ！なんであなたが電波変換を！・・・ハッ、そうか！今回の騒ぎがあなたが・・・」

勝手な推理を展開するルナを無視して剣心が続ける。

「おお、大丈夫だ。そっちは？」

「うん、突然石が降ってきて連絡通路が落ちたんだ。」
スバルが先ほどの出来事を報告する。

『落石って事はストーンゴ系か？』

『ああ、そうだ。』

フォルテの問いに答えるウォーロック
すると、

全員に緊張が走る。

【で、応援に行こうとしたんだが・・・WAXAの周りのウェー
ブロードに大量のウィルスがいてな。完全にこっちは完全に孤立し
た。】

暁の言葉から悔しさが滲んでいた。

【じゃあ、俺らがどうにかします。】

【才葉シティの中核の町だからセントラル、グリーン、スカイ、
シーサイドの四つですよな？】

【ああ、そうだが？】

キルアの質問に答える暁。

【じゃあ、こっちを四つに班に分けてそれぞれ鎮静化に向かいま
す。】

【こっちもがんばるんで、そっちもがんばってください。】

【！？・・・分かった。そっちは任せるぞ。じゃあ、こっちは通
信切るぞ！】

暁が少し考えた後承認し、通信を切る。

【皆、がんばってね。】

【幸運を祈る。】

クインティアとジョーカーも通信を切る。

【じゃあ、チーム編成な。言われたらすぐに移動しろ。まずはセ
ントラルの担当は、スバルとミソラ。】

【【了解！】】

剣心の指示に答え、すぐに持場へ行く二人。

【次は、ここの担当。咲夜と妖夢。つーことで避難の誘導頼む。】

【【YES SIR！】】

【こんなときにふざけんな・・・】

【【はい】】

キルアと少し漫才してから誘導に向かう二人。

【シーサイドエリアは、ツカサとヒカルと俺だ。】

【分かったよ。】

【おう！】

ツカサとヒカルと剣心がそれぞれの持ち場へ向かう。

【残った、ゴン太、ジャック、俺はグリーンエリアだ。】

【【おう！】】

残っていた、ゴン太、ジャック、キルアも持ち場に飛んで行った。

「……一体全体なんなのよ……！！」

おいてきぼりにされたルナの叫びがスカイタウンに響く。

彼女が詳しく状況を知ったのは避難の誘導をしている咲夜と妖夢から話を聞いてからであった。

21 戦いの予兆（後書き）

闇と月の死ぬ気の炎の性質はまたいずれ。

次回から戦闘！

・・・え？

なんで剣心が電波変換したかって？

それは、リングに炎を生身で灯すと余計面倒なことになったから。

あと、他のメンバーも館内放送聞いて電波変換しました。

22 戦いの序章（前書き）

修学旅行行ってきました！

楽しかったです！

京都と奈良！

作者の一番の思い出はデジカメが盛大にクラッシュしたこととお小遣いが少なかったことですWWW

22 戦いの序章

「セントラルタウン」

スバルとミソラが到着した時既に避難は終了していた。なので二人は存分に戦っていた。

しかし……

「そんな……」

「……うそでしょ？」

目の前にいたのはなんとエンプティーとオリガ（電波変換前）だった。

ウィルスと戦っている最中に突如現れた二人。

すると、二人の体が光はじめ、それが一つになる。

そして、強烈に発光する。

『クツ！気をつけるスバル！』

『ミソラも気を付けて！』

ウォーロックとハープが声を上げる。

そして……

キイイイイ…………… シュウウウウ。

風が吹き土煙から一体の電波体が現れる。

「我の名は……オリガ・マジック！」

「グリーンタウン」

「オックス・フレーム！」

「グレイブ・クロー！」

こちらでも戦闘が開始されていた。

このエリアには木属性の敵が多いので炎を主に使う二人は有利に戦っていた。

一方キルアはと言うと、

「バトルカード・エドギリブレード3。」

バトルカードを使用し、刀で戦っていた。

エドギリブレードはバトルカードでは珍しく手が変化せずにそのまま武器が出てくるバトルカード。

さらに1〜Xまで四段階あるカード、この四種類のカードのどれでもいいので連続で使うと威力と攻撃範囲がどんどん上がっていくカード。

まずは一枚目。

「さして、行くか！」

そういうと足に力を込めウィルスが密集したところに割って入る。

そして、

「センラントウセイ戦嵐刀勢！」

そういうとキルアは体勢を低くし足を軸に回転。その遠心力を利用して連続斬りを行いながら、移動しウィルスを一掃する。

「ふう。」

「すご・・・」

「なんだ今の・・・」

一息つくキルアに驚いている二人。

『まあ、キルアがやってるのは全部模倣だからね。こいつは初見の技でも真似できるし。』

ソルが説明する。

ちなみに剣心も同様である。

・・・ついでに逆説。この技を使える人間（模倣元）がいるということ。

「・・・！ゴン太！ジャック！上を見てみ！」

キルアが二人に不敵に笑いながら言う。

「うん？」

「あ？」

ゴン太とジャックも上を見上げる。

すると・・・

「おい・・・あれって・・・!?」

『ブロロロ・・・マジか・・・!?』

ゴン太とオックスが驚く。

「チツ！」

『おいおい、マジかよ。』

ジャック舌打ちをし、とコーヴァスも驚く。

なぜならそこには、去年倒したはずのクラブ・ストロングとムーの電波体、コンドルだった。

「おー。去年大量にこの鳥や他のが襲ってきたせいで休憩なしで何日も戦ったのはそこそこいい思い出・・・！来るよ！」

キルアがそういうと二体が光はじめ、それが一つになり強烈に発光する。

そして・・・

キイイイイ…………… シュウウウウ。

風が吹き土煙から一体の電波体が現れる。

「我の名は・・・クラブ・コンドル！」

「シーサイドエリア」

「『サンダ ショック！』」

ツカサとヒカルが違う方向にそれぞれ新しく手に入れた単体で打てる電撃、サンダ ショックを放つ。

どうやらPGMの効果は良好のようだ。

「バトルカード！ロングソード×2！」

剣心は両手をロングソードに変え、ウィルスの密集地に突っ込む。

そして・・・

『ヒ・サンナ・ティ・スクアール
双鯨の牙！』

両手の剣で突く・・・いや、空間を齧るといふ表現が正しい様な

連続刺突攻撃を繰り返す。

もちろん、移動しているので進行方向にいるウィルスは細かく刻まれる。

「何、今の技・・・」

『なんつー突進力と破壊力だよ・・・』
ツカサとヒカルが驚く。

ちなみに今の技は模倣技ではない。

模倣した技である鮫の牙ザンナ・テイ・スクアールという片手で使う技を両手にできるように改良したものである。

前に書いたように初見で何でもできるということは良く言えば万能悪く言えば器用貧乏に通じている。

超直感は通常時は今までいた環境の影響でボスよりもその直感力は高い。

しかしそれは戦闘経験の差であり、体の内面のリミッターを解除し超直感を三人とも開放した状況であれば二人の超直感よりボスの超直感の方が圧倒的に強くなる。

何でもできるが、誰よりも剣の才があるわけでも拳闘の才能もなく、無いものだらけ。その道では最強になれない。有るものと言えばはそのスピードと戦闘センスに殺しのセンスと身体能力。

それが剣心とキルアに配られた最初の人生での生きる手段カード。それを配られた剣心とキルアにできるのは・・・

技の模倣とその発展だった。

例えば今回のようにば片手で行う技を両手で発動したり、違う武器での発動、技同士の複合などどんな状況下でも対応できるように自らの攻撃の手札を増やしてきた。

これが二人が最強と言われる由縁である。

しかし、それでもコピーにも出来る限界がある。

それをできるように鍛えたり、自分でできるように、力や早さやリーチを変えて使えるようにするのも二人の凄いとこである。

閑話休題

『剣心……』

「ああ。そこに居るのは分かってんだ。とつとと出てきやがれ。」
剣心が海に向かって言う。

すると、ムーの電波体ブラキオと、スピード・マグネッツが海から現れた。

「あの二体は……!？」

『チツ。おいおい、めんどくせーな。』

ツカサとヒカルが驚きながら言う。

「なんだ？弱点属性同士を組ますなんて馬鹿……!？来るぞ。」

剣心があきれながら言うと、二体が光はじめ、それが一つになり強烈に発光する。

そして……

キイイイイイ…………… シュウウウウウ。

風が吹き土煙から一体の電波体が現れる

「我の名は……スピード・ウェーブ!」

「スカイタウン」

「スピリチュアルソード!」

「チャンドラナイフ!」

こちらでも戦闘が開始されていた。しかし他とは違いかなりの数のウィルスが消去デリートされている。

理由は一つ。ここは他の町とは違い空中に浮かんでいる。いくら中枢にハッキング出来ないからと言っても戦いが長期化すればいずれこの都市を飛ばしている機械に何らかの影響が出てくる。

そうなる今退避スペースにいる個々の職員やコダマ小の生徒、一般客にまで被害が出る。

故にマフィアである二人の速攻。

短時間に大量のウィルスが消去デリートされている。

・・・逆説。剣心とキルアは余裕があるのでさほど本気を出して
いない。

・・・いや・・・まあ、普通の状況でも本気を出さないのだが・

その理由はまた後で。

閑話休題。

「ハッ！」

咲夜が少し跳躍してから三十本はくだらないほどの大量のナイフ
をウィルスに向かって投げる。

そして・・・

「アクセルタイム！」

ヒュンッ！

掛け声をあげるとナイフに流れる時間が速くなり、突然ありえな
い速度に到達。

キンッキンッ！

更にナイフ一本一本に流れる時間の早さには差があるのでナイフ
同士がぶつかり広範囲に拡散し大量の敵を倒す。

「バトルカード！エリアイーター！」

妖夢はバトルカードの効果で一瞬でウィルスの大群と距離を詰め
る。

そして・・・

「牙突^{がとつ}・壱式^{いっしき}！」

その勢いのまま、スピリチュアルソードの刃を地面に水平な状態
にしながらか突進。

更に、

「バトルカード！ソードファイター3×2！」

ここで説明。通常ならこのカードは目にも止まらぬ連続斬撃相手に与えるバトルカード。普通ならこんな突進状態、しかも片手をつきだした状態で使うカードではない。

しかし妖夢にはPGMという新しい力がある。
つまりは……

ブウン！

妖夢の剣を囲う様に十本のノイズの刃が形成される。

そしてそのまま密集地に突っ込み、ウィルスデリートを大量に消去する。

「その技、また剣心とキルアに教わったの？」

「はい！でもこのPGM本当に凄いですね！師匠達に感謝です！」

『そうね……！？二人とも！』

『上になんかいるよ！』

パートナーの声に応じて同時に上を見る二人。

するとそこには、ダイヤ・アイスバーンとムーの電波体イエティがいた。

数と二体は間髪いれずに二体が光はじめ、それが一つになり強烈に発光する。

そして……

キイイイイ…………… シュウウウウ。

風が吹き土煙から一体の電波体が現れる

「我の名は……ダイヤ・ブリザード！」

「セントラルタウン」

『チツ、面倒なのが出てきたな！』

『気をつけて、ミソラにスバル君！』

「分かってるよ。行くよ、ミソラちゃん！」

22 戦いの序章（後書き）

容姿説明

オリガ・マジック・・・オリガジェネラルのカラーリングを黄色から青にして、顔に鉄仮面付ける。

クラブ・コンドル・・・コンドルジオグラフのカラーリングを赤から岩みたいな色に変え翼の上に草を生やす。

スペード・ウエーブ・・・カラーリングを胴体、首、頭は白。ひれは左側は赤で右側は青。

ダイヤ・ブリザード・・・カラーリングを青にして周りに氷の塊二個浮かべる。

次回から戦闘・・・だけど八話分くらいになんなこれ・・・

23 セントラルタウンの戦い(前書き)

何度も書くけど更新スピードが・・・

23 セントラルタウンの戦い

「セントラルタウン」

「行くよ！ウォーロック！」

「おう！」

スバルの掛け声に答えるウォーロック。

すると、スバルの周りにノイズの渦ができる。

そして・・・

「ノイズチェンジ！シノビ！」

そういうとスバルの体の装甲は緑に、赤いマフラーのような装飾がつく。

ただし、シノビトライブとは違い左手のウォーロックはそのままだ。

「ハーブ！行くよ！」

「ええ！」

「シヨック・アクア！」

ミソラがPGMの効果で水撃を付加した音で攻撃する。

「シノビシユリケン！」

スバルも手裏剣を三枚投げる。

しかし・・・

「フツ、効かぬ！サンダ バリア！」

オリガ・マジックの周りを雷撃が囲い防御する。

「うそ！？」

「クッ！」

はじかれたことに驚く二人。

しかし、すぐに追撃が来る。

「サモンウィルス！」

すると、スバルの前にはウィルス、ダバダンスが現れ間髪いれずに攻撃してくる。

「スバル君！」

ミソラが叫ぶ

「（クツ、速い・・・）カワリミ！」

スバルがカワリミを発動し、一気に距離を詰める。

「喰らえ！ワイドソード！」

「効かん！」

ガキン！バキッ！

「え！？」

『なんつー堅さだ！』

思いつきり振りかぶったワイドソードが、オリガ・マジックの装甲に阻まれて折れる。

出来るだけ後ろに飛んで距離をとり、折れた剣を見るスバル。

「スバル君！危ない！」

「！？」

ミソラの叫びに反応して前を見るスバル。

「喰らえ！マジックサンダ！」

上空から雷撃が降ってくる。

そして、土煙に包まれて見えなくなるスバル。

「スバル君！」

心配の声を上げるミソラ。

「・・・ジノ・・・ダイ・・・！」

土煙の中から何かが聞こえる。そして、土煙の中から三筋の赤い何かが飛び出す。

そして・・・

「NFB！エンマレップウジン！」

マジノイズでダイナソーを重ね掛けしたスバルが三人に影分身。木と炎両属性を併せ持つ手裏剣を何発も投げる。しかし・・・

「クレイジー・アーミーズ！」

大量のナイトアーミーと呼ばれる軍隊が手裏剣めがけて突進。片や、人が投げた意思を持たない金属の塊。片や意思を持つ破壊目的の小さい兵士。

当然、アーミーの群れが手裏剣をはじきスバルに押し寄せる。

「!??うわあああ!」

スバルが吹っ飛ぶ。

更に水属性のアーミーがいたらしくノイズチェンジも解ける。

「スバル君!?マシンガンストリングス!」

ミソラがギターの弦をクモの巣状に張りスバルをキャッチする。

「くっ!こんな奴らと素手である二人は戦つたのかよ!」

ウォーロックが言うのは無論剣心とキルアの事。

強さは違つたろうが、電波体と復活した暴走ウィザードの融合態と戦つたのだ。

それも素手で。

「本当に強いわね・・・こいつ・・・」

ハープが呟く。

「ふっふっふ。それはそうだろう。それから犬顔のお主!私をオ
ルカと一緒にするでな!奴は負ける前提の捨て駒。私とは、基本能
力も何もかも違つ!」

「んだと!?誰が犬だ!」

「ウォーロック・・・怒るところ違つから・・・」

ウォーロックをたしなめるスバル。

「それより、あなた達の目的はなんなの!」

「そうよ!誰が黒幕なの!」

ミソラとハープがともに聞く。

「ふむ。冥土の土産にはちょうどよからう。我らは飛行者。デユ

ーオ様を筆頭に宇宙の悪を粉碎する組織。我らのような戦闘員はデ
ィーオ様が宇宙に漂っていた様々な電波体の残留電波を保存。必要
に応じて体をディーオ様に構築し、様々な力を与えてくださる。こ
の星は、ディーオ様に悪と判断された。それ故私達はディーオ様に

従いこの星を破壊する。」

「『『』!?!?』『』『』」

全員に衝撃が走る。

「そんな・・・この星は悪なんかじゃ・・・」

「言葉が足らなかつたな。正確には悪が満ちている。よって、我々はこの星を破壊する。」

スバルの言葉を遮り、言葉をつなげるオリガ・マジック。

「悪なんかこの星にはたまって無・・・」

「この星の時間で、一年前から現在まで三回も地球を滅ぼそうとした輩がいるのか？確かに最初はこの星の者ではなかつた。しかし、残り二回はこの星のものだろう。安心しろ。この星を破壊したのと最初にこの星を侵略しようとした輩たちの星は破壊してやる。」
そこまで一気に言いきるオリガ・マジック。

「そんなの間違つてる！確かに世界には悪があるかもしれない！
だけどそれよりも善は多いはずだ！」

『そうだ！スバルの言うとおりだ！』

「そうよ！世界にはたくさんの善がある！それに、悪があつたとしても地球を壊そうなんて許さないわ！」

『そうよ！この星はあんた達なんかには破壊させたりはしないわ！』

四人がそれぞれの思いを口にする

「ふつ。いくら強がったとしてもお主らが私に勝てないことは先ほどの戦闘で明白。貴様らを倒したらこの星の主要戦力を撃破し、デューオ様の載っているロケットがこの星を破壊する。無駄な抵抗をしないことを私は勧める。」

オリガ・マジックの言うとおり先ほどの戦いを見る限り負ける可能性の方が圧倒的に高い。

「『そんなのやってみないと分からない！この星は僕／私達が守ってみせる！』」

スバルとミソラが一緒に声を上げた瞬間。

【ツヨイキズナヲカクニン。シンク口率70%。フルシンクロス

タンバイ・・・」

『スバル！ポップアップが出てきたぜ！』

『ミソラもよ！』

そこには、フルシンクロのポップアップが出ていた。

「これは・・・フルシンクロの・・・!?」

「やったねスバル君！」

スバルが驚きながらつぶやきミソラが喜ぶ。

「ふん。何やら良い事があったようだが私が貴様らを倒す未来には変わりはない。」

「そんなことやってみないと分からない！！いくよ、ミソラちゃん！！」

「うん！」

二人はポップアップをタッチし高らかに告げる。

「フルシンクロ！！」

すると二人の体が光となり一つになる。

そして体を包むように発生した風で土煙を起こしながら光が次第に弱まる。

キイイイイイ……………

そして次第に一部一部が見えてくる。

青とピンクで構成された装甲。

胸にあるハートの中にある流星マーク。

風になびくマフラー

ハープノートのフラットライブモニターとロックマンのビジライ

ズバイザーを足して割ったような頭部の装甲。

青く鋭利な感じのギター。

中世的な顔立ちにライトグリーンの瞳に黒髪。

そして・・・

・・・・・シュウウウウ

完全に土煙が晴れた時、その電波体は高らかに自分の名前を告げる。

「フルシンクロ！ シューティング・ハーブ！！」

23 セントラルタウンの戦い（後書き）

やっと出てきましたフルシンクロ。

シンクロ率ってのはのちの戦いで影響します。

60%からシンクロ可能です。

ちなみにシューティング・ハープの声は活字だと分かりにくいですが二人の声が混ざった感じの声です。

フルシンクロすると声はシンクロ元の声が混ざった感じになります。

ちなみにウオーロックとハープですがフルシンクロ中は体の一部になっいて出現できません。意識はありますが・・・

24 シーサイドタウンの戦い(前書き)

ちなみに分かりにくい説明。

剣心達を作ったフルシンク口用のPGMを装備すると、他の所有者と自分のシンク口率が分かるようになっていきます。

シンク口出来る人物が同時に発生した時はポップアップがいくつか、所有者の名前とシンク口率と共に出てきてタッチする仕組みになっています。

24 シーサイドタウンの戦い

「シーサイドタウン」

「いくぜ！俺は突っ込むから二人は援護して！」

「了解！」

『おう！』

剣心の言葉に従うツカサとヒカル。

「バトルカード！マッドバルカンX！」

剣心が左手を機関砲に変えて乱射しながら突撃する。

しかもフォルテ・クロス有能力で弾速も上がっており通常のものとはかなりスピードが違う。

しかし・・・

キンツキンツキンツ・・・

「（おいおい。まるで堪えてねーよ。どんな装甲だ。）」

そんなことを思いながら走り続ける剣心。

「ふつ。喰らえ！サンダ ブレス！グラビティロケット！」

バカ正直に突進してくる剣心に雷撃とミサイルを放つスピード・ウェーブ。

それを乱射しつつ破壊、もしくはスピードの緩急だけでかわす剣心。

避けた後、地面がえぐれていくのは言うまでもない。

「（危ね！？面倒な敵だな。でも、まあ、）」
そう思った瞬間。

「『シヨック・サンダ！』」

ツカサとヒカルが雷撃をスピード・ウェーブにぶつける。

「なに！？ぐあー！！」

「（ゼロ距離のこれなら少しは効くだろ…！）」

スピード・ウェーブの注意が驚いたことにより自分から離れた瞬間、一気に加速し跳躍する剣心。

そして、

「バトルカード！ジャイアントアックス！」
剣道などと言う唐竹の要領で切りつける剣心。

ガッキン！

「らあああああああ！！」

ゼロ距離からの一撃。さらに剣心が叫びながら斧を押し込む。

ミシツミシツ・・・

ジャイアントアックス自体の重さと剣心の力による強引な押し込み。

スピード・ウェーブの装甲にもひびが入る。

「くっ！マグネットブレード！」

スピード・ウェーブが前のひれから電気の剣を作り、きりかかる。

「うおっ！？危ね！？バトルカード！エドギリブレード3！」

日本刀を装備する剣心。

そして、

「シュウケキトウセイ
蹴撃刀勢！」

ガッキンツ！

スピードウェーブが打ち込んだマグネットブレードに合わせて剣をふるい、同時にタイミングを合わせてその剣の峰を蹴り威力を上げた剣心。

そして、相手の剣の勢いと蹴った時と剣がぶつかったの反動を利用し一気に距離をとる。

「危ねー。」

「大丈夫ですか!？」

「おいおい、今ので傷がたっただけかよ……しかも、俺ら二人の電撃が全く効いてねえ。」

ヒカルが驚きながら言う。

「そりやね。こつちで言うフルシンクロ状態だから、基本性能は圧倒的に上。電波体を構成する本人達スピード・マグネットが電気属性と水属性なら、フラキオ片方に効果が抜群で片方は属性一致で効果はいまいち、つーかほぼ無効。平均されてふつうのいりよくなるだろうからな。」

「つーか剣心。お前弱点同士はあんまり組むなって言ってたけど、バリバリ相手弱点同士でかなり強いんだけど。」

自分の意見を言った後にヒカルにつっこまれる剣心。

「いや、みんなには詳しく言つてなかったけどフルシンクロに一番重要なのは相性。属性は低シンクロ率で関係があることで高シンクロ率だと関係が無くなる。しかも相手は元から電気フラキオ使えるみたいだから、こつちで言うシンクロ率は相当高いんじゃないか？」

フォルテが自分の意見を言う。

「おいおい、オルカに比べてなんだ？前の敵は試作品ですか？コノヤロー。」

「そうだね……特に防御力が段違いに高い……」

冷汗をかきながら言う剣心に同意するツカサ。

「お前らの目的は何なんだ！なんで俺たちに危害を加える！」

「つてか、黒幕は何者だ？去年のスバル達の敵が復活つてなんでそんな芸当ができるんだ？」

ヒカルとツカサが聞く。

「ふん。冥土の土産に教えてやろう。我らは飛行者エビエター。デューオ様を筆頭に宇宙の悪を粉碎する組織。我らのような戦闘員はデューオ様が宇宙に漂っていた様々な電波体の残留電波を保存。必要に応じて体をデューオ様に構築し、様々な力を与えてくださる。この星は、デューオ様に悪が満ちている判断された。それ故私達はデューオ様

に従いこの星を破壊する。」

「『『『!?!?』』』』」

四人が驚く。

「そんな・・・この星には悪なんて・・・」

ツカサが言いかけるがそれを遮ってスピードウェーブが続ける。

「この星の時間で、一年前から現在まで三回も地球を滅ぼそうとした輩がいるのか？確かに最初はこの星の者ではなかった。しかし、残り二回はこの星のものだろう。安心しろ。この星を破壊したのと最初にこの星を侵略しようとした輩たちの星は破壊してやる。貴様も、そいつらの片割れだろう？だったらなぜ悪が無いと言える。」

「

『『『ぐ・・・』』』」

ツカサとヒカルが黙り込む。

確かに二人は去年スバルをだました。

スバルは気にして無いが、ツカサの中ではまだふつきれてないところがある。

すると、

「まあ、しゃーねーか。確かにお前らは正しい。」

「『『!?!?』』』」

突然の剣心の言葉に驚くツカサとヒカル。

『てめえ剣心何言って・・・!?!?』』』

ヒカルが言いかけるが剣心の表情を見て口をつぐんでしまう。

そう。彼は・・・笑っていた。

「そりゃそうだ。善だの悪だのなんて個人やグループの価値観だ。自分達と同じ考えだから善。違うから悪。そんなもんだ。よく正義は勝つなんて言うけど当たり前だよなあ。勝って価値観押しとおした方が正義なんだから。」

「ふむ・・・なら私達が正しいと思うなら私達の価値観を受け入れたらどうだ？」

スピード・ウェーブが剣心に聞く。

「ふつ。確かにお前らは正しい。……それはお前らの価値観
でだ。別に俺は色々な奴の正義を見てきたし、その正義を壊してき
た。だから、お前らの意見には別に異論はねーよ。単純にお前らの
価値観とこの地球にいる奴らの価値観がかみ合わないだけだし。」

「なら私達に「だがな。」「!？」」
スピード・ウェーブの言葉を遮る剣心。

「俺の中にある正義。この正義に反する者には俺は自分の正義を
押し通す！これすなわち悪・即・斬！この俺の生き方^{信念}を俺は死ぬま
で押しとおす！」

「……かつこいいね……剣心君……僕には真似できないよ。」

「ハハハ、実は悪・即・斬は違う次元の知り合いの信念でね、俺
もカツコつけて真似してるだけなんだ。」

ツカサの言葉を笑って返す剣心。

「ふつ、ならば私の正義を押し通すだけだ。」
スピード・ウェーブが言う。

「はあ。まあ、そうなるわな……ツカサ、ヒカル。悪いけど、
フルシンクロして。どうせ出来んだろ？つーか双子みたいなお前ら
ができてないとスバル達絶望的なんだけど。」

「良く分かったね。僕らがフルシンクロ出来るって。」

『はっ！言われなくてもやってやらあ！行くぞツカサ！』
「うん！」

【ツヨイキズナヲカクニン。シンクロ率80%。フルシンクロス
タンバイ……】

「『フルシンクロ!!』」
ツカサとヒカルが高らかに叫ぶ。

すると、二人の体が光となり一つになる。

そして体を包むように発生した風で土煙を起こしながら光が次第
に弱まる。

キイイイイイ……………

そして次第に一部一部が見えてくる。

金色の機械的な両腕。

左側が白で右側が黒の体。

………シューウウウウ

完全に土煙が晴れた時、その電波体は高らかに自分の名前を告げる。

「フルシンクロ！デュアル・スパーク！！」

24 シーサイドタウンの戦い（後書き）

うんぐダグダwww

ちなみにスバルや暁等のようにカードディスプレイを持たないメンバー目を覆っているバイザーに表示、音声認識と思考認識でバトルカードやフルシンクロを使います。

ヒカルは電波体なので思ったただけで使えます。

25 グリーンタウンの戦い(前書き)

どうも、駄目作者ことJoker02です。

かなり更新が遅れてしまいました・・・

受験生なので一カ月に三〜四話更新、もしくは一カ月に一回になる
かもしれませんがよろしく願います。

25 グリーンタウンの戦い

「グリーンタウン」

「行くぞ！ いけ！ ミサイルバード！」

クラブ・コンドルが鳥型のミサイルを大量に発射する。

「オックスフレーム！」

「グレイブクロー！」

ゴン太が火炎の息を、ジャックは爪型の黒い炎を発射し撃ち落とす。

しかし、ありえない量のミサイルに自分達に回ってこないようにするだけで精いっぱいのようなのだ。

「うおおおおおおお！」

「ちつ。なんて量だ！」

ゴン太が雄たけび、ジャックが愚痴をもらす。

「・・・ガンデルソル！」

キルアが右手に銃を装備。そして、

バンツ！

一発撃つ。すると、

ガンツガンツ・・・！

弾はミサイルに当たるとそのまま違うミサイルにあたり、反射を繰り返して大量のミサイルを貫いた。

「な！？」

「いやいや！？」

相手どころか味方であるジャックまで驚く。

「どうやったんだ？」

ゴン太がキルアに聞く。
すると、ソルが答えた。

『弾が当たつても芯を捕えてなきや弾かれる。キルアは一瞬でミサイルの軌道を計算、更にガンデルソルの弾の硬度を調節して多くのミサイルを貫くように計算したんだ。』

「まあ、PGMの力とソルの力も借りてるけど・・・ね！」

ガチャッ

そういつとキルアがガンデルソルを構える。
そして、

バンッバンッ！

たった二発。計三発の弾丸で

ドドドドドドドドドドカーンッ！

全ミサイルを撃墜した。

「な!？」

「んで？お前らの目的は？後、俺らが見つけたロケットとお前ら関係あんの？」

肩にガンデルソルを担ぎながら問うキルア。

「・・・ふむ、良いだろう。我らは飛行者^{エビエーター}。デューオ様を筆頭に宇宙の悪を粉碎する組織。我らのような戦闘員はデューオ様が宇宙に漂っていた様々な電波体の残留電波を保存。必要に応じて体をデューオ様に構築し、様々な力を与えてくださる。この星は、デューオ様に悪が満ちている判断された。それ故私達はデューオ様に従いこの星を破壊する。」

「『『『』』』!?!?!?』『』『』『』『』」

全員に衝撃が走る。

「それからその銃使い、貴様の質問だが、恐らくそれは我らの基地のようなものだ。そこに我らがデューオ様が居られる。」

「……んで、お前らを従えてるって事はお前らより強いはずのデューオ様つてのが直接地球を襲つてこずに、お前らをよこして理由は?」

キルアが問う。

「それは簡単なこと。悪に満ちているこの地球を壊す際、必ずこの星のものは反抗するであろう。破壊する時に最も邪魔になる者は先に排除するのが定石であろう。」

「だから去年地球を三回も救ったスバル達に仕掛けたのか?」

「当然。電波人間のトップクラスの星河スバルや暁シドウ等を倒せば他の奴らなど造作もない。もちろん兵器の類たぐいもな。」

「なるほど……じゃあ来るやつ全部倒せばいいね。」

キルアが不敵に笑いながら言う。

「『『『』』!?!?』『』『』『』『』」

「おい、キルア!分かつてんのか!?こいつが言ってることが!」

「分かつてるよ。訳わかんない理由で地球を壊そうってんでしょ?なら阻止するにきまつてんじゃない。」

「だけど……こいつが言ってる危機の中に俺らが関わってる!

俺は……」

「……」

ジャックとゴン太が押し黙る。

「……はあ〜!こら〜!ゴン太にジャック!しっかり戦いなさ〜い!」

「『!?!?!委員長!?あれ?』」

キルアがルナの声で怒鳴る。

「ったく。そんなもんなのか?お前達の信念は。お前達は自分が

過去にやったことのせいで自分の仲間や友達を危険にさらすような馬鹿じゃねーだろ。過去にやったことのせいで攻撃できなくなるんじゃない、今自分の信じる正義を押し通しやがれ。」

「……この二人にとってよりは自分に行ってるみたいだけどね……」

ソルが思う。

キルアと剣心の過去を知っているからこそこんな感想を抱いたのだ。

「……！？そうだな……俺は自分の守りたいものを守る！」

「俺も絶対委員長はキザマ口達を守る！」

二人が力強く言う。すると……

【ツヨイキズナヲカクニン。シンク口率70%。フルシンクロス
タンバイ……】

「「これって!?!」」

ポップアップが表示される。

「(？何があった？少なくともこっちにとっては不利なことは
ず。なら……) ウッドランス！」

地面から木のくいが伸び、三人を襲う。

「二人は一緒の方向に飛べ！」

キルアの指示でゴン太とジャックは右に飛び、キルア本人は上に
飛ぶ。

「あまい！ミサイルバード！」

ミサイルが一行に並びながら空中で受け身の取れないキルアに迫
る。

「ちっ！ガンデルソル！」

ガチャッ

キルアが右手の銃で撃とうとする。

しかし、

「……！？な！？後ろから！？……つてかヤベ！？」

超直感で後ろからもいくつか来ることを察知したキルア。

しかし中途半端なタイミングで気付いたせいで若干反応が遅れる。

「キルア！？」

「決まった！」

ゴン太とジャックが叫び、クラブ・コンドルが笑いながら言う。
しかし、

バンバンバンバン！

キルアがすべて撃ち落とす。

「な！？」

「ったく……久しぶりだな……電波変換して銃を二つ取るの
は……」

驚くクラブ・コンドルを尻目に二つの銃を構えるキルア。

「っーか、その炎属性二人組。とつとフルシンクロしろ。」

「……ああ、行くぞゴン太！」

「おう！」

「フルシンクロ！」

二人がポップアップをタッチし高らかに告げる。
すると、二人の体が光となり一つになる。

そして体を包むように発生した風で土煙を起こしながら光が次第
に弱まる。

キイイイイイ……………

そして次第に一部一部が見えてくる。

頭部のオックスファイアのそれより小さな角
背中にある四枚の羽

ゴン太とジャックの体型を足して割ったような体

重厚感が漂う赤と黒の装甲

・・・・・シユウウウウ

完全に土煙が晴れた時、その電波体は高らかに自分の名前を告げる。

「フルシククロ！ファイア・コーヴァス！」

25 グリーンタウンの戦い（後書き）

フルシンクロの下りやセリフが固定されているのは仕様です。下りは機械だから、セリフは人工的な生命体だからです。

26 スカイトウンの戦い(前書き)

自分に聞きたい。

テスト前に何をしているのかと。

今回は短めです。

26 スカイトウンの戦い

「スカイトウン」

「……」

スカイトウンでは睨み合いが続いていた。

キルアや剣心のように“攻撃は最大の防御”や“最小限の防御で間合いを変更し相手を翻弄”、“オールレンジ全距離対応”等と言った戦闘タイプではなく、“攻撃時は攻撃、防御時は防御”や“自分の得意な間合いに引きずり込む”、“ショートミドルレンジ近・中距離特化”等と言った戦闘タイプの咲夜と妖夢。

二人は相手のすきをつかがいながら、現在戦闘力未知数の相手とどう戦うか、思考中である。

「ふむ、まったく隙が無いな。」

「そりゃ、どうも。」

「お褒めいただき光栄です。」

ダイヤ・ブリザードの言葉に答える二人。

もちろん一切隙は見せてない。

「……このままじゃちが明かない。……こちらから仕掛ける

！」

「アクセル・タイム！」

咲夜が告げる。すると、一瞬でダイヤ・ブリザードの後ろにナイフを逆手に構えた咲夜が現れる。

「何!？」

「もらったあ！」

驚いたダイヤ・ブリザードに高速で接近する妖夢。

普通ならこれは確実に入るであろう攻撃。

しかし、

ガッキン!

「え！？」

「い！？」

二人が驚く。

ダイヤ・ブリザードは自分の手に氷をまとわせてガードした。

「喰らえ！ダイヤモンド・ダスト！」

「クッ！」

凍っている相手の腕を蹴り離脱する二人。

そして距離をとりまた探り合い。

「・・・それで・・・あなた方の目的はなんですか？」

「それと貴方がたのボスは何者なんですか？」

咲夜と妖夢が相手に問う。

「・・・ふむ良いだろう。我らは飛行者^{エビキター}。デューオ様を筆頭に

宇宙の悪を粉碎する組織。我らのような戦闘員はデューオ様が宇宙に漂っていた様々な電波体の残留電波を保存。必要に応じて体をデューオ様に構築し、様々な力を与えてくださる。この星は、デューオ様に悪と判断された。それ故私達はデューオ様に従いこの星を破壊する。」

少し思案してから告げるダイヤ・ブリザード。

「・・・それで？」

「何？」

「それがなんだというんですか？他人を、この場合は星を自分達のものさしで測る。・・・それ自体は別に構いませんよ。私達もそうやって正義と悪を定義してますし。」

「だから、私達は私達のものさしから定義して、あなた方を悪と認識します。それで万事解決でしょ？」

そう咲夜と妖夢が告げる。

「では貴様らは我らにあくまでもは向かうと？」

「「ええ。」」

「しかし、今の攻防で分かった通り貴様らでは私に隙を作っても

倒すことはできない。それでも我とやるか？」

ダイヤ・ブリザードの言葉に二人は決意を込めた声で言う。

「私の師匠達は、どんな状況でも諦めない！なら弟子の私達も絶対に諦めない！」

『まあ、そもそも二人に力をくれたのもキルアと剣心だし、いつも世話になってる二人に恩返しをしたいんだろうな。』

パラディンとタイマーがともに思う。
すると、

「ツヨイキズナヲカクニン。シンクロ率80%。フルシンクロス
タンバイ・・・」

ポップアップが出てくる。

「行くわよ妖夢！」

「ええ！」

「フルシンクロ！！！」

二人は手慣れた様子でポップアップをタッチし高らかに告げた。
すると二人の体が光となり一つになる。

そして体を包むように発生した風で土煙を起こしながら光が次第に弱まる。

キイイイイイ……………

そして体の一部一部が見えてくる。

色と青と緑色の装甲

背中にあるふた振りの日本刀

体の至る所に仕込まれているナイフ

時計と刀をあしらった模様

……シユウウウウ

完全に土煙が晴れた時、その電波体は高らかに自分の名前を告げ

る。

「フルシクロー！タイム・パラディン！！」

26 スカイトウンの戦い(後書き)

やっと、フルシンクロ全部でた・・・

実は今回のフルシンクロの名前タイム・パラディン、タイム・イーターのタイムと、ソウル・パラディンのパラディンから取ったのですが、逆にしなかったんですよ本当は。でもそうすると、某鎌変化男になったんでやめましたwww

・・・勉強しねーとヤベーな本当www

27 セントラルの戦いの終わりと新たな敵（前書き）

久しぶりの更新!!

受験生だけどころ限り頑張ってみます！

27 セントラルの戦いの終わりと新たな敵

「セントラルタウン」

シューティング・ハーブにフルシンクロした、スバルとミソラ。

今、オリガマジックと二人、（実質三人）は睨み合っていた

「ふっ、見てくれが変わったただけでは私を倒せん！」

「それは・・・どうかな!？」

「なに!？」

言葉に力を込め一瞬で後ろに回り込むシューティング・ハーブ。

そして、

「パルス・バスター!」

右手でギターを抑え、左手から音のエネルギーをまとった弾を撃

つ。

「くっ!」

避けられないと判断したオリガ・マジックは手の装甲でガードをした。

ガンッ!

もろに装甲に当たってエネルギー弾が消え去った。

「はっ!」

それを見ていたシューティング・ハーブがさらにもう一発同じものを打ち込む。

「何度やっても同じこと!」

もう一度オリガ・マジックが構える。

しかし、

ガンッ!

装甲にエネルギーが当たったことを示す鈍い音。
そして、

ビキッビキッ！バリーン！

装甲が大きな音を立てて割れた。

「な！？何故！？」

驚きの声を上げるオリガ・マジック。

「共鳴。物には震えやすい周期がある。その周期と同じ周期の音や振動を与えると・・・物は自分の振動に耐えられずに砕け散る。」

静かに言うシューティング・ハープ。

これはハープ・ノートの集音能力とスバルの戦闘能力、そしてフルシンクロによる解析能力の向上のによるものだ。

「く！？クレイジー・アーミーズ！」

大量のナイトアーミーがシューティング・ハープに突進してくる。
しかし、

「シューティング・ストリングス！」

ギターの弦が高速で何本も伸び、数本はクモの巣状に張り本体のガード、残りは高速でナイトアーミーとオリガ・マジックの装甲を貫いた。

「ぐっ！？（何なんだこのパワーは！？）」

驚くのも無理もない、この力は二体の電波体と二人の人間の掛け算によるもの。更にシンクロ率が高めになっているのでロスも少なくなっている。

「驚いてるところ悪いけど、そろそろこっちも事情があるからね、そろそろ終わるよ。」

そう言っつてギターを構えるシューティングハープ。

「く！なめるなああああー！」

するとオリガ・マジックの胸部の装甲が変形し大砲に変化した。

そして徐々に電波エネルギーとノイズのエネルギーがたまってい

く。

「いくら強い装甲でもさ・・・アンプ転送。」

すると、シューティングハーブの左右とオリガ・マジックの左右と後ろと上空にアンプが出現した。

「な!?!」

「音速で四方から撃てば・・・崩れ去るよね?」

「(くっ!?!撃ったとしても奴の左右のアンプからの音で防がれる・

・・・)くそー!ー!ー!ー!」

シンクロフォースヒックパン

「SFB!レクイエムノイズサウンド!」

そう言いギターをかき鳴らすと六つの音の塊がオリガ・マジックにヒット。更に共鳴により威力が倍増する。

「ぐあああああああ!」

ドカーン!

音のあまりの威力に相手は爆散した。

「ふう。」

シューティング・ハーブがため息をつく。

するとシューティング・ハーブの輪郭がぶれ出す。

そして・・・

バシユッ!

二つの光になり、元の姿に戻った。

「ハアハア・・・疲れた・・・」

・・・かなり息の上がつた状態で

「こんなに・・・フルシンクロが・・・疲れるなんて・・・」

ミソラが息を切らしながらへたり込んだ。

「これは・・・確かに・・・予想外だね・・・ハハハ・・・」

スバルも乾いた笑いをしながら膝に手を付けた。

「おいおい、行方不明扱いの犯罪者のお前がサテラポリスの前に来るとはどういう了見だ？」

暁が聞く。

「ソフフフフ。それは、私が君達に勝てる力を手に入れたから倒しに来ただけだよ。」

ファントムブラックが答える。

「どういうことだ？」

ジョーカーが聞く。

「ソフフフフ。話せば長くなるが、私は前回の一件で電腦の隙間に落ちた。しかし、サテラポリスに気付かれないようにノイズウェーブから宇宙に行った。そこで私は君達を恨んだ。・・・本当に・・・心の底から・・・すると先日、あの方にあつたのだ・・・そうデイーオ様に。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！？？」

「あの方は君達ちにオルカが負けた後で、私が君達と戦ったことがあると聞くと私に取り引きを持ちかけた。私に力を与え、何体かの過去の電波体を指揮する権限を与える代わりに、デイーオ様の部下になり地球を破壊する手伝いをしと・・・。」

ファントムブラックは少し間をおいてまた話し出した

「私は君らを倒すためなら地球などどうなってもよかった。だから私は力を得た。そして、私はこの修学旅行中君らをずっと見張った。そして今日、君らが一番気を抜いているであろう修学旅行の最終日にこの作戦を実行した。」

「作戦と言うのは？」

クインティアが聞く。

「ソフフフフ。まず最初に君らを観察し、隙を見つける。そこから君らの戦力を分断。そして分断先で数に物を言わせ体力を削る。まあ、あわよくば君達が負けてくれればこっちとしては簡単だと思っただが君達のことだ。新しい力で切り抜けると思ったよ。そして最後に憔悴しきった貴様たち全員を・・・私が倒す。」

「ハッ！いくら俺達が体力使ってるったってお前一人に対して俺達は五人！」

「多勢に無勢です。逃げる方が得策では？もつとも、私達には逃がす気などありませんが。」

ウォーロックとアシッドが言う。

しかし依然フロントムブラックは余裕の表情だ。

「ンフフフ。それよりも君達のフルシンクロという力は本当に素晴らしいね。今の私では倒せそうにない。」

「……何が言いたい？」

暁が問う。

「ンフフ。単純な話だ。なぜ君達は私に、電波体同士の融合ができないと決め付けた？」

フロントムブラックが手を横に振り上げるとそこにもう一人のフロントムブラックがいた。

「………！！！？？」

「ンフフフ。紹介しよう。私の人格データを核としたフロントムブラックだ。」

「待て！！」

「もう遅い！！」

すると二人のフロントムが風に包まれた。

「ンフフフ。君達はこれをフルシンクロと呼んでいるね。私達はこの呼ぶ……電波体合成と！！」

すると二人の体が光となり一つになる。

そして体を包むように発生した風で土煙を起こしながら光が次第に弱まる。

キイイイイ……………

そして次第に一部一部が見えてくる。

仮面のような顔、

先端に銀色のカラスの頭がついたステッキ、

長いマント、
黒くなった装甲、
そして……

……シューウウウ

完全に土煙が晴れた時、その電波体は高らかに自分の名前を告げる。

「キメラ！ レイス・アンデット！」

27 セントラルの戦いの終わりと新たな敵（後書き）

フルシンクロでの初戦闘。疲れ過ぎだと思つが気にしないww。
ちなみにレイス＝幽霊です。
共鳴つて本当に凄いですよ？
文章の書き方が違つかもしれません。ご了承ください。

私用日記

ハリポタPART 3 D面白かったです。

奥行きスゲーww

でも、原作大事にしてほしかった……。 （全シリーズを通してですが。）

後、呪文の描写も統一してほしかった……。 （全シリーズを通してですが。）

ついでに、作者の夏は終わりました。 （作者は陸上部です。） 男子百メートル県大会準決勝落ちでした。

……。これで悩むのって贅沢なんでしょうか……。

28 シーサイドの戦いの終わり (前書き)

ども。若干荒いですが楽しんでください

28 シーサイドの戦いの終わり

「シーサイドタウン」

デュアル・スパークにフルシンクロしたツカサとヒカル。

そして剣心はスピード・ウェーブと睨み合っていた。

「悪いね、速攻で終わらせるよ。」

「んじゃ、俺は後方支援で。」

デュアル・スパークとキルアが構える。

「（なんだ！？この圧力は！？）やれるものなら・・・」

そこまですうとデュアル・スパークの姿は消え

「あっそう。」

「なに！？」

一瞬で後ろに移動していた。

そして右手を殴るように構える

「はああああああ！」

デュアル・スパークが力をためるとそこに電気がたまっていく。

「バズーカ・サンダー！」

すると電気の弾丸がスピード・ウェーブめがけて飛んでいく。

「くっ！？サンダ プレス！」

間一髪でスピード・ウェーブが電撃を放つ。

バリバリバリ！

二つの電撃が当たり拮抗する。

「良いのかなあ、もう一人いる敵に注意払わなくて？キャノン×
キャラクシアードパンス

3！GA、インパクトキャノン！ミニグレネード×3！GA、ビツクグレネード！」

すると剣心の右手が薄い紫色のキャノンになり、左手には大きめの球体型のグレネードが転送される。

「喰らえ！」

そういつと剣心は左手に持ったグレネードを投げ、時間差で同時に当たるようにキャノンを撃つ。

ドカン！

「グッ！？」

着弾によって少し力が抜けたスピードウェーブ。そこに容赦なく雷撃も当たる。

バリバリバリッ！！

「ぐあああああ！！」

すると、スピード・ウェーブの装甲に剣心がつけた傷からヒビが広がっていく。

「よし、俺が時間稼ぐからディアルは必殺技の準備！」

「了解！」

「じゃあ！バトルカードエドギリブレード×2！」

そう言いながら飛び上がった剣心の両手に日本刀が転送される。

三枚目なので威力も一枚目より遙かに上だ。

「グッ！？マグネット・ソード！」

ギリギリでカウンターの要領で剣心を斬りかかるスピード・ウェーブ。

「ハッ。呆気ないものだなあ！」

なんとスピード・ウェーブの剣は剣心の身体切り裂いた。

しかし、

「・・・何！？手応えが無い！？」

すると、斬られた剣心が霧散する。

そう、幻術。しかも霧の死ぬ気の炎を練り込んだ幻術だ。
中の上クラスの術士でも見破れるかあやしいほど精巧な幻術。
初めて幻術をみたスピード・ウェーブが見破れなくても仕方無い。

「オイオイ、この程度の幻術見破れよ」

「!?その声はフォルテ・クロス!!何処だ!?!」

「なあ、敵に後ろ取られて良いのか?」

「!?!」

スピード・ウェーブが後ろを振り向く。

が・・・

「誰も居ない!?!」

「ハ〜イ残念!飛天御剣流 双龍閃 改!」

するとスピード・ウェーブが振り向いた方の逆側、つまり元の正面から剣心が現れ、右手は順手、左手は逆手で持った二刀流で右手からスピード・ウェーブの装甲のヒビの周辺を
斬りつけ地面に吹き飛ばした。

ガイン!ガイン!

ピシッ!

スピード・ウェーブ装甲のヒビがさらに広がった。

双龍閃とは本来、居合切りの際、抜刀がかわされた場合に無防備になる為、斬撃の勢いを利用した鞘ひたでの次撃に繋ぐ二段抜刀術。

しかし、バトルカードには鞘かたながつかないので代用としてもう一刀、刀を使った剣心とキルアのオリジナル技が双龍閃 改だ

「(でもやっぱり飛天御剣流ひてんみつるぎじゆう使うには鞘は欲しいな)。バトルカードのデータ新しいの作ろうかな?もしくは改造とかか?」

剣心がそう思っているとスピード・ウェーブは地面にたたきつけられヒビが広がる。

ガンッ！

ピシッ！

「グハッ！グッ！」

「あゝあ。戦闘中で確証無いなら敵の言うこと本気にすんなよ。・
・それから」

「・・・！？（身体が・・・動かない！？）」

「今の攻撃にグラビティプラス付けといたから。まあ、君なら二分
で解くだろう。けど二分あれば・・・」

そこで剣心が言葉を切る。すると何処からか音が聞こえてくる

バチバチバチッ・・・

すると剣心は不適な笑みをうかべて告げる。

「君を殺すにはお釣りが来る。」

剣心の後ろではディアル・スパークが両腕を前に出し、最大まで
電気を溜めていた。

「な！？」

「いけ！二人とも！」

「はああああ！！シンクロフォースピックバンディアル・サンダー！！」

そう言うときディアル・スパークは一步踏み込み両手を構え、両腕
を同時に突きだした。

すると雷撃は龍の形となりスピード・ウェーブを襲った。

「ぐああああああ！！」

ピシッピシッ！

雷撃のあまりの威力にスピード・ウェーブの装甲にヒビが広がっていく。

「グツ。デユ、デユーオ様と我ら組織、飛行者エビエーターに栄光あれええ！」
スピード・ウェーブがそう叫ぶと装甲は限界を迎えた。

ピシッピシッ！ バリーン！

「ぐあああああああ！！」

ドカーン！！

スピード・ウェーブは爆散した。

「ふう。」

ディアル・スパークがため息をつき、しばらくすると輪郭がぶれだす。

そして

バシユッ！

二つの光に分かれてツカサとヒカルが元に戻る。

「『ハアハアハア……』」

「……訂正、完全に元々ではなく、息のあがった状態で

「この前やって……覚悟してたけど……」

「分かっててもやっぱキツイぜ……チクシヨウ……」

「大丈夫か？」

剣心が声をかける。

「『まあ……一応……』」

「こんなに説得力無い一応久しぶりだな〜オイ。リカバリー系使っ

て休んでろ。」

「了解……。」

ツカサとヒカルがリカバリー系のバトルカードを使って休みだした。

「数分後」

ツカサとヒカルの息も落ち着き始めてきた。

「そろそろ回復したか？」

「ええ。本調子ではないですけど大体は。」

「こっちもそんな感じだ。」

「そうか。んじゃスカイタウン戻って一般人の避難でも手伝うか。」

剣心がそう言って進み出した時、

P i P i P i P i !

「（！？むっちや嫌な予感！？）」

緊急通信が来た。

「剣心！緊急通信！」

「分（わ）ってる！繋げて！」

「ツカサ、こっちもだ！」

「繋げて！」

すぐに剣心とツカサはつながせてもらう。

ザ……ザザアア……

ノイズが若干入った後に暁の声が聞こえてきた。

28 シーサイドの戦いの終わり (後書き)

緊急通信の内容は後二話か一話で後二つの戦場の戦いが終わったら書くので誤植でもミスでもありません。

8/3 一部修正

29 グリーンでの戦いの終わり（前書き）

遅くなりましたがミソラちゃん誕生日オメ！

29 グリーンでの戦いの終わり

「グリーンタウン」

「（フルシンクロしたは良いがやっぱ付け焼刃だな。ここは・・・）
ファイア・コーヴァス！速攻で方をつえるぞ！突っ込め！」

「了解！」

こちらの戦場では睨み合いなどせず、直ぐに戦闘が開始されていた。

短期決戦に持ち込みたい理由は簡単である。

フルシンクロというものは普通は反発するものをPGMプログラムの力を使って強引に一緒にしたもの。

例えば磁石の同じ極を磁力を小さくして強引に近づけるようなものである。

磁力はシンクロ率が低ければ低いほど大きくなり高ければ高いほど弱くなる。

そして小さくするのはPGM。そしてそのPGMのエネルギー源は本人達の体力だ。

よって、シンクロ率が70%の二人が消費している体力は大きくなる。

故に速攻。

・・・しかしそれとは別にもう一つの理由もある。

「（・・・なんだこの嫌な予感は！？だがこちらは恐らく負けない・・・他の所か！？・・・とにかくすぐに対応できるようにこっちをフリーにしねーと・・・！）」

何かが起こる。

そうキルアが直感しているからこそその速攻でもある。

「！？クツ！バードミサイル！」

多数のミサイルが飛来してくる。

だが・・・

「うおおおお！ファイア・チャージ！」

「ハッ！効くかよおお！ガンデルソル！」

ファイア・コーヴァスが炎に包まれながら突進し、キルアが後ろに続きながら銃を駆使し対処する。

そしてファイア・コーヴァスは飛翔し一気に距離を詰める。

「な！？」

「うおおおお！グレイブ・パンチ！」

ファイア・コーヴァスの右手が黒い炎に包まれる。

そしてそれを突進と飛翔した時の勢いのままに殴りつける。

ドンッ！

「ぐ……は……！！！？？」

体をまげてふっ飛ばされるクラブ・コンドル。

しかも飛んで行った先では……

「バトルカード！ハンマーウエポンX！」

巨大なハンマーを持ったキルアが待ち構えていた。

「らあああああ！」

ドンッ！

「がつ……！！！」

殴られたクラブ・コンドルは……

ドーン！

高速で地面に叩きつけられた。

「……やりすぎじゃないか？」

「まあ、良いじゃ〜ん。……変なところで気を抜くとロクなことが無い……。」

ファイア・コーヴァスと共に着地を軽く流すキルア。

「ああ、確かにそうだけど・・・」それに、「!?」

「・・・この程度でデリートされるほど・・・相手も弱くない・
来るぞ!」

キルアがそういうと大量の種子のようなものが転がってきた。

「ジャイアント・シード!!」

「任せたく」

「了解!ヘル・バーニング!」

そついいファイア・コーヴァスが地面を殴ると黒炎が地面からわき上がり種子を燃やし尽くす。

「・・・!?上か!」

キルアが上を見るとそこには翼にエネルギーを溜めたポロポロのクラブ・コンドルがいた。

「ゼエ・・・ハア・・・うおおおお!!ウイングレーザー!!」

緑色のレーザーが二人に迫る。

「・・・少し時間作るから大技使え。」

「了解!」

そついうとキルアは右手の月と左手の闇の指輪リングに炎を灯す。するとその炎はそれぞれの手のガンデルソルに吸収される。

コオオオオオ・・・

「ノッテ・インパート夜の衝撃!」

ズガガガン!!

それぞれから三つ、計六つの弾丸が二つずつそれぞれのレーザーに当たり一瞬押し返す。

しかし、徐々に押し戻されてきた。

「へへ押し返されるか。まあ、限界まで吸収させると時間時間も

かかるしね。まあ……」

そこで言葉を切り不敵な笑みを浮かべるキルア。

「十分稼げたからいいか！」

「うおおおお！！！！シンククロフォーエスビックパン SFB！ペインフル・ブレス！」

ファイア・コーヴァスの口から出た黒炎が三本のレーザーに当たり拮抗する。

バリツバリツ……！！

ぶつかった所から電波エネルギーがスパークする。

しかし二つのエネルギーはどちらに偏ることもなく完全に拮抗していた。

「ぐ……！」

苦しそくに顔をゆがめるファイア・コーヴァス。

徐々に押し戻されてくる。

「ふはははは！そのままつぶれる！」

高らかに笑いながら言うクラブ・コンドル。

もし、このままいったらファイア・コーヴァスのフルシンクローは解けていただろう。

そう。もしだ

「……バトルカード、リユエンザン……！」

キルアがそう言うのと、キルアの右手に炎の剣ツルギが転送される。

そして、キルアが足に力を込め……。

「フウ……」

軽く息を吐き、

「時雨蒼燕流……こうしきはちのかた 攻式八の型……」

一気に跳躍した。

そして……

ガガガガッキンッ！！

ドンッ！

「・・・篠突しのつくく雨！」

「何！？」

キルアの連続切りがクラブ・コンドルの右翼のレーザーの発射口を破壊した。

更に、

「バトルカード、ファイアバズーカ3！」

左手を巨大な大砲を転送し、

ガチャ！

ズガガンッ！！

ドンッ！

見ずに二連射し、左翼のレーザーの発射口を破壊した。

「・・・三つのレーザーで構成されてたんだから、今のあなたの攻撃の威力は単純に三分の一・・・あなたの敗けだ。」

キルアがそう言った途端にレーザーが押されだす。

そして、

「ぐあああああああ！！」

完全にクラブ・コンドルが炎に包まれた。

「グッ！頭に乗るなよ、地球人！貴様らの考えが正しいとは限らん！貴様ら地球人の考えによって、地球に悪が充満しているのだ！貴様らは我が同士達に倒される！結局貴様らは寿命が延びただけに過ぎない！そして倒されて、初めて自分の過ちに気づくのだ！」

クラブ・コンドルが叫ぶ。

そして、

「ぐあああああああ！」

ドカーンッ！

クラブ・コンドルが爆散した。

「……自分の考えは正しい？……自分の過ちに気づく？……もう、知ってるよ。自分の考えを正しいと信じて、過ちに気づくのが遅すぎたんだからな。……俺らは」

『キルア……』

「大丈夫。それよりも……向こう。」

『え？』

キルアが指した方をソルが見る。

すると、そこにはファイア・コーヴァスがいた。

しかしすぐに輪郭がぶれだす。

そして

バシユッ！

二つの光に分かれて元に戻るが、やはり……

「ゼエ、ハア、ゼエ、ハア……ゲホ……」

相当息が切れていた。

「ハア、ハア、ツカサ達の見えて知ってたけど……やっぱり……きつい……」

「腹……減った……」

『かなり、きついぜ……』

『ブロロ……ロ……』

「大丈夫か……ってどう見ても駄目か……あーしゃべんなくていいぞ。」

ジャックがしゃべろうとしたのでキルアが遮る。

『ちよつと休憩する？』

ソルの言葉に四人は頷いた。
その頃、シーサイドでの戦闘はまだ続いていた。

〓二十分後〓

リカバリー系のカードを使い休息していた六人に突然、

P i P i P i P i!

緊急通信が入った。

『キルア!』

『ジャック!』

『ゴン太!』

「「分かつてる!繋いで!」」

ジャックとキルアはすぐに繋ぐが・・・

「ゴン太あ!!早くつなげえ!通信回線は電波体とパートナーの
無いと開かないんだよお!!」

「お、おう!?えつと・・・繋いでくれ!」

ゴン太はキルアに一喝されてから繋ぐ。

「(オイオイ、頼むから嫌な予感当たってくれるなよ・・・!?)」

しかし、キルアの考えはむなしく散ることになる。

ザ・・・ザザアア・・・

ノイズが若干入った後に暁の声が聞こえてきた。

29 グリーンでの戦いの終わり（後書き）

途中携帯で打った文章つなげたんで変なところがあるかもしれない。
ん。

・・・塾のテスト（社会）で26問中12・・・受験生としてヤ
バイ・・・そろそろまじめにやらないと・・・

ご意見ご感想お待ちしております

8/20 題名に誤字がああ！！

30 スカイトウンでの戦いの終わり。そして……(前書き)

長らくお待たせしました。

さらに言えば久方過ぎて話が荒く長いです

30 スカイトウンでの戦いの終わり。そして・・・

「スカイトウン」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「こちらでは、タイム・パラディンとダイヤ・ブリザードが睨み合っていた。」

すると・・・

トーンッ、トーンッ・・・

「？」

タイム・パラディンがリズムよく小さくジャンプでした。

「・・・まずは縮地・・・行きます！」

「！？」

ビュン！

ギンッ！

ピシッ！

「な・・・！？」

「ぶつつけでもうまく行きましたね・・・問題は速すぎてまだ体が追いつかない・・・二人は、これ以上の速度出してたのですか・・・まあ、二人の縮地を見てよかったって事にしときますか。」

加速中に出現させた電気属性のスピリチュアルソードで高速で近づいてからの居合切り。

ぎりぎりガードに回したダイヤ・ブリザードの手の氷に傷がつ

く。

「く!? 速くなったところで威力などたかが知れている!」

「確かにそうですね速くなって抜刀のタイミングがずれました。次は・・・切り裂きます!」

カチャッ・・・

刀を構えるタイム・パラディン。

そして・・・

ビュン!

一気に距離を詰める。

「(速い!? だが・・・)」

ブウウン!

ダイヤ・ブリザードが体の脇に氷を出現させる。

「(これなら直撃を避けられる!)」

確かに日本刀型の武器であるスピリチュアルソードの間合いの中に障害物を置けば直撃は避けられる。

しかし・・・

「・・・!」

ダンッ!

刀を抜けば当たるといって、ぎりぎりのところでタイム・パラディンがバックステップを踏み・・・

ビュンッ！

どこかのタイミングで出したであろう電気属性のチャンドラナイフを投げる。

ザクザクッ！！

「ぐ……！？」

「私達の合体前の戦闘法を忘れましたか？」

そういうと、すぐにダイヤ・ブリザードの周りを高速で移動し・

ビュビュンッ！！！！

何本ものナイフを投擲した。

さらに……

ザザザザンッ！！

居合いではないが、高速の斬撃をナイフの間を縫ってダイヤ・ブリザードに加えた。

「ぐっ……！？」

「遅いですね。止まってい見えますよ？そろそろ……」

カチャッ……

「最後です……！！」

そう言い、少し距離をとり、刀を水平に構える。

そして、

ブンッ！

刀を思いつきり振るとそこから紐状のエネルギーが放出され相手に絡みつき、自由を奪った。

「なに！？」

「トルダ・カデーナ」

「縄拘束。まあ、あなたなら二分もあれば解くことができるでしょう。でも一分あれば・・・」

キイイイイイ・・・

「あなたを倒せます・・・！！」

「トルダ・カデーナ」
水平に構えた縄拘束が発生している刀とは違う刀といつの間に出現させた

まわりを浮遊する十数本のナイフにエネルギーが溜まっていく。

「スラッシュャーズ・レーザー・・・！！」

ヒュンッ！！

空気が切り裂ける音と共にレーザーがダイヤ・ブリザードを襲つ。

「ぐあああああ！？」（データの接合が・・・切り裂かれて・・・

・！？）

「ダイヤ・ブリザードの体がどんどん掻き消えていく。」

そして・・・

ザアアア・・・

「・・・」

しばらくするとタイム・パラディンの輪郭がぶれだした。

そして

バシユッ!

「少し疲れましたね。でも、作戦もうまくいったし結果オーライ? ってやつですかね。」

「いや、咲夜さんは慣れてるかも知れませんが、初めて時を操った私は無駄に疲れたんですが!？」

『それは、咲夜と妖夢の慣れの差ね』

『まあ、確か目を追うことに疲れの度合い減ってましたしね』

四人の作戦とは常時自分にアクセル・タイムを発動し相手よりも疾く動くこと。

更に、違う技の名前(今回は縮地)を言うことで相手にアクセル・タイムを使ってないと錯覚させ、所々で時間を止めて自分が疾くなったと錯覚させる。

結果、相手に対して終始有利な状況で勝つことができた。

「さてと・・・一番面倒なのが来ますね。」

「あ・・・忘れてた・・・」

ウィーン

すると、退避スペースに通じる通路から

「二人とも・・・説明してもらいましょつか・・・」

「(やばいです。委員長完全に怒ってます。。。!!???)
鬼神を背負ったルナとキザマロが現れた。

「えっと・・・説明しますから・・・?」

「だから、お、落ち着いてください・・・ね?」

『(ヤバい位怖い!?!?)』

『(こんな人なかなかないよ! マフィアでも!)』

四人はおびえながら事の詳細を語った。

|| 十数分後 ||

「・・・というわけで今戦っているんです。」
「今日の戦いも私達を狙ったものでして。」
「そう・・・そんなことになっていたなんて・・・」
「それより他の人たちはどうなったんですか!？」
「今、連絡しようかと思ってたところ。」
「変に早くても邪魔なだけ・・・」

P i P i P i P i!

突然通信が入った。

しかも・・・

『妖夢!緊急通信!』

『咲夜も!』

「繋げて!!」

「ついでにスピーカー入れて二人にも聞こえるようにして!!」

ザ・・・ザザアア・・・

ノイズが若干入った後に暁の声が聞こえてきた。

『はあ・・・はあ・・・遊撃隊全員に通達・・・出来る限り早く・・・
セントラルに来て・・・くれ。』

『何があつた暁さん!!』
剣心の声が入る。

『現在、私達はフロントムブラックが電波キメラ体合成・・・我々で言うフルシンクロをしたレイス・アンデットと交戦中ですが・・・フルシンクロしたばかりの星河スバル、響ミソラがフルシンクロまで十分な体力が無く、現在劣勢。このままでは負けてしまうでしょう。』

』

アシッドがらしくもなく弱気なことを言う。

『暁さん達の中でフルシンクロ出来る人がいないんですか？』
キルアが聞く

『一応俺はティアと試したんだが・・・』

〓数十分前 セントラル〓

「キメラ！レイス・アンデット！」

「スバル！ミソラ！動けるか！？」

「大丈夫です！でも・・・」

「フルシンクロはちよつと・・・ハープは？」

『私もちよつときついわね・・・』

『俺もだ・・・その前に体力が戻ってないからPGMのフルシンクロの機能のセーフティーが外れねえ。』

『では、暁とクインティアがフルシンクロをして私と共に時間を稼ぐ作戦で行こう。』

『そうですね。賛成です。ではいきましょうシドウ。』

「そうだな。行くぞ、ティア！」

「ええ。ヴァルゴ！」

『キヤハハハ！こっちもOKよ！』

【ツヨイクズナヲカクニン。シンクロ率70%。フルシンクロス
タンバイ・・・】

そして、二人はポップアップをタッチし高らかに告げて。

「フルシンクロ！！！！」

すると二人の体が光となり一つになる。

そして体を包むように発生した風で土煙を起こしながら光が次第に弱まる。

クイーンヴァルゴ特有の杖

水を含んでいるような透明がかった鋭利な装甲
目が見える、ヘルメットタイプの頭部の装甲

「フルシンクロ！！クイーン・エース！！」

「んふふふふ・・・かかってこい！」

「言われなくても！」

すると、杖の先端からエネルギーが刀剣状に放出された。

「ウォーター・ランス！いくぞ！！」

「では、こちらも・・・」

パンッ！

すると、レイス・アンデットが両手を合わせた。

そして、

シュルルルル！

手を離すとそこにはステッキが現れた。

「ステッキソード！」

「ハッ！」

「ンフフ！」

バツ！

二人は接近し、そして・・・

ガキンッ！！

刃を交えた。

「まだまだあ！」

「そうこなくては！」

ガンッ！ガガガガガ・・・

アシッド・クイーンとレイス・アンデットは高速で切り合った。

アシッド・クイーンがウオーター・ランスを切りつけ、突き刺せば、レイス・アンデットもさばいて切り返す。

しかし、リーチの差が影響していった。

そして、

「・・・！！貰ったあ！！！」

ドンッ！！

アシッド・クイーンの槍がレイス・アンデットを貫いた。
が・・・

「（手ごたえが・・・無い！？）」

「！！！？アシッド・クイーン！後ろだ！！！」

「何！？」

ジョーカーの声でアシッド・クイーンが振り向く。

そこには、

「ンフフフ！貰った！」

剣を構えたレイス・アンデットがいた。

「（くっ！？・・・間に合わない！？）」

「アシッド・クイーン！」

ドンッ！

スバルがロックバスターを放つ。
しかし、

スツ……。

「消えた!？」

「甘い!」

今度はスバルの後ろにレイス・アンデットが現れた。

「!？スバル君、危ない！マシガン・ストリングス!」

ミソラが技を放つ。

しかし……

スツ……。

「な!？」

今度は体をすり抜けた。

「どういうことだ？」

「まさか……幻覚？」

「……その通り!」「」「」

ウォーロックとハーブの言葉に何重にも増幅されたレイスアンデットの声が聞こえ、

スツスツスツ……

「……!?!??」「」「」

何体ものレイスアンデットが出現した。

『そのまま、どれが本物か分からず、決定打を与えられずに時間が過ぎてフルシンク口が解除。』

『現在、星河スバルもノイズチェンジを使用してますが先ほど申した通り劣勢です……。』
そのまま全員が黙りこむ。

すると……

『……。確認したいことがある。』

剣心が口を開いた。

『キルア、フルシンク口して無いよな？』

『ああ。』

『やっぱりね。』

剣心の声とキルアの声には何か楽しんでいる雰囲気か漂っていた。恐らく二人とも笑っているだろう。

『了解。暁さん、後何分か耐えてください。すぐ行くんで。』

『妖夢と咲夜もフルシンク口しちゃった？』

『え！？』

『い、一応……。』

『どうやら相当強いみたいだがなんだその余裕は。』

ジャックが聞く。

『余裕？違うね。』

『ただ……。久しぶりにいい戦いができそうなんだ。と、いうことで暁さん戦闘に戻ってください。』

『あ、ああ分かった。じゃあ、切るぞ。』

『俺らもすぐ行くぞ。通信切って』

『分かりました。キルア達も気をつけて。』

こうして通信が切れた。

『……。ロックマン様は大丈夫なの？』

『多分暁さんは相手のすきを見つけて通信したんだろうから何とも言えないね……。』

タイムが答える。

『妖夢。早く行きましょう。』

「ええ。キザマロ君とルナちゃんは避難しててください。事が終わったら連絡します。」

こういって二人は周波数を変えてセントラルへと急いだ。

「グリーンタウン」

「なあ、スバル達は大丈夫かな？」

「大丈夫に決まってるんだろ！」

「落ちつけジャック。」

「ブロロロロ！ゴン太も心配するな。」

ゴン太は心配そうに、ジャックは不安をぬぐい去るように言った

「まあ、大丈夫だろ。早く行くぞ。」

「そうそう。間に合うものも間に合わなくなるぞ。」

「「「「！？ああ！！」」」」

こうして三人も周波数を変えてセントラルへと急いだ。

「シーサイドタウン」

「早く行こう剣心君！」

「ああ。早くしねーとスバル達が……！！！」

「だな。行くか。」

「おう。」

この三人も周波数を変えてセントラルへと急いだ。

全員がスバル達のことを心配する中

離れた所で剣心とキルアは違うことを考えていた。

「（クソツ！仲間がヤバいってのにこう考えるって事は俺らもまだまだだな……！！）」

それは、二人がもつとも嫌悪し、戦闘のたびに思ってしまうこと……

「（「（さあ……楽しい楽しい……戦争の時間だ……！！）」

二人の顔には笑みが浮かび、
すぐに嫌悪の感情が浮かんだ

30 スカイトウンでの戦いの終わり。そして……（後書き）

と、いうわけでスカイトウン戦終了です。

全く盛り上がりなかったですねWWW

死に際の言葉考えられませんでした。

受験まであと一カ月少……

作者は英語とか国語の文系嫌いです。

この前のテストも国語でクラッシュしました……

理科とかなら何とかなのに……

ご意見感想お待ちしています。

活動報告もたまに更新するのでそちらもお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2268q/>

流星のロックマン End of the Earth

2011年12月18日11時49分発行